

2022年度(令和4年度)

沖縄県NIE実践報告書



沖縄県NIE推進協議会

【日本新聞協会指定N I E 実践校】

名護市立久辺小学校	1
名護市立大宮小学校	7
浦添市立牧港小学校	15
西原町立坂田小学校	19
久米島町立久米島小学校	27
西原町立西原中学校	35
沖縄県立本部高等学校	39

【沖縄県県 NIE 推進協議会指定実践校】

糸満市立糸満中学校	59
読谷村立読谷中学校	67
沖縄県立辺土名高等学校	73
ヒューマンキャンパス高等学校	85
沖縄県立桜野特別支援学校	89

【資料1】 沖縄県N I E 推進協議会の組織と運動の経過	95
--------------------------------------	----

【資料2】 これまでの実践指定校	107
-------------------------	-----

【資料3】 N I E 実践フォーラム・全国大会の新聞記事	111
--------------------------------------	-----

ごあいさつ



沖縄県 NIE 推進協議会会長
仲村 守和

本協議会は平成12年（2000年）に設立され今年で23年目を迎えました。本会は「教育界と新聞界が協力し、新聞教材の開発、活用の研究と普及を通して、児童生徒の情報活用能力の育成を図ること」を目的として、NIE（Newspaper in Education）活動を推進してきました。協議会の事務局を沖縄タイムス社、琉球新報社が担い、10社の新聞社が加盟し、2018年度からは幹事に県立学校教育課、義務教育課の指導主事が加わるなど協議会組織の強化が図られています。昨今、NIE（教育に新聞を）活動への県民の理解が深まって参りました。これもひとえに県教育委員会はじめ市町村教育委員会や学校、PTA、地域そして加盟各社等のご理解とご協力によるものであります。現在、多くの学校で新聞をツールとした教育実践が推進されています。

2022年11月、坂田小学校（松田邦昭校長）で開催された「沖縄県 NIE 実践フォーラム」は西原町教育委員会（新島悟教育長）との共催が初めて実現しました。西原町教育委員会は町として実践校を引き受けられ、町内の3校を実践校に指定し、NIE 活動の教育的意義を確認し NIE アドバイザーの甲斐崇指導主事が積極的に実践校に関わるなど組織的にバックアップされました。こうした西原町教育委員会の実践はこれから市町村教育委員会の取り組みの参考事例として本県の NIE 活動の活性化や普及・発展に大いに寄与するものと期待しております。

さて、新学習要領における児童生徒の「主体的、対話的で深い学び」を育成するには NIE 活動が有効であると考えます。つまり児童生徒が「主体的、能動的」に参加する授業づくりには「生きた教材」といわれる「新聞」を授業に積極的に取り入れることが肝要と思います。新学習指導要領では「新聞活用」が全ての校種で指導すべき内容として位置づけられていることから、不断の研究が求められています。

この度、2022年度の実践指定校12校の実践概要が本冊子にまとめられました。3年間に及ぶコロナ禍で授業研究が困難な中でも、実践指定校は積極的に授業実践を継続しました。そこには「新聞」を有効に活用し、楽しく有意義な授業の構築が図られ、子どもたちの生き生きとした活動の様子が報告されています。NIE 活動を通して、児童生徒の思考力や判断力、表現力等が培われ

ていることは、NIEの教育的手法が児童生徒の課題解決能力の育成に大きな効果があることを実証しています。

つまり、児童生徒が「自ら学び、自ら考え、判断して行動する『生きる力』の育成」が期待できます。本報告書のねらいは指定校の実践を各学校で共有化することにあります。学習教材としての新聞活用や新聞づくりなどNIEの教育的手法を取り入れ、児童生徒の読解力や表現力、社会性等を培っていく授業実践のためにもNIE活動を各学校で推進していただきたいと思います。

結びに、NIE活動の実践事例としての本報告書が県内の学校や家庭、地域社会など多くの機関で活用され本県の有為な人材育成の一助になれば幸いです。

1 はじめに

本校は、平成28年度よりNIE活動を実践してきました。各学年試行錯誤を繰り返し、学年の特色に合った活動に取り組んできました。主な活動としては、同一記事に対する意見交流、新聞読者欄への投稿や秘話学習の壁新聞づくり、国語科の授業における新聞活用等です。また今年度は教育課程の中にNIEの時間を設け、月2回、朝の時間に各学年で取り組みました。

2 本校での取り組み

- ・高学年で「琉球新報」「沖縄タイムス」「朝日新聞」、中学年で「毎日新聞」、低学年で「ワラビー」を活用。
- ・児童作文などを県紙へ投稿。
- ・NIEタイムを設け、新聞に親しむ活動。
- ・授業と関連付けた取り組み。

3 新聞にふれる環境づくり

- ・校長先生手作りの新聞棚を図書館に設置。県内2社の新聞を月毎に整理し、いつでも必要な新聞を探し出せるようにしています。
- ・新聞を通して児童が地域とのつながりを感じることができるよう、校長先生が児童玄関付近に地域に関する記事を掲示しています。
- ・児童作成新聞を廊下に掲示しています。

廊下に掲示された学校や地域の記事



県内2社の新聞棚



廊下に掲示された新聞投稿の記事



4 実践事例

(1) 低学年の取り組み

① 「慰霊の日」の取り組み

本校では、今年度も外部の方を招いての取り組みができませんでした。そこで昨年同様、いただいた「慰霊の日に向けて」の新聞を活用して、平和教育を行いました。漫画でも紹介されており、低学年でも抵抗なく読み進めることができました。子ども達なりに、平和について考えるよい機会となりました。

② NIE タイム

毎週金曜日に設定されている「NIE タイム」では、教師が紹介したい記事や子ども達が気になった記事などを取り上げていきました。また、紹介しきれなかった記事については、タイトルのみを紹介し、子ども達の興味を引きつけるように工夫していきました。また、新聞に掲載されているクイズなども学級で挑戦し、盛り上がりました。クイズの後には、実際に新聞を手に取り、クイズ話で盛り上がる子供の様子も見られました。



③ 新聞投稿

本校では、新聞に掲載された児童の作文については、全児童の目に触れる廊下に掲示されています。毎朝、記事が増えているか楽しみにしている児童もあり「今日は、〇〇お姉ちゃんのが載っていたよ!」と、嬉しそうに報告してくれました。

一年生は、作文の学習を終えると、「私たちも挑戦してみたい!」と、取り組みを楽しみにする児童が増えました。

掲載されたときには、学級で記事を読み上げて紹介していきました。子ども達は、自分の事のように喜び、学級が温か雰囲気になりました。



(2) 中学年の取り組み

① NIE タイム (毎週金曜日) と総合的な学習

3年生はNIEタイムに「①自分で新聞を選ぶ②関心のある記事を切り抜く③感想を書く」の手順で進めてきました。始めのうちは自分の気に入った記事を選びがちだった子どもたちですが、次第に視野が広がり他国の子どもたちの様子や、今話題になっている社会的な記事が掲載されている新聞も選ぶようになりました。また、どこまでが記事の範囲なのかが分からずに記事の途中で切り抜いてしまう子どもが多かったのですが、記事をよく読むことで記事の終わりも分かるようにもなりました。

NIEタイムで目にしている新聞から子どもたちは、それぞれの記事に小見出しをつけること、写真や絵があると読み手に様子がよく伝わることに気づいていました。それを参考に、総合的な学習の時間で地域の行事について調べたことを新聞にまとめました。初めての新聞作りだったため簡単な新聞になりましたが、見出しごとに記事をまとめることができたので調べたことを読み手にわかりやすく伝えることはできたと思います。これから更に新聞に触れることで、新聞にまとめる技術もついてくると思います。



② NIE タイム (毎週金曜日)

4年生のNIEタイムでは、国語科の授業と連動させて、ウミガメやバリアフリー等の記事を準備して各自で読解し、制限時間の中で自分の考えを書く活動に取り組みました。また、書くだけでなく、友達と読み合い、交流して助言する姿がみられました。教科と関連していることもあり、更なる探求心も出てきて、書くことに抵抗がなくなり、スムーズに書くことができました。

読売新聞のワークシート通信の中から、児童が興味・関心のありそうなものを準備した記事にもペアで一緒に読み合うことができました。新聞を読んでいく中で、わからない語句を自ら辞書を使って調べ、実生活に活かそうとする場面も見られました。興味のある箇所を蛍光ペン等でわかりやすくチェックし、切り抜きをする児童も増えてきています。



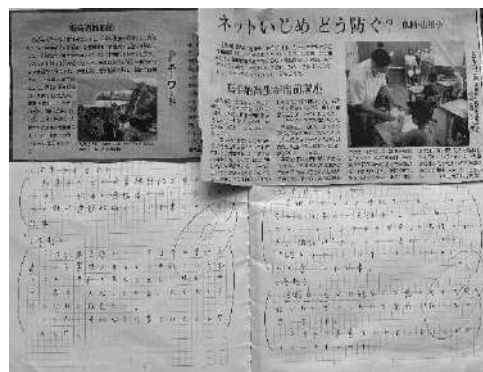
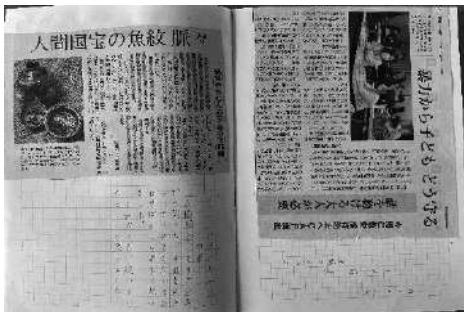
③ 新聞投稿

行事の振り返りや自分が感じたことや感動したことを新聞投稿することで、これまで以上に書く意欲が増してきました。4年生では、毎週金曜日に原稿400字程度の課題を出して取り組ませています。これまで、「海洋体験」や「沖縄高等専門学校見学」といった他校では体験できないことや時事問題等が新聞に掲載され、学校や地域の良さを改めて実感することができました。



(3) 高学年の取り組み

5年生は、国語科の授業で新聞の仕組みを知り、実際に同じできごとを扱った記事を読み比べたりしました。また、情報ノートをつくり、朝のNIEの時間に自分が気になった記事を読み、切り貼りして情報ノートにまとめました。朝のわずかな時間に記事を読み、感想までまとめるには時間がかかり、まとめまでできない児童もいますが、記事を読み合いながら、それぞれの意見を伝え合う姿がありました。普段家庭ではなかなか新聞記事に触れない児童も多く、学校のNIEの時間に様々な記事に触れ、考えを深めている児童もいました。授業では新聞の構成などについて知る際に、実際に新聞に触れながら学習できた事がよかったです。



6年生は、NIEの時間に興味のある新聞記事を選び、その記事を要約し、自分の感想を書く活動を行いました。自分の興味のある記事を選ぶのに時間はかかりますが、その分丁寧に読み、要約・感想を書くことができました。



また、修学旅行やジョブシャドウイングで学んだことを、新聞(AI用紙)にまとめることができました。5年生で学んだ新聞の書き方を確認後、事前学習で学んだこと

や、体験したり見学して学んだ事、感じた事、話を聞いて分かったことなどを新聞にまとめました。それぞれが構成を工夫して作成することができました。

その他に、国語の学習で取り組んだ文章や日記などを新聞に投稿しました。新聞掲載された文章は、学級便りで紹介し、保護者の皆さんにも伝えることができました。

その他に、国語の学習で取り組んだ文章や日記などを新聞に投稿しました。新聞掲載された文章は、学級便りで紹介し、保護者の皆さんにも伝えることができました。

5 成果と課題

(1) 成果

- ・新聞投稿し校内に掲示されることにより、児童の自己肯定感が高まり、新聞記事にも関心が湧いてきた。
- ・新聞投稿で採用された記事を学級通信に載せることで保護者にもNIEの活動を伝えることができた。
- ・朝の時間にNIEの時間を設ける事で児童が新聞を手取る場面設定ができた。
- ・児童が手取る新聞記事の内容が、自分の趣味だけではなく時事内容など、視野が広がっていた。
- ・他教科との関連や学習内容を新聞記事にまとめる際に参考になった。
- ・新聞に掲載されているクイズなどを活用し、低学年でも新聞の活字に触れる事ができた。

(2) 課題

- ・週時程としての活動の時間は短く、記事を深く読みまとめるまでの時間を工夫するのがむずかしかった。
- ・各学年でNIEのやり方にばらつきがあった。
- ・学級担任の負担にならない程度の取り組み方法。
- ・新聞記事の精選が難しい児童への手立て。

次年度、課題解決に向けて取り組む事で、より児童が新聞に親しみ、記事を通して自分の考えを広げられるようなNIE活動を目指していきたいです。

大宮小学校 NIE 実践報告

大宮小 宮城英誉

テーマ「主体的・対話的で深い学びへ誘う NIE」

1. はじめに

大宮小は、本年度より日本新聞協会指定の NIE 実践指定校に認定され、5、6 学年を中心に N I E の日常的な実践を進めてきた。取り組みとしては、親子でつながる新聞スクラップノート、新聞遊びや新聞読み聞かせ、伝え合う力を高める N I E フリートークなど、朝の時間や宿題を通じて「NIE の日常化」を図ってきた。また、授業においては、導入、展開、終末のいずれかで新聞を無理なくワンポイントで活用し、「問いが生まれる授業」を実践してきた。そのような取り組みを通して、本校の校内研主題である「主体的・対話的で深い学びへ誘う教育活動」へ迫っていった。

児童の実態について（6 学年）

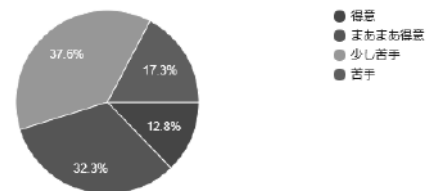
1. 発表することは好きですか？

133 件の回答



3. 文章を書くことは得意ですか？

133 件の回答



アンケートの結果、発表に苦手意識をもっている児童が約 63%、文章を書くことに対して苦手意識をもっている児童も約 55%と共に高く、話すこと書くことに対して半数以上が後ろ向きな意識をもっていることがわかった。このような実態をふまえ、「楽しい NIE」をツールとし、「主体的・対話的で深い学びへ誘う教育活動」の実現に向け歩みだした。

NIE を通してつきたい力

児童生徒の実態から設定した育てたい 3 つの力

- ① 自分の思いや考えを伝え合う力 (思考力・判断力・表現力)
- ② 自分の思いや考えを書きまとめる力 (書く力)
- ③ 社会の出来事に関心を持ち、調べる力 (つながる力)

2. 「N I E の日常化」にあたって

- ・保護者に NIE について知ってもらうために、5 月の授業参観日などに NIE の説明資料を配付した。
- ・新聞購読の年間計画を立てる際にはどの月にも新聞に触れられるようにした。また、学習や行事との関連性も意識し、重点的に多くの新聞を注文する月を設定した。
- ・新聞コーナーをつくり、沖縄県紙、全国紙がいつでも手に取れるようにした。
- ・校内研修で N I E の日常化を目指し、理論・実践研修に努めた。

3. 「NIEの日常化」を目指す実践について

(1) 主な取り組み

- ① NIE フリートーク ② 新聞スクラップノート ③ 新聞遊び ④ 新聞感想文
- ⑤ 新聞読み聞かせ ⑥ 新聞製作 等

(2) NIE の共通実践について

NIE フリートーク

時間のとり方

- ・6年 (毎週木曜)

NIE フリートークの時間

12分

NIE フリートークでやること

児童・生徒

- ・自分の考えを発表する (5分)
- ・ペアで話し合う (1分)
- ・感想を交流する (4分)

教師

- ・導入での趣旨説明 (1分)
- ・フリートーク後の価値付け (1分)

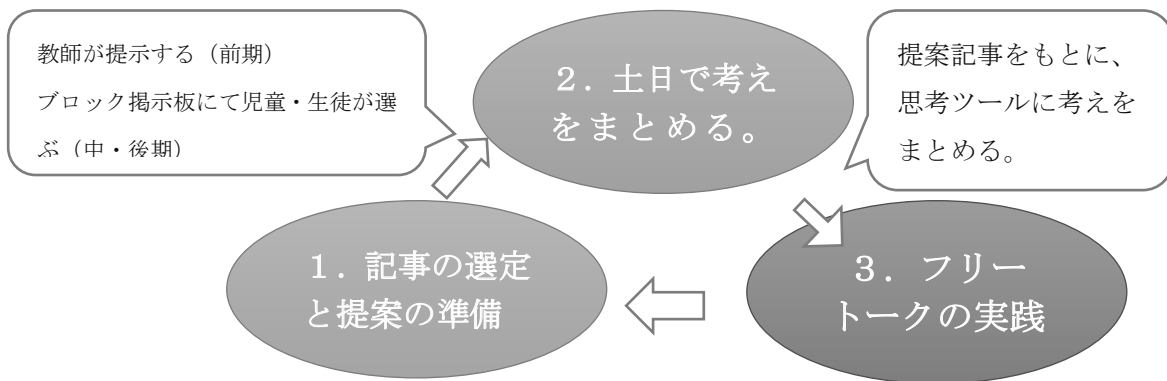
実際の流れ

- ・導入での趣旨説明 (1分)
- ・自分の考えを発表する (5分)
- ・ペアで話し合う (1分)
- ・感想を交流する (4分)
- ・フリートーク後の価値付け (1分)

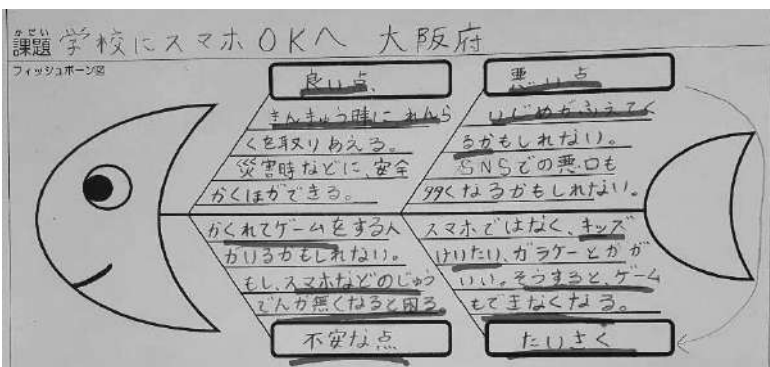
考えをまとめる

「思考ツール」を活用する。

NIE フリートークを実施するまでの流れ

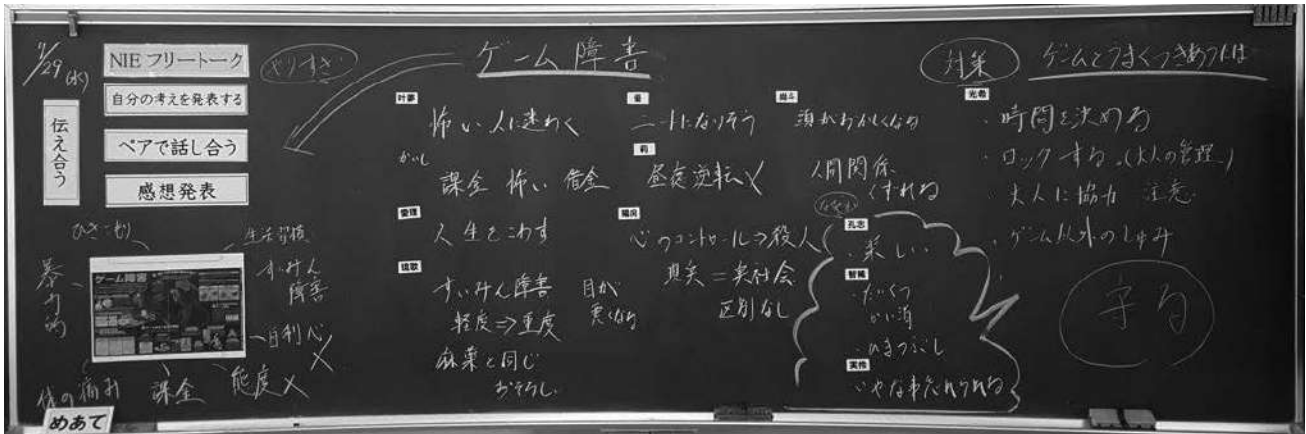


思考ツールに自分の思いや考えをまとめる



フリートークの様子



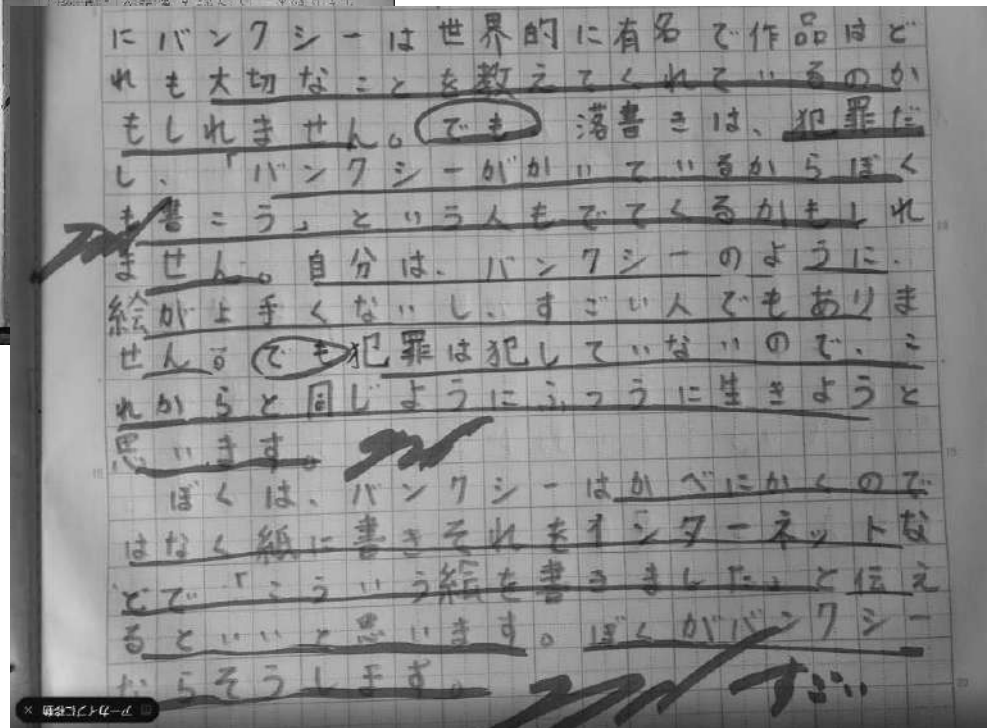
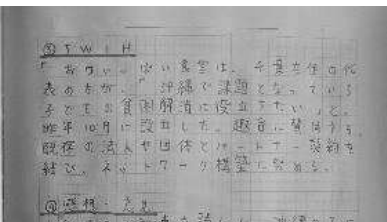


親子で取り組むスクラップノート

実践学年 6年

学習内容 好きな新聞記事 OR 学級で同じ記事を選び、親子で記事に対しての感想を書く。
(週末に持ち帰り、週の始めに提出)

チェック コメントではなく、「書く力」に関わる場所に、○をつけ、アンダーラインを引く。
※接続語や心情が表れている文等に引く。



新聞遊び 新聞読み聞かせ

実践学年 4～6年

学習内容 新聞記事のスクラップ学習や記事の発表会、記事の読み聞かせ等



その他の取り組み

日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」

新聞製作制作学習 はがき新聞づくり



第12回新聞スクラップコンテスト 「タイムス社社長賞・学校賞受賞」





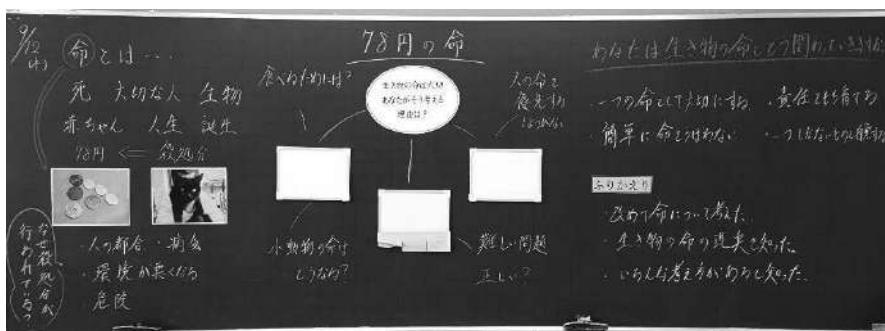
NIE 特設授業



新聞を活用した授業の様子

6年道徳「78円の命～小学6年生の新聞投稿から～」

5年算数「割合～高校受験倍率を読み取ろう～」



5年沖縄タイムス出前授業「本土復帰50年について考える」



6年琉球新報出前授業「世界のウチナーンチュ大会を知ろう」



NIEの日常化に関わる校内研修

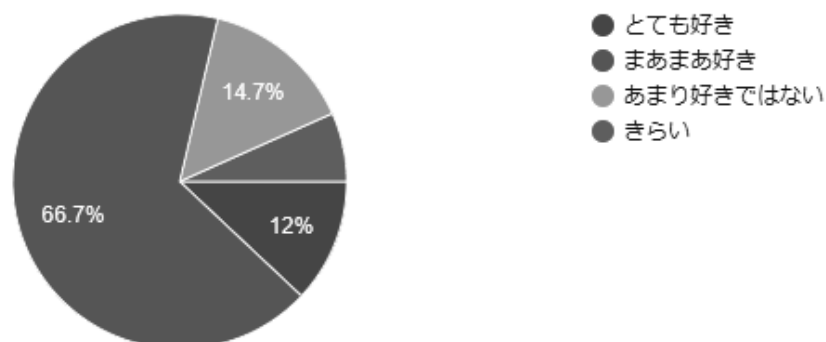


【成果】

【10月実施】

③沖縄や日本、世界でおきている出来事に興味、関心はありますか？

75件の回答



④ ③でそうこたえた理由をかいてください。

71件の回答

理由
いろんなことが知れるから
自分の知らないことがあるから
とにかく楽しむのが好きから
そういうのが好きだから。
自分自体あまりテレビを見ていないから出来事とかがあまりわからない
全てに興味があるわけではなく、自分の好きなこと系の職業などと関係していることには興味、関心があるから
沖縄や日本、世界はこういう状況なのかわかるから
外国にきょうみがあるから。

理由
新聞を見ながら色々なことを考えることが好きです。
新聞を使うと色々なことの情報が見られるから。
あんまり新聞に興味がないから。
難しいけど、新聞はいろいろな記事があり考えさせられる色々な考えを出せることができるから。
新聞を読んで今を知ることで初めて分かることもあったり面白いです。
文を書くから。

アンケートや各調査の結果、授業、思考ツールやスクラップノート等からみえた成果

1. 「伝え合う力」の向上・・・【関心・意欲・態度】の面で変容がみられた。

伝え合う力がついてきた。

※10月実施のアンケート結果では発表するのが好きとこたえた児童が約64%となった。

2. 「書く力」の向上・・・考えを広げ、深め、文章化する力がついてきた。

各調査等において「書く力」に関する問題での向上がみられた。

「新聞製作学習」が一番人気で、書く学習に意欲的に取り組んでいた。

※10月実施のアンケート結果では書くのが得意とこたえた児童が約67%となった。

3. 「つながる力」・・・学習にしっかりと向き合い、粘り強くやりとげる児童・生徒が多くなってきた。

親子と共にNIEに取り組み、主体的に社会に目をむけ、そこで得た学びを発信するようになってきた。

【課題】

- ・NIEのつなぎ・・・各学年で発達段階に応じた取り組みを実践すること
- ・NIEの日常化・・・各学年で継続して取り組むこと

令和4年度 N I E実践報告書

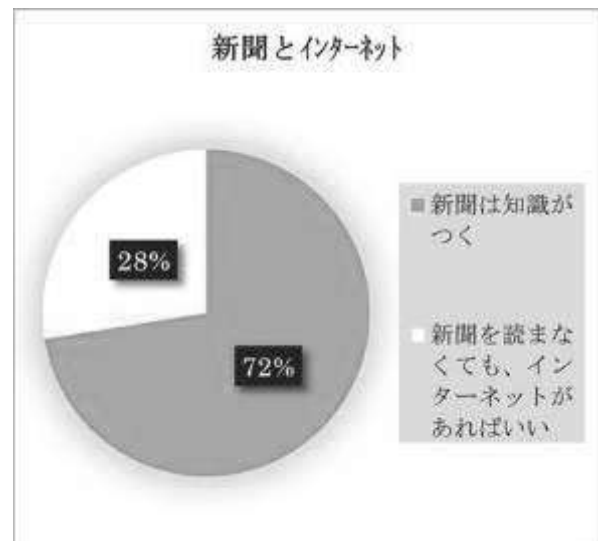
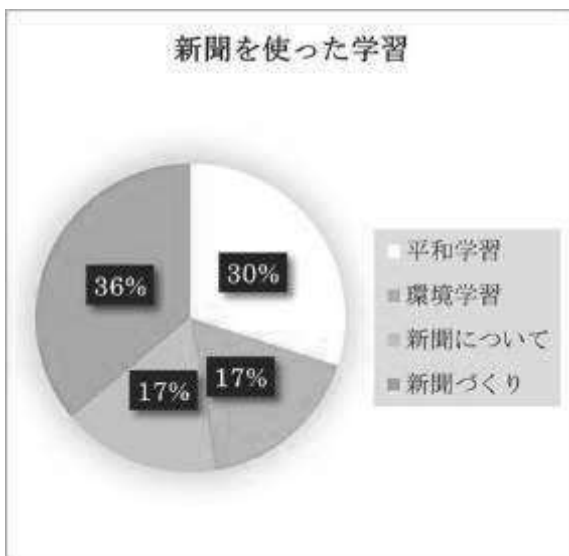
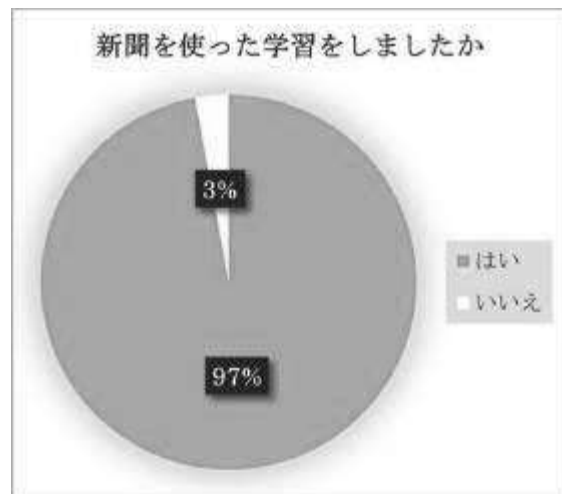
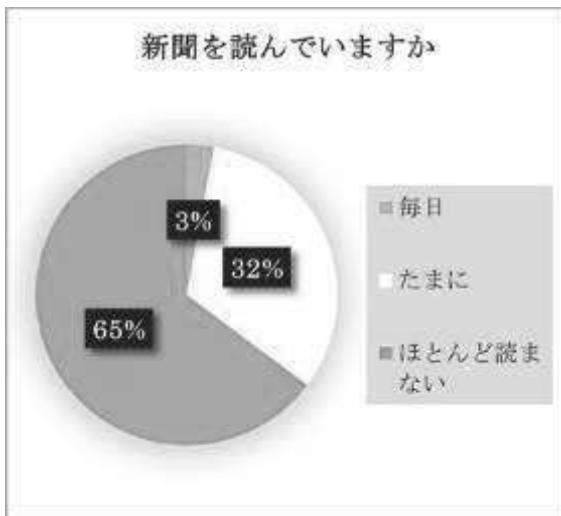
浦添市立牧港小学校
教諭 宮城 和人

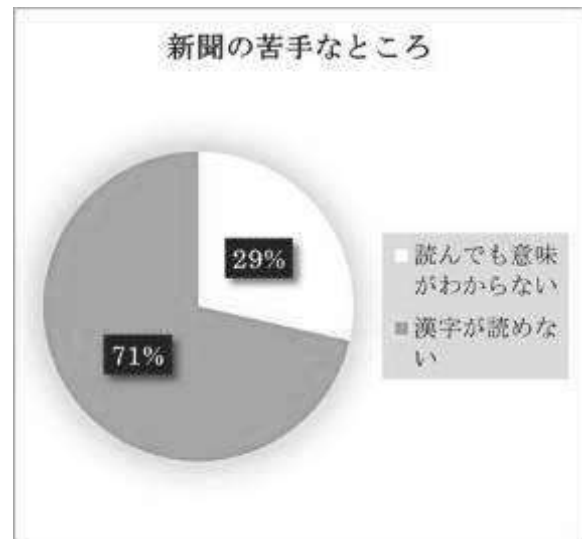
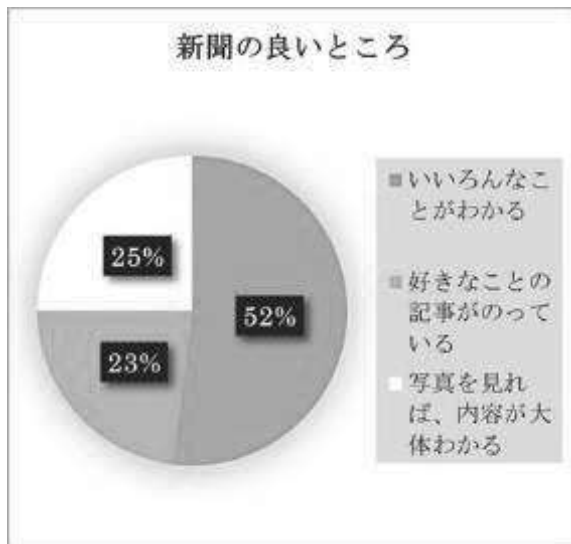
1 はじめに

本校は、N I E実践指定校1年目。本校実践テーマとして「新聞に親しみ、主体的・対話的で深い学びの実現」を設定した。

今年度は、5・6学年を実践学年として、平和学習の新聞づくりや、新聞記事の紹介、関連のコンクールに応募することを中心にN I Eの取り組みを行った。

2 新聞について（5・6年対象アンケートより）





(1) アンケートから

- ① 今回のアンケートには、掲載していないが、家庭での新聞購読は少ない。新聞を読まない児童が多い中で、新聞の学習、コンクールの取り組みで新聞に興味を持つ子が多くなった。
- ② インターネットに触れる機会が増えているが、新聞を読むことで知識がつくと回答した児童が多かったのが意外であった。
- ③ 新聞には、いろいろな記事があることを知り、スポーツなどの興味をもっている以外に新しい発見を見つけることができた。

3 本校の取り組み

- (1) 学年のフロアや図書室、理科室などに NIE コーナーを設置し、新聞に親しみやすい環境作りを行った。また、学校全体で読売新聞ワークシートにも取り組み、10月には琉球新報社の出前授業に5年生が学習した。

NIE コーナーの設置



3 実践事例

(1) 6 学年の実践

平和月間の取り組み (6 月)

沖縄戦について学習した。沖縄タイムス「ワラビー」と琉球新報「りゅうPON！」の沖縄戦特集号」を活用し、沖縄戦について新聞づくり。

(2) コンクールの取り組み

『スクラップ新聞』



(3) その他の実践

①各学年とNIE

- ・国語の時間にNIEタイムの時間を設定し、自分の興味ある記事に目を通させた。
また、図書館の本を読み終えた児童・・・(1年)
- ・国語の授業で低学年向けの記事を読んで質問に答える取り組みを学年で行った。

(2年)

- ・琉球新報の「レッツチャレンジNIE」を各学年で取り組んだ。朝の会で、11月の皆既月食の写真を紹介し、掲示した。(2年)
- ・朝の会にて、総合(黒糖づくり)に関する記事の紹介をした。(4年)
- ・総合「平和学習」で、沖縄戦に関する記事を読み、情報を集め、新聞にまとめる。
(4年)

- ・国語「新聞を読もう」で活用しました。新聞記事の構成、書き方。(5年)
- ・授業参観日、新聞を活用して、親子で「カタカナを見つけよう」という活動をしました。
(特支1年)

②児童とNIE（感想）

- ・いろいろな新聞を読んだり、新聞の記事や写真を自分で作ってみたりしたい。
- ・スクラップ新聞をまた作りたい。
- ・環境の問題についてやりたい。
- ・いろいろな新聞を読みたいです。
- ・家でとっていないので、他にどんな新聞があるか知りたい。
- ・スクラップ新聞をもっとつくりたい。クラスでスクラップ新聞を読みあって感想を書きたい。
- ・平和の事についてもっと知りたいです。
- ・違う新聞で、記事を見比べると、情報の与え方はどう違うのか調べたい。
- ・普段はインターネットでニュースや情報を見ているけど、新聞は新聞の良いところあることがわかりました。
- ・スマホだけでなく新聞では、読む力がつくからいいと思いました。
- ・新聞を使った学習をして気づいたことは、インターネットより新聞が具体的に書いているとわかりました。
- ・普段、新聞を読まないから読むきっかけにもなるし、インターネットよりも情報が正確だから自分で新聞を作るときの情報にとっても役だって良いなと思います。
- ・月に1回、その月にあったことを自分で新聞にまとめる時間を入れることで、言葉の表現力が身に付くと思う。そして世間について興味を持ってもらえると思う。
- ・インターネットよりも本みたいなので、知らないことなどが分かる。そして、ブルーライトをあびずに情報を知ることができる。

4 成果と課題

○成果

- ・新聞を購読している家庭は少ないが、学校での取り組みで、新聞の良さを知ることができた。
- ・各学年でNIE実践をしている。継続できること。

○課題

- ・各学年で無理なく、NIEの実践ができること。
- ・NIEの情報紹介

「主体的・対話的で深い学びを生み出す児童の育成」 ～情報活用能力を育む学習指導の工夫を通して～

1 N I E実践指定校（日本新聞協会）としての取組

坂田小学校では、「クリエイティブ・主体性」のある子、自ら動ける子の育成を目指し、「表現」に繋げる「読み」の工夫を行っている。「読む」「聞く」ことを通し、相手に伝える「言葉」、相手の立場になった、思いやる「言葉」を育て、「表現」「活動」ができる子へと繋げていきたいと考え取り組んできた。また、「書く」事に時間を要する子や、自分なりの対話「理由・根拠・構成・不思議・気に入る・もしも等々」を持つことに戸惑う子への支援にも取り組んでいる。

校内研修においては、前年度まで、上記の「根拠」等をキーワードとした国語「説明文」の研究を進めてきた。その結果、各学年で児童に身につけさせたい力を明確にして指導することで、教材を正しく読み解く力が向上した。3年間の研究結果では、児童が根拠を持ち自分の考えを伝えることができるようになってきた。しかし、一方で、児童が身につけた知識及び技能を用いて、他者との対話から自分の考えを広げ深めたり、自身の考えを再構築したりするまでには至らなかった。更に学習状況調査においても、集団の特徴を捉えるために、どのようなデータを集めるべきか判断する項目に課題がみられた。これらは、理解していることを活用し、どのように駆使するかといった汎用的な力において課題が残った。

そこで、今年度は、これまで身につけた知識・技能や新たに習得した知識・技能を用いて、自らの生活や学習課題の解決に向けて駆使する力の育成を目指し研修に取り組んでいる。それらの力を育成するために、3つの学びの基盤の一つである情報活用能力に焦点をあて、研究を進めているところである。学習指導要領総則によると、『情報活用能力とは、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決していくのに必要な資質・能力である』とされている。各教科等においてタブレットの効果的な活用、N I Eの授業実践等を通して、情報活用能力の育成、育成された能力を発揮し駆使していくことにより、深い学びが生まれ、各教科における資質・能力を身につけることに繋がると考え、校内研修深め、日常的な授業改善を図っていく。

2 研究内容

(1) 情報活用能力に視点をあてた理論研修

- ①情報活用能力の概念理解（NIE、タブレット等）
- ②効果的な情報・情報技術の検証、実践
- ③IE-schoolにおける指導計画を基に、年間指導計画の見直し・修正
- ④情報スキルの系統表作成（情報部と連携）
- ⑤児童に問いを持たせる発問の工夫
- ⑥明確な身につけさせたい資質・能力

(2) 児童の基礎的・基本的事項の定着(N I E・タブレットを効果的に活用する)

- ①情報手段の基本的な操作
- ②情報モラルの定期的な指導
- ③読み取る力の育成

- ④情報の収集、選択、活用力の育成
- ⑤情報を基にした思考力・判断力・表現力の育成
- ⑥全学年による共通実践事項を明確にした取り組み（あたりまえの10か条、学びの10か条）

3 検証授業と授業研究会の推進

- (1) 検証授業は、研究主題・副主題に基づいた授業とする。
- (2) 検証授業は、各学年1回実施する。

全体研(NIE 指定研究) 3・5年 レインボー 1年1月実施予定

隣学年研（西原中校区学力向上推進 幼小中連携授業会）

2・4・6年、レインボー学級

- (3) 全体授業研究会の際は、講師を招聘し、指導を仰ぐ。

4 具体的な実践内容

＜令和3年度＞

- (1) 図書館に新聞コーナーを設置した。新聞記事を読み取る環境ができた。新聞を掲示できる掲示板の寄贈を活かし、写真新聞コーナーも設置した。
- (2) 職員を対象に、NIEアドバイザー・西原町指導主事甲斐崇先生によるNIE研修会を実施した。先生方は、新聞活用の手立てや「見出し10文字」の文字表現効果を学ぶことができた。
- (3) 児童会を中心に「りゅうPON!ジュニア通信員」として学校紹介を行った。タブレットを活用し、読み手に伝わる言葉の工夫（キーワードとなる言葉の選び方）や、まとまりと「小見出し」の整合性、4つのまとまりの構成（順序など）効果等を学ぶことができた。
坂田小学校児童が進学する西原中学校もジュニア通信員として学校紹介を行った。コロナ禍のため、それぞれの通信員が対面交流することはできなかったが、新聞を活かして学校の様子を紹介することができた。R4年度もジュニア通信員を実践する予定である。
- (4) 「第12回いっしょに読もう!新聞コンクール」へ参加した。3～6学年へ呼びかけ、記事を読み「選んだ理由、自分なりの考え」等を表現することができた。
- (5) 5学年を中心に新教科書題材の中から「環境・SDGs」に関わる記事に触れる機会を設けた。
- (6) 総合的な学習では、6学年を中心に「キャリア・平和」等に関わる記事に触れる機会を設けた。
- (7) 児童・先生の中には、主体的に新聞投稿へチャレンジし「表現・伝える」機会を作っていた。
- (8) 2月、5学年では、新聞記者による講話。
- (9) 琉球新報検索システム利用申請。(キジサガス)

＜令和4年度＞

- (1) 琉球新報や沖縄タイムスによる出前授業。
- (2) 「第13回いっしょに読もう!新聞コンクール」へ2学年から6学年の多くの児童が参加。
- (3) 図書館の新聞コーナーを継続して実施。レッツチャレンジNIEクイズコーナーも設置。
- (4) 児童会による「坂田っ子新聞」の作成。
- (5) 職員の情報を共有する場「NIEコーナー」の設置。
- (6) 新聞投稿への呼びかけ。
- (7) 坂田小学校・西原中学校ジュニア通信員を継続実践。
- (8) NIEフォーラムでの公開授業(3年生, 5年生, 特別支援学級)
- (9) 琉球新報検索システム利用申請を継続する。(キジサガス)

5 令和3年度 NIE実践指定校（日本新聞協会）主な実践 《1年目》

(1) 6月10日 職員へ紹介
町教委指導主事 甲斐 崇

(2) その後、児童のスクラップ
新聞を読み取り 気づきを書く



(3) 図書館の環境づくり



R1 手作り新聞台（寄贈）新聞を調べる



R3 NIE実践指定校（日本新聞協会）

(4) NIEの「読み」「書き」「表現」実践

5年「SDGs 海洋汚染の」記事を選んだ理由と考えを書く

R3 第12回いっしょに読もう！
新聞コンクール「学校奨励賞」



R3 児童会・ジュニア通信員作成 坂田小紹介
文章吟味と構成を新報担当と対話する。



R3 5年新聞スクラップ
理由・考えたことを表現する。



(5) NIE の広がり と 深まり



R3 西原中学校生徒の読み聞かせ 坂田小学校にて
読み聞かせ後の質問タイムで対話する。



R3 沖縄タイムス掲載 R4.1. 30 (日)
4年 宮里秀太郎学級 33回目投稿掲載

6 令和4年度 NIE実践指定校（日本新聞協会）主な実践《2年目》

(1) 琉球新報と沖縄タイムスによる出前授業（5年生）



新聞の特徴について学び、お互いにインタビューしあって、記事の作成にチャレンジしました。



(2) 一緒に読もう新聞コンクールへの参加 2年生から6年生の多くの児童が参加し、記事について考え、友達や家族と対話することで考えを深めることができました。

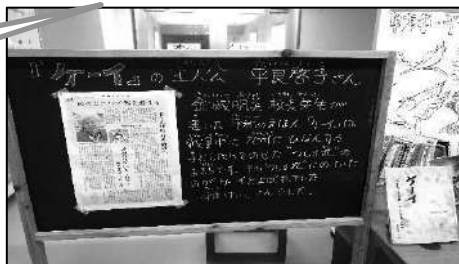


(3) 図書館の新聞コーナー



「レッツチャレンジNIEクイズコーナー」の設置。子どもたちが記事を読み、キーワードとなる言葉や文を見つけ、一生懸命クイズに答えていました。

復帰50年の記事からこれまでの沖縄や平和について学ぶことができました。



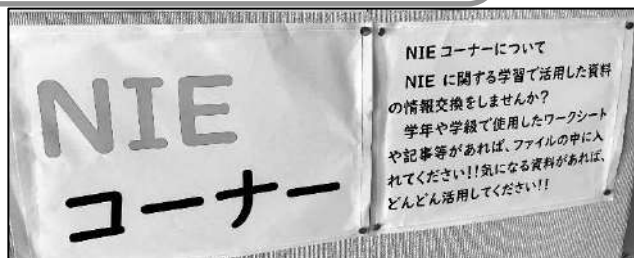
(4) 児童会が作成した「坂田っ子新聞」



児童会の子どもたちが作成した「坂田っ子新聞」
学校での取り組みや出来事が紹介され、1年生から6年生の児童が興味を持って読めるように工夫して作成されている。

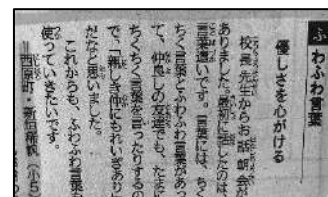
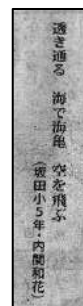
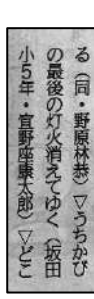
(5) 職員のNIEに関する情報交換の場「NIEコーナー」の設置

休み時間や空いている時間に気軽に情報を交換したり、共有したりできる場を設け、NIEの授業実践へ繋げていきました。



(6) 新聞投稿への呼びかけ

日々の学習の中で書いた、日記や作文を投稿。掲載されることで子どもたちの自信にも繋がりました。



(7) 児童会・ジュニア通信員作成 児童会取組の紹介

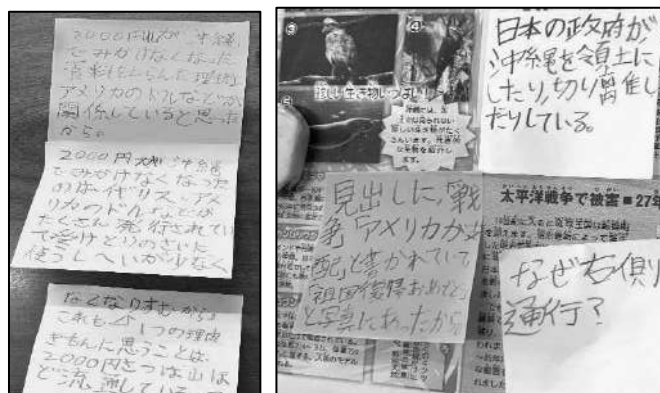
「服のチカラプロジェクト」

坂田小学校では、服が無くて困っている子供たちに私達が着なくなった子供服を寄付する【服のチカラプロジェクト】に参加しました。坂田小学校の児童の皆さんが期間内にとってもたくさんの服を寄付してくれました！（後略）



たくさんの服を持ってきてくれた写真

(8) 戦後復帰50年 読売新聞を使つての授業



NIE アドバイザー甲斐先生と沖縄復帰50年について学びました。選んだ記事から「分かったこと」「分からないこと」を書き分けて、自分の考えを伝え合っています。

7 各学年の取組

学 年	内 容
1 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞を開き、カタカナの文字を探す活動を通して、いろいろなカタカナが使われていることに気づかせる。(国語) ○子ども新聞から気になる記事を見つけ、写真にとり、感想を発表しよう。(国語)
2 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞から沖縄復帰50年について学ぶ。(国語) ○「一緒に読もう新聞コンクール」への参加。(国語) ○新聞をめくって、大きな見出しを見つけよう。(国語) ○レッツチャレンジNIE。記事を見て答える。 ○気になった記事の写真を見つけ、感想を伝えよう。
3 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞を開きゲーム感覚で大きな文字を探す活動をする。(総合) ○「へん」と「つくり」を知り、新聞を開きゲーム感覚で同じ部首の漢字を探す活動をする。(国語・総合) ○興味のある写真や文字、イラストに目を向け、お気に入りをレイアウトしてしおりを作る。(図工・総合) ○記事からクイズを作って、クイズ大会をしよう。(全2時間)(国語・総合) ○地域の記事からクイズを作って、クイズ大会をしよう。(全2時間)(社会・総合)
4 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○ハガキ新聞(国、算、社の学習で分かったことをまとめる) ○ハガキ新聞(食育) ○新聞スクラップ(平和について考える) ○夏休み新聞(ハガキ新聞) ○「あいうえお漢字」新聞から文字集めをしよう。(国語・総合) ○「わたしだけの新聞写真アルバム」新聞から気になった記事を集めよう。
5 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○季節に関係する新聞記事を探し、その記事内の言葉を季語として俳句を作る。(国語) ○新聞記者を招いて、新聞ができるまでの流れやメディアリテラシーについての話を聞き理解する。(社会科) ○新聞記者を招いて、新聞の構成(見出し、逆三角形など)を教えてもらう。(国語科) ○食べ物を無駄にしないために、自分たちにできることは?プラスワンを考えよう。(総合)
6 年生	<ul style="list-style-type: none"> ○復帰50年の記事から平和について考える。(総合) ○沖縄戦について、気になった記事をスクラップ。感想を交流し考えを深めよう。(総合) ○新聞から熟語を探し、仲間分けをしよう。(国語) ○新聞から憧れの職業に関連する記事を探し、感想を交流しよう。(総合) (職業に対するの視野を広げる。) ○新聞づくり(社会) ○レッツチャレンジNIE
レインボー	<ul style="list-style-type: none"> ○一つの記事から気になる物を見つけ、話し合う。(総合) ○新聞から情報を読み取ろう(世の中の出来事)。(総合) ○鳥の写真や記事の中から、鳥の数や名前をみて、友だちと一緒に問いについて考え答える。(総合) ○複数の新聞から、「気になる」記事・写真を探して比べることで、新聞に対する理解と興味・関心を高める。(社会) ○新聞の4コママンガから「うちなーぐち」の数を読み取る。(総合)
図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○平和月間にて新聞を使った資料を作成し掲示。 ○館内にて沖縄戦や戦争を特集した記事の読み比べコーナーを設置。 ○新聞をコーナーに設置し“レッツチャレンジNIE”クイズコーナーを備える。

久米島町立久米島小学校
教諭 菅間 伸也

1 はじめに

本校は、人口8000人弱の久米島町内にあり、在籍児童数は60名前後の小規模校である。また、各学年もクラス替えは無く、転出入を除けば、入学から卒業まで同じメンバーで6年間を過ごす。そのため、阿吽の呼吸のような、すべてを語らずともなんとなく伝えたいことが理解できるような環境にあり、他者に自分の意図を適切に伝えるという経験が乏しく、場面に応じた言葉を知らないため、伝えたいけどうまく伝えられないという児童が少なくない。国語科の単元テストや県の諸調査においても、文章の読み取りの問題等において正答率が低く、本校の課題となっている。そのため、今年度は、「新聞を活用した社会的事象への関心を高め、学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする」ことをテーマに取り組んだ。また、令和3年度より日本新聞協会指定NIE実践校となった。以下は令和3年度に6年生、令和4年度では、5・6年生の複式学級を中心に新聞を活用した教育実践に取り組んだ内容になる。

2 校内研究との関わり

令和3年度の本校の校内研究は、「互いに伝え合い、深い学びを追求する児童の育成～各教科・領域における、よりよく考え“自分力”を発揮できる実践を通して～」である。副題にある“自分力”とは、「自己の持てる力を遺憾なく発揮する力」と定義づけた。児童が“自分力”を発揮できる姿とは、自分の考えを表出したり、得意を生かして本領を発揮したり、また、苦手なことにも挑戦し、わからないことは素直に認め学ぼうとする主体的な姿である。¹

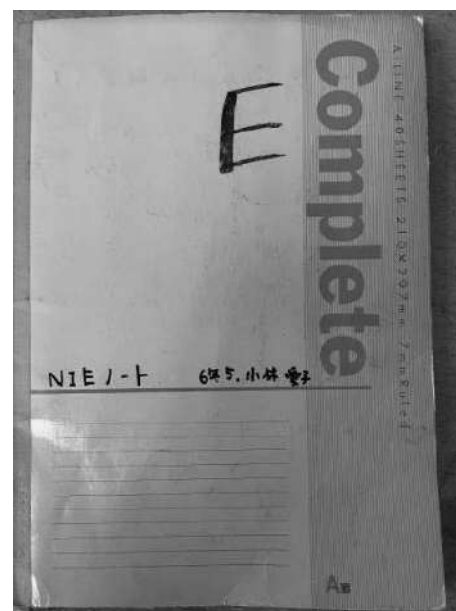
そこで、自分たちが学習したことを表出したり、日頃の授業と日常生活を関連付けながら学習を進め、深い学びを追求するために、新聞を活用した実践に取り組んだ。

3 本校の取り組み

(1) NIEノートの活用

①個人のNIEノート

NIEノートとは、児童自身が興味のある新聞記事を選び、その記事に対する感想や疑問点などを整理するノートである。本学級は、日頃の授業や県到達度調査などの諸調査等からも、主語と述語の関係性や〇〇字以内に要約することが苦手な児童が多く在籍していることがわかった。そのため、NIEノートでは、「5W1Hをはっきりさせる。」「②



¹ 久米島町立久米島小学校 令和3年度校内研究概要より

その記事に対する自分の考えや疑問に思ったことを書く。」ということを行ってきた。

まず、「①5W1Hをはっきりさせる」については記事の中から、誰が(who)、何を(what)、いつ(when)、どこで(where)、なぜ(why)、どのように(how)、を見つけ、記事を要約させた。それを踏まえて「②その記事に対する自分の考えや疑問に思ったことを書く」ことで、社会的事象を批判的に考察し、情報過多な現代社会の中においても、多面的・多角的に考察する力が養われると考える。



②NIEリレーノート

NIEリレーノートとは、1冊のNIEノートをリレー形式で回し、前日の友達のページを読んで、それに対するコメントを入れる。そして、次のページに個人のNIEノートと同様に書く。これを繰り返し実施する。このNIEノートのねらいとしては、自分の考えと比較しながら友達の考えを読むことで、多面的・多角的な思考を促すことである。右の資料が実際のNIEリレーノートである。友達の意見の良いところにも着目して読むことができ、単に新聞の記事の内容だけでなく、友達の考えを読むことができる利点があると考えられる。

また、次の人に回す際には、その人が興味がありそうな記事を選んでNIEノートに貼り付けてから渡すというシステムでやっているのので、自分の興味のある記事以外にも触れることができる。

(2) 校内に新聞記事コーナーの設置

校内の掲示板に沖縄タイムスのワラビーに掲載されている、新聞クイズを掲示している。そして、全校で取り組むことができるように、図書館教育主任がまとめたA4サイズのプリントに、希望する児童がクイズに取り組んでいた。その結果を貼り出すなど、児童の新聞への興味関心を高めてきた。このクイズに取り組む中で、わからない言葉やクイズについてタブレットを使って調べる児童もいた。また、家族に話を聞くなど、家庭内で新聞を通してコミュニケーションを取る姿も見られるなど、様々な良い影響が出てきている。



(3) コンクールへの出展 (令和3年度)

①いっしょに読もう！新聞コンクール

6年生11名中9名が夏休みの宿題として取り組み、学校奨励賞を受賞した。

②新聞スクラップコンテスト

優秀賞 (1名)

③琉球新報学校新聞コンクール

金賞1名 銀賞3名 銅賞4名

計8名 (11名中)



(4) 理想教育財団によるはがき新聞の活用

今年度、NIEのねらいとして、「①社会的事象への感心を高める」「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする。」ことの2点をあげた。そのうち「②学習したことや資料を根拠として自分の考えを文章で書き表す事ができるようにする。」では、理想教育財団のはがき新聞を活用した。

右の資料①では、国語科の小単元である季節の言葉を用いて俳句や短歌を創作する学習で用いたものである。児童が考えた俳句や短歌に加えて、そのときの情景等を文章と絵で表している。

また、資料②では、社会科等で活用してきたはがき新聞の様子である。(資料は、冬休みの宿題にだした、おすすめする本の紹介)

はがき新聞を多く活用した社会科では、単元の最初に設定する「単元のめあて」をもとに学習を進めた。そのめあてに対する児童の一人一人が単元を通してわかったことや感じたことを書かせ、1枚のはがき新聞にまとめさせ、専用のポケットに入れさせた。授業の時間内で終わらせることもでき、かつ、少ない文字数でうまくまとめるため、要約する力を身につけさせることもできた。

資料①



資料②



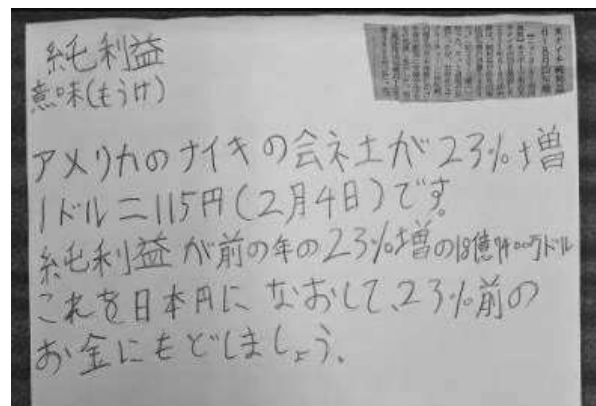
(5) 算数科での問題作成

算数科で学習する内容と日常生活を結びつけさせることで、児童が主体的に学習に取り組みやすくなるのではないかと考え、新聞を活用した算数の問題作りに取り組んだ。6学年では、算数の最終単位において、6年パスポート（啓林館）という単元があり、総復習する内容で構成されている。そこで、これまで学習した内容をふり返りながら、自分たちで問題を作成させた。



①割合の学習

右の資料は、アメリカのNIKEの純利益が上がったという記事である。この記事を使い、割合の問題を作成したものである。内容は「アメリカのNIKEの会社（の売り上げ）が23%増、1ドル=115円です。これを日本円に戻して、23%増える前の金額を求めましょう」である。このように、割合の問題を作るだけでなく、「純利益」という言葉の意味を辞書で調べたり、為替のレートをタブレットを用いて調べるなど、1つの記事から、様々な学習をし、それを基に問題を作成している。この問題を作成した児童は、決して学力が高い児童ではなく、支援員のサポートを受けながら学習を進める児童であるが、自分の興味のあるスポーツの記事を選ぶことで、主体的に学習を進める様子が見られた。



②速さの学習

右の資料は台湾の軍艦の時速と、台湾と与那国島までの距離からかかる時間を求める問題を作成したものである。内容は「時速74kmですすむ軍艦があります。台湾から与那国島まで108km離れています。この船では何時間かかりますか？答えを少数第1位まで求めなさい。」である。

この問題では、速さだけでなく、概数の学習も取り入れている。

また、この記事には中国と台湾の関係性も記載されており、現在の社会情勢を知ることができる。

このように、問題を作る際に、問題の意図を伝わりやすくするための文章を構成する力や社会的事象へについての知識の習得など、教科横断的な学習を進めることができた。



(5) ICT機器を活用してのNIE

久米島町はクロムブックが、1人1台端末として導入され、ロイロノートも多くの授業で活用されている。そこで、今年度は、新聞を切ってノートに貼るだけでなく、みんなが同じ記事を読み、自分の考えと比較させるために、ロイロノートの共有ノートを用いたNIE実践にも取り組んだ。

まず、気になる記事をカメラで撮影し、ロイロノートに添付する。それを、シンキングツールに貼り付け、同じシートの上で、5W1Hを見つけ、さらに自分の考えを書いていく。という手順で行った。



5W1H
who when where what why how
誰 いつどこ何をなぜどのように

2013年12月に「餃子の王将」の本社前で射殺された事件で10月28日に北九州市の特定危険指定暴力団・工藤会系組幹部の田中幸雄受刑者が京都府京都市山科区に向けて出発した。

田中容疑者は、2つもの銃撃事件（京都・福岡）で逮捕されていて、怖いと思った。また、胸や腹部を計4発も撃ったら、すぐ死亡するのは当たり前だけど、怖いな、と思った。タバコの吸い殻でDNA鑑定が検出されるからすごいな、と思った。

(6) 端材の活用

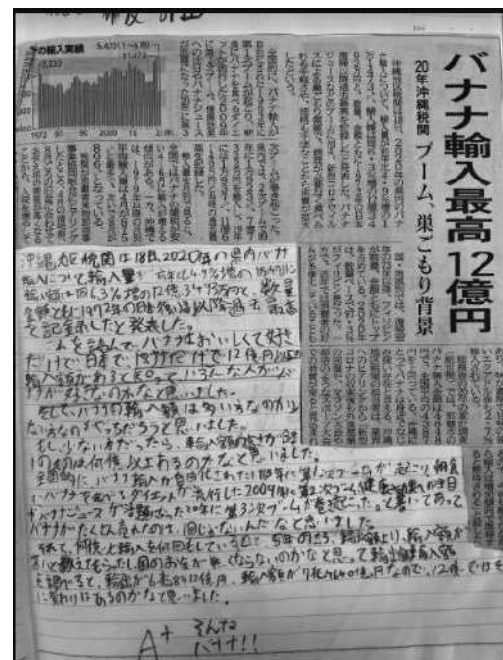
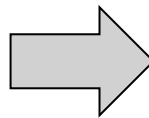
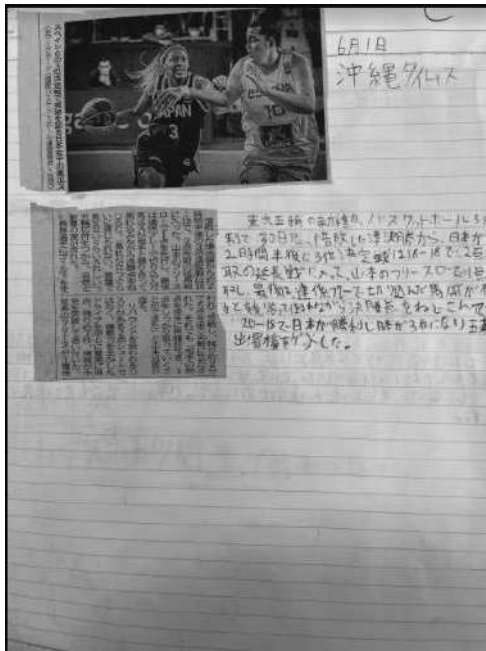
気に入った新聞の残りを活用方法として、6年社会科の歴史、「鎌倉幕府」の学習で、大仏の大きさを体験するというものである。実際の大きさをインターネットを使って調べ、各部位を新聞紙を切ったりつなげたりすることで、体験的に強大な大仏を実感することができた。そして、当時の技術でなぜここまで大きな大仏を作ることができたのかという疑問を児童から出させることができた。



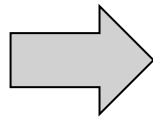
4 成果と課題

(1) 成果

○新聞の書かれている内容を理解し、それを踏まえて自分の考えをきちんと書けるようになった。下の資料は同一児童の6月（NIE実践を始めた頃）と10月のNIEノートである。書く量が増えており、かつ10月では、自分で興味を持ったことや疑問に思ったことをインターネットを使って調べるなど、主体的に取り組んでいることがうかがえる。



○下の2つも同一児童のNIEノートである。左は国頭の大国林道の落書きに関する記事、右は辺戸名の壁に描かれたアートに関する記事である。この2つは同じように壁に書かれているのに、描く人や意義などの違いによって、記事の内容も周りの反応も違うことについての感想を書いていた。このように、物事を比較しながら多面的に読み取る力もついてきた。



(2) 課題

- NIEを正規の授業時間で取り組むことが難しく、宿題やすき間の時間での取り組みしかできず、時間の確保が必要である。
- 支援を要する児童は、まず、新聞に書かれている事を理解することが難しく、内容を理解しながら読むのではなく、ただ読んでいるという状態になる事もあった。
- いっしょに読もう！新聞コンクールでは、保護者の意見を書く欄が設けられているが、家庭によっては、協力が得られず、全員でコンクールに出展することが難しかった。

令和4年度 西原町立西原中学校 NIE 実践報告書

西原町立西原中学校
校長 友寄ゆかり
NIE 担当 喜納英仁

1. はじめに

今年度は沖縄県 NIE 実践指定校 2 年目として活動を行った。各学年や教科での実践を行い前年度よりも積極的に取り組み、各学年や教科での実践を行う事ができた。

2. 実践事例

(1) 『私の視点』の活用

『私の視点』とは、生徒が新聞から興味のある記事を選び、記事の内容と選んだ理由・感想をまとめて発表する取り組みである。全学年の社会科の授業で実施した。方法は授業の初めに作成方法を説明する。まず新聞記事の中から気になるものを取り上げる。取り上げた記事の内容を通して考えた事や感想を記入する。

この取り組みから期待できる効果は、新聞と社会的事象に興味・関心が高まること、まとめたり自分の考えを表現する力が高まること、相手の考え（主張）に対する聴く力が高まることが考えられる。



『私の視点』の掲示板



本土復帰 50 周年の新聞記事から

(2)平和新聞の活用

子ども向け新聞「りゅうぼん」沖縄戦特集号（琉球新報社）と「ワラビー」（沖縄タイムス社）の両紙を活用して平和学習を実施した。新聞記事の内容を読み込み、戦争経験者による戦時中の悲しさや海外へ派遣された方々の話を改めて理解し、今日の世界で行われている戦争についても結びつけて考える事ができた。

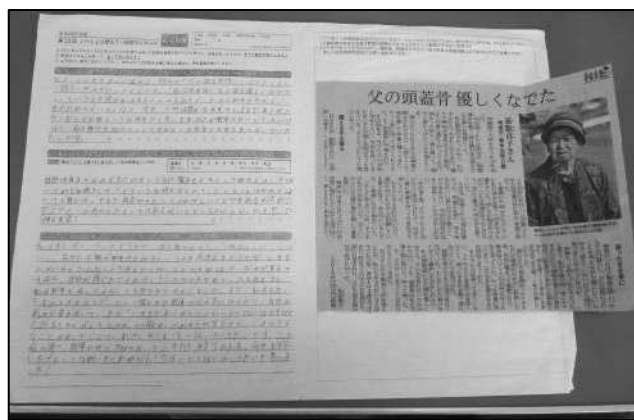
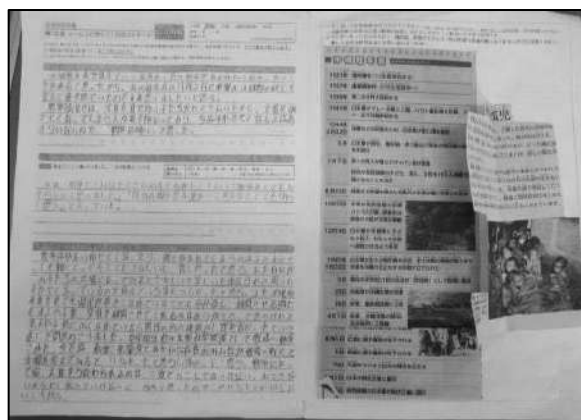


3年生の授業での「りゅうぼん」と「ワラビー」から沖縄戦や経験者の話を読み込んでいる様子

(3)日本新聞協会 第13回いっしょに読もう！新聞コンクール

「(2)平和新聞の活用」で学習したものを、より「主体的・対話的で深い学び」につなげるために日本新聞協会の「いっしょに読もう！新聞コンクール」の取り組みを実施した。その取り組み内容は、新聞の中から印象が深く残った記事や新しい学びになった記事などから、読んでみての自分の感想を始めに記入し、次にその記事と感想を家族や友人などへ読んでもらい、どのように感じたのかを聞き、感想やアドバイス記入する。そして最後は、それらを踏まえた自分の考えた事や今後の予想、今後の取り組みなどを記入するものとなっている。

西原町は沖縄戦の激戦地となった場所でもあり、家族（祖父母）の話を多くの生徒が記入させる事ができていた。本校では平和学習の一環で、沖縄戦で亡くなられた方が刻銘されている平和の礎の呼名の読み上げを行っており、特に3年生は平和の礎での学習もあることから、より深い学びにし戦争の悲惨さをより感じさせる事ができた。その後、日本新聞協会より学校奨励賞を頂き、今回の取り組みが高く評価された。



【1段目】記事を読んで気づいた事など

【2段目】家族や友人からのコメント

【3段目】1・2段目の内容を踏まえ、より深く考え、今後の予想や自分の取り組みなど記入

(4)新聞投稿

国語科が中心となって、新聞投稿に取り組んでいる。掲載された生徒は、教師から声をかけられたり、褒められたりして、自己肯定感の高まりに効果が期待される。



(5)社会科新聞コンクール

社会科が中心となって、沖縄県中学生社会科新聞コンクールに毎年取り組んでいる。テーマを西原町にし、全校生徒が夏休みの課題として探究したものを新聞にまとめていた。



(6)NIE 掲示板の作成

今年度、新たな取り組みとして NIE 掲示板の取り組みを行った。琉球新報と沖縄タイムスを中心に日々、新しい情報を伝える役割として設置した。また、新聞社の一面を掲示したり、NIE の取り組みで表彰された生徒の作品を掲示した。また、世界のうちなんちゅ大会やウクライナ侵攻などの記事も生徒が見えるように工夫をした。



3. 成果・課題

【成果】

2年間の活動を通して、生徒の言葉から、さまざまな社会的事象に関する事柄が発せられる機会が増えてきたと感じることから、関心が高まっていると考えられる。また、資料を読み取る力や活用する力、自分の考えを書いて表現する力が向上したと考えられる。

学校としては、全学年で新聞の資料の掲示や新聞社の方による記事作成の方法や実情などを学び、より新聞からの学びが多くあった一年間であったと考える。

【課題】

NIEに関する学校全体としての取り組み体制の構築や確認が継続して必要と感じた。また、掲示場所の偏りや授業内での取り扱う時間の確保等の課題が残った。

4. おわりに

今年度が2年目という事もあり、職員間での取り組みは各学年での取り組みまで広げる事ができた。また、社会科や国語科、美術科の協力があり、この一年間充実したNIEの実践に取り組んできた。今年度が最終年ではあるが、NIE実践校だったことの取り組みを継続的に行えるようにしていきたい。

令和4年度

日本新聞協会 NIE 実践校 実践報告書

沖縄県立本部高等学校

教諭：比嘉 啓信（地歴公民科）、小松真澄（数学科）、仲松 聖（福祉科）

1 はじめに

今年度は、日本新聞協会の実践指定校として二年目の締め年となった。昨年度の一年目は、9月から取り組みのテーマを以下の2つに設定し、実践を進めた。

- ①読む・書く力が弱い生徒が多い本校において、NIE 実践を通して、その力を育成する。
- ②教科の学びを、NIE 実践を通して、実社会に繋がる学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

昨年度の実践報告書中の最後のまとめで、NIE 教材の持つ魅力と可能性について述べた。その中でも、新学習指導要領が重点として示す「一人ひとりの『生きる力』を育むこと」、その中でも特に「多様性への理解や主体性、問題解決能力の育成」との関連の中で、教材としての新聞の持つ有効性の高さについて触れた。特に、「問題を見つけた時に論理的に考えて解決まで導ける力」や、「仲間と協力しながら問題に取り組むための表現力」などの基盤となる力を育む実践をつくり出せる可能性が掴み取れたのは大きな成果であったと言える。

また、2年目の実践の課題として、上記、評価の三観点中の「学びに向かう力・人間性」に関わり、「学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育成する」ことを意識した実践を展開していきたいと結びに換えた。そのような意識、態度、意欲を育てるのは、もちろん一教科の取り組みだけでは不可能であり、これまでの私の実践の課題でもあった。そこで、今年度は、(NIE 実践だけでなく、高校現場における一般的な課題でもあるが)それぞれの教科に実践が閉じている部分を、いかに教科横断的な形で展開していくことができるのか、その方策を見つけ出していきたいということを、2年目のスタートにあたって課題として設定した。

そこで、今年度は、朝学習における新聞を使ったNIE教材の内容を少しレベルアップし、「読み込む力の育成」、それをもとに「まとめる力」へとつなげることで、さらには「探究的に課題を自ら設定」し、「その課題の解決のために学びを進める意欲と実践力の育成」につなげていく取り組みを、他教科の先生方とコラボしながら進めていく計画を立てた。その上で、今年度は、上記の目標に加え、以下の目標を新たに加えることにした。

- ③ ①②の実践を通して基礎学力の向上を図り、学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てる。

今年度は、主に、「地歴・公民科1名」、「数学科1名」、「福祉科1名」の職員を中心にして実践を展開した。以下、その取り組みの内容を概観したい。

2 本校の取り組み（主なもの）

- ① 朝学（10分間学習）におけるNIE教材による学習（全校生徒）
- ② 「新聞感想文」（夏期休業中の課題として取り組む）（全校生徒）
- ③ いっしょに読もう新聞コンクール（夏期休業中の課題として取り組む）（全校生徒）
- ④ 公共でのNIE教材を使った授業（1年生）
- ⑤ 地理BでのNIE教材を使った授業（2・3年生）
- ⑥ 福祉（生活支援技術）での新聞記事を活用した授業（2年生）
- ⑦ 基本数学におけるPPDCAサイクルを活用した探究学習の授業（2年生）

3 成果（主なもの）

□令和4年度 第12回 新聞スクラップコンテスト（主催：沖縄タイムス社）

新聞感想文部門

【優良賞】

比嘉 成（2年） 兼次 千友里（2年）

【佳作】

岸本 鈴音（1年）

□令和4年度 第13回 いっしょに読もう新聞コンクール（主催：日本新聞協会）

【学校奨励賞】

新聞に触れる日常的な活動を含め、熱心に取り組んだ意欲的な学校、今後の取り組みに期待できるとして表彰。

4 実践事例報告

（1）朝学におけるNIE実践（報告者：比嘉 啓信：地歴・公民科）

昨年度の実践の継続で、本年度も全校生徒を対象とし朝学においてNIE実践に取り組んだ。昨年度同様、取り組みの基本軸を、本校の課題の1つである「①（義務教育段階で身につけていない）読む・書く力をいかに育成するか」、②教科の学びを実社会に繋がる学びに転換し、主体的・対話的で深い学びへとつなげる、に据え、実践に取り組んだ。昨年度の報告でも書いたように、①②とも昨年度実践の中で一定の成果を得たが、特に今年度は、昨年よりも課題内容のレベルを上げ、「深く読む」力、「俯瞰的に考える」力、それをもとに「自分の思いをしっかりと記述する力」を育成することも目的とした課題の作成ならびに、事後指導・支援を充実させることに力を入れた。

こうした力の育成は、新学習指導要領が示す育成すべき資質・能力の三観点とも関連して重要であるばかりでなく、特に、卒業後に選択される進路先でもしっかりと学習や仕事をこなしていける力の基盤としても重要である。具体的に言うと、「高校生のための学びの基礎診断」（「義務教育段階の学習内容

を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な修得とそれによる高校生の学習意欲の喚起を図るため、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを測定する民間の試験)として認定されている Benesse の基礎力診断テスト(年2回、4月、9月に実施する実力テスト)における「GTZ 指標」において多くの生徒が、今年度の4月段階で、D3に位置していた。

【ベネッセ 学習到達ゾーン指標 (GTZ) と対応した進路選択肢の対応に関して】

学習到達ゾーン 【GTZ】		進 路 選 択 肢	
		進 学	就 職
【Sゾーン】 S1～S3		難関大学合格レベル	
【Aゾーン】 A1～A3		国公立・中堅私立合格レベル	
【Bゾーン】	B1	国公立・中堅合格レベル	
	B2	国公立大の推薦入試に合格可能で、私立大の一般入試では、選択肢の広がるレベル	
	B3		
【Cゾーン】	C1	私大・短大・専門学校の一般入試に挑戦できるレベル	
	～		
	C2		
	C3	私大・短大・専門学校の一般入試に向けた実力養成レベル	
【Dレベル】	D1	<u>上級学校に進学することはできるが、授業についていけず、授業についていけず、苦勞する学生が多い</u>	
	D2		
	D3	<u>筆記試験が課される企業では不合格になることが多い</u>	

上記表からもわかるように、進学においてDレベルは、上級学校に進学することはできるが、授業についていけず苦勞する学生が多くなる傾向があり、就職においてD3レベルは、筆記試験が課される企業では不合格になることが多い。昨年度のNIE実践の成果もあり、特に読む・書く力の段階を端的に示す国語の学力において、4月段階で3年生D2-、D2+、1年D1と、D3レベルは脱したものの、いまだかなり厳しい段階に位置していた。

今年度は、そうした状況も踏まえながら、朝学において、昨年度よりも深く読み込み、自分の考えを示す課題、そして、それをもとに、実社会に繋がる学び、主体的・対話的で深い学へとつなげるとともに、その成果として学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てることを意識した教材づくりに努めた。ちなみに本校における朝学の取り組みは、月曜日はタイム・マネジメントの取り組み、火曜日

税に係る記事をもとにした課題である。記事との関連で、本部町のふるさと納税に関わる課題（地域の観光などとも関連して）をこなすと同時に、地域の発展のために、ふるさと納税を利用してどのような企画ができるか等についても考えさせた。

【生徒が取り組んだワークシートの例①】

□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。

① 観光×ふるさと納税
② 電子感謝券
③ 電子感謝券
④ めちまーす

問1 新聞記事の見出しの①に入る3文字を記事内から抜き出しなさい。(返礼品)

問2 記事内の囲み部分②に関して、次の選択肢から「正しいものを全て」選びなさい。

- ア. 自分の生まれ故郷だけでなく、お世話になった自治体や応援したい自治体等、どの自治体でもふるさと納税の対象になる。
- イ. ふるさと納税とは、自分の選んだ自治体に直接、恩返しとして納税することである。
- ウ. ふるさと納税を行うと、納税額のうち 2,000円を越える部分は、所得税と住民税から原則として全額が控除(差し引かれる)される。
- エ. 本部町では、ふるさと納税に「まだ電子感謝券」のしきみを取り入れていない。

問3 記事内の囲み部分④の「めちまーす」とは、何を商品として製造している会社が答えなさい。(塩)

問4 記事内の囲み部分③の「電子感謝券」は、「通常の返礼品制度」にない試みである。どのような点で特徴があるか、記事を参考に答えなさい。

返礼品、予約ポイント付与されて(ポイント1円換算で)利用できたり。

問5 次の文は、サイト「ふるさとチョイス」中の、本部町の紹介文です。空欄に適語を入れなさい。

本部町は沖縄本島北部の本部半島西部に位置し、人口1万3千5百人の町です。沖縄国際海洋博覧会が行われた(①)公園、沖縄(②)水族館があり、(③)岳などの山岳部では『日本一早い「(④)」』が開催され、一足早い春を味わおうと毎年たくさんの方が訪れます。また、(⑤)は本部町嶺本部にある塩分を含んだ水が流れる川で、海と川の生きものが共生しており世界的にも珍しい川です。

- ①(海洋博) ②(美ら海) ③(水元) ④(桜まつり)
- ⑤(塩川)

上記の例で示したワークシートの生徒は、成績では上位層に位置する生徒であるが、地元の本部町に関する課題が解けていない部分もあり、それを踏まえて、いかに自分の地域の事を知っていないのかを知り、ショックを受けていた。その他の生徒も同様である。それを受けて、授業の中では、ワークシートの裏面を活用しながら、本部高校がいかにふるさと納税の恩恵を受けているのか(例えば、本校では、町によりふるさと納税を原資にして町営塾<チャレンジ塾>を設置、運営してもらっている)等を

【朝学で取り組んでいるNIE教材
ワークシートの例③-1（表面）】

【朝学で取り組んでいるNIE教材
ワークシートの例③-1（裏面）】

□次の新聞記事を読んで、次のそれぞれの問いに答えなさい。 評価

令和4年(2023年)1月7日(土曜日) 琉球新報 朝刊 第1 3面 004ページ

2023.1.7日 金口木舌

「生活保護申請は、前年同月比の5.2%増であったことについて触れている。その増加の1つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出さない。」

問1 記事中では、昨年度10月の生活保護申請は、前年同月比の5.2%増であったことについて触れている。その増加の1つの要因となっていることに関して、記事中から抜き出さない。

問2 記事中の「マツシゲ」の内容について、どのようなものであるか？「具体的に」「あなた自身で考えて説明しなさい。[HINT] これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている」

問3 記事中の「自己責任論」に関して、「それは、どのような論理なのか？」考えて説明しなさい。
[HINT] これが、支援を困窮者から遠ざける要因となっている

問4 記事中に「生活保護申請は、国民の権利」とある。憲法25条にその権利の内容が記されている。それに関して空欄に論語を入れなさい。
憲法25条 (1) 権 すべて国民は、(2) で(3) 的な(4) の生活を営む権利を有する。

問5 記事は、最後に「弱者を孤立させない社会をつくる責任が、私たち一人一人にある」と閉じている。では、具体的にあなたに求められている責任とは何だろうか？問い-1を踏まえて述べなさい。

1

NIE新聞 朝学 課題 2023.1.13(金) 年 組 番 名前 _____

探究課題
(社会科の授業の中で取り扱います)

問1 探究のテーマを「あなたはみんなが幸せに生きるために何が出来るか？」とします。これを言い換えると「福祉」をどのように実現するか？ということになります。弱者を守り、支援し、すべての人が助け合う「共生社会」をどのように実現するか？ということです。このテーマに対して、あなた自身で「私なら〇〇のために、〇〇したい。」と語り下げて考えるなら、〇〇の部分にどのような言葉を入れるか考えなさい。

私なら「 _____ 」のために「 _____ 」したい。

問2 あなたが、上記のように、語り下げて考えたい内容を決めた理由は、何ですか？誰にでもわかりやすく理解しやすいように、「具体的に」「丁寧に」述べなさい。

問3 あなたが決定した、「みんなが幸せになるために」、「やりたいこと」を達成する際に、課題や障害・障壁となることは何だと考えますか？

問4 上記問3で考えた「課題・障壁・障者」を真ん中に据えて、マインドマップを作成し、課題解決に向けて、広く考えてみよう。

問5 マインドマップをもとに、「弱者を守り、支援し、すべての人が助け合う「共生社会」を実現するために、語り下げて「探究するテーマ」を決めてみよう。

探究テーマ「 _____ 」

2

その後の課題は、語彙を広げていくことや記事の内容だけからは読み取ることはできない部分を想定して記述する課題に取り組ませることとした。同時に、教科で学習した内容との関連づけも意識しながら課題を作成することで、新聞記事の内容理解の深化から、教科内容の学びを深め、同時に、その後の探究活動へ繋げることで、学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育てることへと繋げていくことを意識した教材づくりに努めた。

また、記事との関連から提示された探究のテーマをもとに、自らの興味・関心を掘り下げながら、マインドマップを作成し、それをもとに、自ら探究のテーマを設定する作業に何度か取り組ませることを意識した。多くの学校で探究活動を指導・支援する際に教師側の困り間としてあげられるのが、生徒が自らの興味・関心が何であるかを見定めること、そして、それをもとに社会的な問題や課題が何であるかを考え、自らの探究のテーマを設定することがなかなかできないということである。本校においても現状は変わらず、そうした生徒たちが探究活動に向き合う、取り組んでいく際の基盤となるテーマ設定の方法に関して習熟できるようになることも意識した教材づくりを心がけている。

目の前の教材の記述をこえて、自分で考えるということに、なかなか慣れておらず、その作業を不得手にする生徒は、まだまだ多い。それは、上記に示したワークシート③-1、③-2に見られるよう

以上の結果から見て、全体を通して、10分間という短時間でもNIE教材を活用した学習が効果を生み出す可能性があると同時に、その課題をもとに教科の学びに発展的に繋げ学びを深めていくことで、より高い効果を生み出すことができることを改めて実感しているところである。

(2) 地歴・公民科と数学科の教科等横断的な取り組み **【報告者：小松真澄（数学科）】**

1. はじめに

この取り組みは、報告者が沖縄県教育センターの長期研修の研究内容として取り組んでいる「自ら考える力を育む『データの分析』の授業づくり—PPDACサイクルを活用した教科横断的な取り組みを通して—」の一環として行った。

2. 対象生徒：2年情報系列（12名）

3. 目的

新聞の社説を読むことは、読み書きに弱さを抱える本校の生徒にとって、非常に難易度の高いことであり、生徒自身も苦手意識を感じていると想定できる。そこで社説の1文1文を事実と筆者の意見に分類する作業からスタートすることで、そこに楽しさを見出させ、読み進めやすくしていくことから始めることにした。そして、その延長線上に、興味・関心をもつ事柄に注目させ、その事柄に対して「PPDACサイクル」を活用して考察することで生徒の「自ら考える力」を育てていく事を目的に実践を構想した。

4. 内容

①生徒が社説を読みやすくするための工夫

社説の文章中の述語に注目して、別紙「事実と判断・意見を区別しよう」(図1)を作成した。別紙を参考にしながら、事実と意見を分けて読み進めていくように意識させた。

②PPDACサイクルとは

「Problem：問題」、「Plan：計画」

「Data：データの収集」、「Analysis：データの分析」、「Conclusion：結論」を表す。

PPDACサイクルは、統計的探究プロセスの1つであり、データを利用した問題解決の「手段」となる。

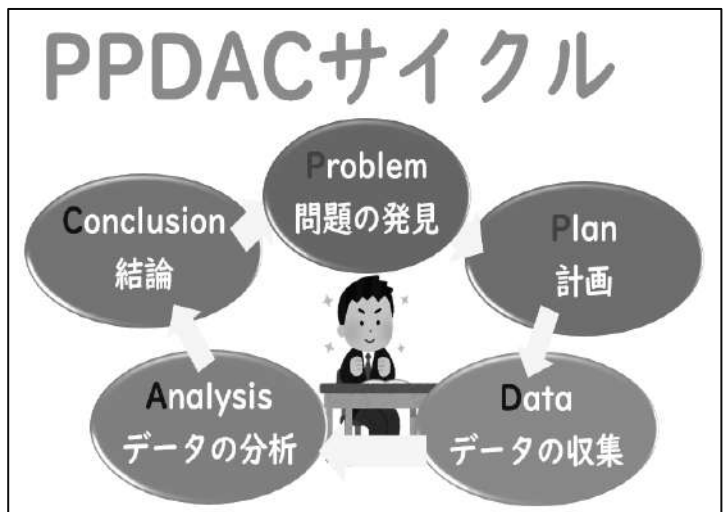


図2 PPDACサイクル

③授業の流れ・生徒の取り組み

現代社会（1時間目）と基本数学（2時間目）は連続授業で行った。現代社会で各生徒が毎日新聞社の5つの社説から1つを選び要旨をまとめる。そして、興味・関心をもつ事柄に注目し、その中から調べてみたい事柄を1つ取り上げる。それについて、基本数学ではPPDACサイクルを活用して、関連するデータを収集・分析し、得た結論を自分の言葉で発表を行う。

事実と判断・意見を区別しよう

社説は新聞社としての意見を述べる「論説」です。「意見」に注目すると、要約がしやすくなるでしょう。社説等でよく使われる判断や意見を表す語を下の表にまとめました。事実を示してから意見や判断を述べるパターンが多いことも参考になります。

論説を構成する事実と意見（判断）の例


客観的（事実）	主観的（判断や意見）		
	推測的判断	判断・意見・要望	状態・理由・評価
～である。 ～であった。 ～を行った。 ～があった。 ～した。 ～だ（断定の判断）。 確実性が高い	おそらく～ ～と考えられる。 ～と推測できる。 ～と推測される。 ～と推察する。 ～とみられる ～かもしれない	～思う。 ～考える。 ～考えられる。 ～かどうか分からない。 ～ではないだろうか。 ～べきである。 ～べきだ。	(形容詞・形容動詞) ～高い。 ～良い。 ～静かだ。 ～悪質だ。 ～が元気だ。 ～が肝要だ。
明らかに～である。 ～明白だ。 ～明らかである。 ～確実である。 ～間違いない。 ～に違いない。 ～可能性が高い。 ～の疑いが強い。	～だろう。 ～であろう ～であるはずだ ～可能性がある。 ～だろうか。 ～恐れがある。	～必要がある。 ～欠かせない。 ～期待する。 ～期待したい。 ～願っている。 ～してほしい。 ～たい。 ～が求められる。 ～ねばならない。 ～してはいけない。 ～うではないか。	(原因・理由・根拠) ～からだ。 ～からである ～のである。 ～のだ。 (評価) ～を評価できる。 ～優れている。 ～は誤りだ。 (～といえる) ※
～といえる。 (根拠に注意すること)	※～だ。(断定の判断：は何をどう判断したか考えること)		

※表が示す客観性は参考程度です。必ず、前後に示された根拠を手がかりにしてください。

1 事実と意見・判断に分けよう（意見や判断に蛍光ペンでマーキングする）。
2 意見に注目して段落に分け、伝えたいことを要約しよう。

	伝えたいことのポイント・要約
新聞	<ul style="list-style-type: none"> ・ ・ ・ ・

図1 事実と判断・意見を区別しよう

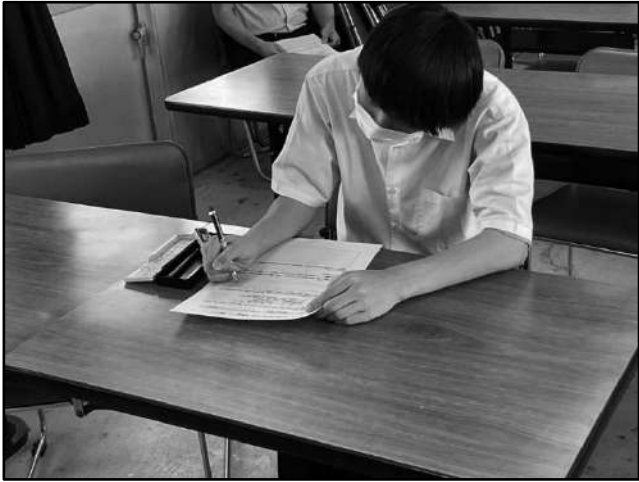
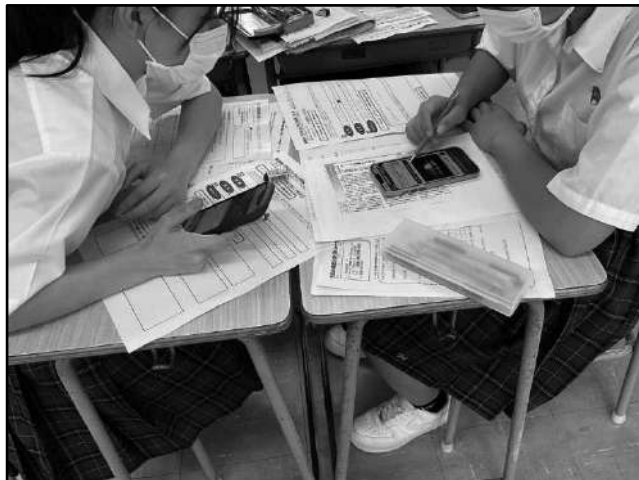
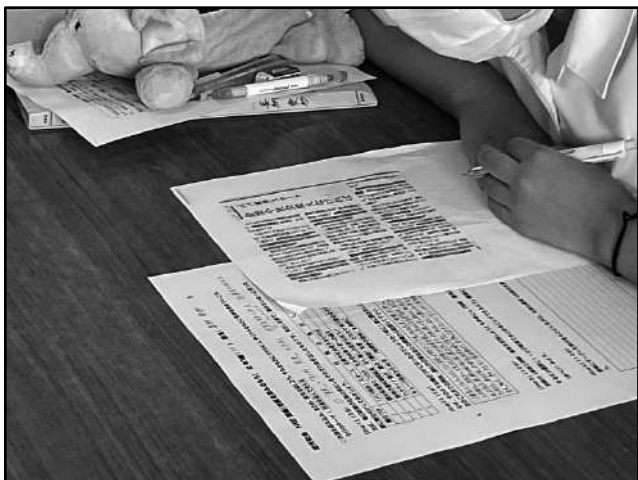
時間	教科	生徒の活動	指導上の留意点
1	現代社会	<ul style="list-style-type: none"> ○用意した5つの社説の見出しの一覧を生徒に提示する。 ○見出しを見て、読みたいと思った社説を選び、なぜ選んだかの理由をまとめる。 ○選んだ見出しの社説を受け取る。各社説を段落にわけ、それぞれの段落の要旨を1行程度にまとめ、それをもとに社説の要旨をまとめる。 	<p>※その際に、「事実と判断・意見を区別しよう」(別紙)を活用しながら、事実と意見を蛍光ペンで線をひきながら読むように促す。</p>
2～3	基本数学	<ul style="list-style-type: none"> ○社説ごとにグループになり、要旨からさらに調べたいこと(課題)を設定する。 ○PPDACサイクルを活用して、スマートフォンやiPad等を利用してデータの収集・分析を行う。  <ul style="list-style-type: none"> ○分析したことから結論を出し、一連の流れをまとめる。 ○まとめたことについて、各グループで発表する。 ○それぞれ質疑応答や聞いた後で自己の意見や考え方を相手に述べる。 ○振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・PPDACサイクルを活用するために適切な事柄かどうかを意識させて選択させる。 ・PPDACサイクルの流れに沿ってまとめるよう促す。

5. NIE 実践を終えて

PPDACCサイクルを活用した問題解決活動において、最初の「P:問題」につながるテーマを新聞の社説から選ぶことで、時事問題に対する生徒の興味・関心を促すきっかけになった。タイムリーな話題に対して積極的に取り組む様子が見られた。現代社会では、事実と意見を区別しながら社説に蛍光ペンで線を引くことでスムーズに読み進めることができた。そして基本数学の時間では、気になるキーワードについてインターネットを検索して、集めた情報からグラフを作成したり、グループで話し合ったりして結論を導く様子が伺えた。発表ではグループごとに、選んだ社説についての要旨とPPDACサイクルを活用して考察した過程について説明することができた。

初めての取り組みではあったが、生徒の意欲的な様子が見られたことから、今後も他社の社説を使用したり、考察時間を延ばしたりと工夫を加えていきたい。

【生徒の活動の様子】



(3) 福祉の授業での取り組み (報告者：仲松 聖：福祉科)

『自分ごと』として考えてみよう～支援する側とされる側 互いの関係性づくりで必要なこと

本校、保育福祉系列では、『介護職員初任者研修養成』を実施している。介護に携わる専門職として、その技術や知識の土台となる重要な基本理念である「基本的人権」「個人の尊厳」について、新聞記事を教材とし『自分ごと』として考え、発展的な学びを深める機会とした。

2. 対 象・実践方法

(1) 対象：保育・福祉系列2学年 4名

(2) 実践方法

①学習プリント1. 2. 3の取り組み

②新聞記事から考えてみよう1『ひきこもり社会の理解を』・新聞記事の読み聞かせ

※新聞教材 (NIE 教材は、地歴公民科の職員に作成してもらったものを使用)

③新聞記事から考えてみよう2『インクルーシブ教育と共生社会』・新聞記事の読み聞かせ

④「支援する側とされる側 互いの関係性づくりで必要なこと」について自らの意見を発表し、まとめる。

3. 目 的

専門職としての基本的理念の理解と共に、支援をする側も状況によっては支援される側になること。互いの関係性づくりにおいて大切なことを考える機会とする。また、新聞を「読む力」だけでなく、「聴く力」を通してより自分ごとに落とし込める授業実践の工夫に努める。

4. 教 材

2年 介護職員初任者研修 No. _____

2年 級 番 氏 名 _____

1 あなたにとっての「幸せ」は何でしょう？

2 福祉(介護・福祉・児童など)が必要な状況になったら、あなたはどうしたいですか？

3 その人らしく「量産・高品質人材」を育てたい。人財を育てるには、どうしたらいいですか？(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

4. 新聞記事から考えてみよう1 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

5. 新聞記事から考えてみよう2 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

学習プリントは、教科に関する問い【4. (2)】も設け、新聞教材と教科の学びを関連づけた内容とした。

【学習プリント】

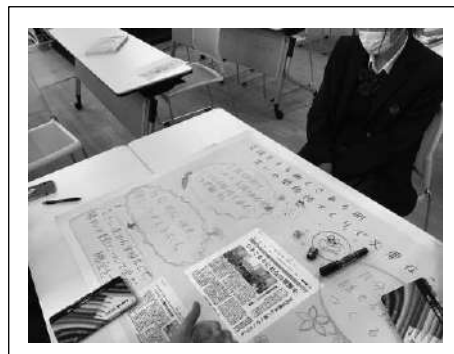
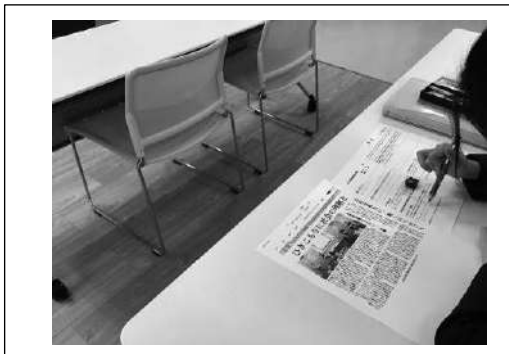


新聞教材①『ひきこもり社会の理解を』



新聞教材②『インクルーシブ教育と共生社会』

4. 授業の様子



新聞教材①では、「自らの思いを話せる場所が必要。」「どのような状況でも一人の人間として尊重することが大切。」と言った、意見を伝え合っていた。また、「支援をしてあげている。」という上から目線が支援される側にはとても強く伝わるため、気をつけなければいけないという意見もあった。

互いの意見をまとめポスターとして掲示

新聞教材②では、共に学ぶ事への心配ごとや理解するために大切なことについて意見をだしあっていた。障がいについて、早期に学ぶことが重要であるとまとめた。



5. 授業を終えて

自ら新聞記事を読むことに抵抗を示していたが、授業展開の工夫として読み聞かせをしながら、語句の説明を入れ、状況や内

容を理解させることに努めた。その後、再度自ら新聞記事を読み込み、それぞれの考えを出すことができていた。また、1つのテーマについてそれぞれの意見を出し合い、まとめることで新たな視野の広がりにつながった。生徒たち自身が、支援する側の立場だけではなく支援される側の心情に寄り添い、理解することの大切さに気づくことができた授業であった。さらに、自分たちの学びを他の生徒へも理解を求めたいとのことで、ポスターとしてまとめることも考案し、アウトプットすることもできた。今後は、専門職としての支援方法のみだけでなく、信頼関係の構築方法など日々の生活における人間関係づくりにもつなげていける授業を展開していく。

5 課題と展望

昨年度、本校に転勤してすぐに、NIEの協議会の方から実践校のお誘いを受けた。まだ、職場の勝手も知らない状況の中で、数人の先生方へ私自身のこれまでのNIE教育や実践の内容やNIE教育の魅力を語り、協力を得ることができ、実践がスタートした。一年目の実践では、昨年度の報告書でも書いたように、ある一定程度の成果をあげることができた。一年目の取り組みの中で、アンケート調査などをもとに生徒の実態や学力面、生活面などの課題などを分析でき、それを克服するために、職員間で連携した実践として取り組めたのは大きな成果だった。また、その後、実践報告書を職員間で共有することで、個々の職員が生徒の課題を克服するために、それぞれの教育実践の中でどのような内容の取り組みをするべきかを考えるようになり、その中でNIE教育に対する理解と教育実践としての効用に対する理解も深まったのは収穫であった。

2年目の取り組みは、本報告書の「はじめに」にも書いたが、その基盤をもとに、よりバージョンアップして、教科横断的なNIE実践の取り組みができるということに挑戦した。この教科横断的な取り組みの弱さは、教科の専門性が高いがゆえに、個々の職員が必要性は感じながらも、なかなか取り組みが進まない高校の実践現場全てにおける課題でもある。さらに言えば、生徒に学びの意味とその喜びを掴ませ、「真性の生きる力」を育成するためには、なくてはならない要素である。

その点に関わって、今回、日本新聞協会の実践指定校として最終年度の取り組みを進める中で、社会科だけでなく、その他の教科と一緒にコラボレーションする形で身につけさせたい力を構想し、それをもとにともに授業を構想し、実践できたのは、わたし自身の経験においても非常に有意義な経験であった。

また、2年目の実践の課題として、あげた「学びに向かう力・人間性」に関わり、「学習に対する主体的な意識や態度、意欲を育成する」ことを意識した実践の展開に関しては、探究的な取り組みへと少しずつではあるが取り組みをすすめることができたこと、また、教科横断的な取り組みの端緒となる実践が始められたことは良かったと考える。この点に関しては、実践指定校として、生徒達が県内外の新聞を閲覧する機会を得ることができたことで、県内2紙だけでなく、大手県外紙も含めて、それらの新聞を読み比べる経験ができ、特に、各新聞社の社説などを読み比べながら、探究的な活動に繋げていったのは、非常に良かった。

各新聞社の社説は、言うまでもなく、その社説を書くために、各社の論説委員かなり広い詳細な調査・研究を踏まえて書いているということ、また、それを踏まえた課題・問題点が明確に示されていることから、その社説を各生徒が読み込み、理解を深めるための活動を行っていくこと自体が、探究的な

視点の獲得や探究的な活動の足がかりにもなると考える。今後も今年度の活動の成果をもとに、こうした実践の中身を掘りさげて、生徒の探究的な活動を組織し、その中で、各生徒の学びの幅と学びの深さを追求した実践を構想していきたい。

他方で、昨年度からの継続となる朝学を通した学校全体での取り組みだけでなく、国語科、数学科、福祉科との連携した取り組みへと、幅を広げて実践を構想、展開でき、その取り組みの成果は、目に見えないもの、すぐには表に出てこないものなども多くあろうが、はじめにでも触れた学力面での課題克服について焦点化して見ていくと、Benesse の学力診断テストの4月度と9月度の成績変化に見てとることもできるのではないかと考える。例えば、3年生が1回目の成績平均D3+から2回目の成績がD2-と1アップ、2年生が、1回目の成績平均がD3+から2回目D2-と1アップ、1年生が、1回目：D3+から2回目D1+と大きくアップすることができたことにも表れているのではないかと考える。特に、語彙力や読解力に焦点化すると、国語の成績は、1年生が、D2-からC3-へ3アップ、2年生が、D3+からD2-と1アップ、3年生が、D2+からD1-と1アップしていることからその成果が表れているのではないかと考える。

次年度も、この2年間の取り組みをベースにして、多くの先生方がNIE実践の効果と魅力を伝え合い、さらに多くの職員がNIE実践に取り組んでくれることを期待して結びにかえたい。

(地歴・公民科：比嘉 啓信)

「確かな学力を身に付け、主体的に学び合い高め合う生徒の育成」

～新聞を活用した授業実践を通して～

糸満市立糸満中学校

校長 大城直之

教諭 久山智恵子

1 はじめに

本校は、平成29年度よりNIE実践指定校として授業改善につなげる実践に取り組んでいる。今年度も、沖縄県NIE推進協議会指定実践校として、前年度同様、各教科でNIEの手法や新聞を活用しながら授業改善に取り組み、その他にも「持続可能な開発のための教育（ESD）」や「海洋教育パイオニアスクール」の実践校として取り組んできた。

本校の校内研究の主題である『確かな学力を身につけ、主体的に学び合い高め合う生徒の育成』を目指した授業改善の中から新聞を活用したNIEの取り組みを紹介する。

2 実践の内容

(1) NIEコーナーの設置

県内2社の新聞を各学年と図書室に新聞閲覧コーナーを設け、生徒が自由に新聞を閲覧できるようにした。各学級でも新聞記事を掲示するスペースを作り工夫して取り組んだ。今年度もSDGsに関連するコーナーを設置し、新聞で紹介されるSDGsに関する記事を閲覧できるようにした。



【図書室の閲覧コーナー】



【新聞閲覧コーナー】

(2) 新聞を活用した特設授業の実施

教科の特性に合わせ、NIEの手法や新聞の記事を活用した授業に取り組んだ。以下、実際に教科で取り組んだ実践事例を紹介する。

①社会科 大城宗 教諭

【沖縄県復帰50周年 特設授業】

復帰前の沖縄の様子が分かる過去の新聞記事を読み取り、現在の沖縄と比較することを通して復帰に対する理解を深め、主権者として社会に関わるという意識を育てることを狙いとして実施された。(図1)

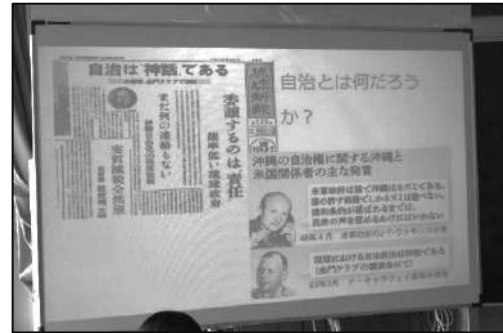


図1 活用した記事

②道徳 全クラス担任

【特設授業（「りゅうPON!」「ワラビー」活用授業）】

『沖縄戦や復帰を通して考える～沖縄の過去・現在・未来～「沖縄の未来の担い手として思いを伝えよう」』をテーマとし、小中学生新聞「りゅうPON!」「ワラビー」特別号を活用し平和学習を実施。（1）復帰から50年の歴史を振り返り、その時の人々の思いについて考えることを通して、これからの沖縄の未来の担い手として、平和な島を築き上げていこうとする心情を育てる（2）沖縄戦に関わる、過去・現在・未来について、学んだことや考えたこと、感じたりしたことを未来の自分へのメッセージとして思いを発信することをねらいとした。授業の流れは、①新聞記事から5つの写真を取り上げ、フォトランゲージ【図2】②「りゅうPON!」「ワラビー」を配布し、写真に関する内容を探し、考えたことと比較【図3】③新聞記事で学んだことや感じたことを沖縄の未来を担う一員として、未来の自分に向けて手紙を書く。【図4】



図2 ①フォトランゲージの様子



図3 ② 実際の記事内容を確認



図4 ③未来の自分宛の手紙を書く



③総合的な学習の時間

3学年全クラス【中学3年 海洋教育講話 「大規模災害から学ぶ（東日本大震災からの教訓）」】

新聞記事で学んだ内容をもとに、外部講師を招聘し、県外の事例をオンライン講話を通して島嶼地域に住む私たちが、持続可能な地域の自治・防災の考えを学ぶ機会とした。調べたことをB4サイズの新聞にまとめた。【図5】



図5 生徒の作品を掲示

【「糸満ハーレー」講話】

糸満ハーレー行事委員会参与、与那嶺和直さんによる「糸満ハーレー」講話（2・3年生）

【「糸満ハーレー聖地巡礼ウォークラリー」】

全校生徒による「糸満ハーレー聖地巡礼ウォークラリー」。糸満ハーレーにまつわる場所を回り、糸満ハーレーの歴史に触れる。

④校内研修（NIE授業づくり）

【「新聞の活用方法」「授業づくりの考え方」「新聞を活用しての授業づくり（ワークショップ）」】

NIEアドバイザー松田美奈子氏（読谷中学校主幹教諭）を講師に迎え、新聞を活用した授業づくりを紹介していただいた。初めてNIEについて学んだ職員がいたり、実際に体験することで、今後の授業のヒントとなったと感想を述べる職員もいたり、2学期の授業づくりに向けて大きな学びとなった。【図6】



図6 研修を受ける先生方



【令和4年8月10日（水）沖縄タイムス掲載】

⑤生徒会

【NIE新聞速報事前勉強会】

沖縄タイムスの又吉記者から新聞の構成や新聞ができるまでを学び、記者の仕事について学び、県中文祭の子供記者として写真の撮り方と取材の仕方などを学び、県中風学校文化祭に生かした。（図7）



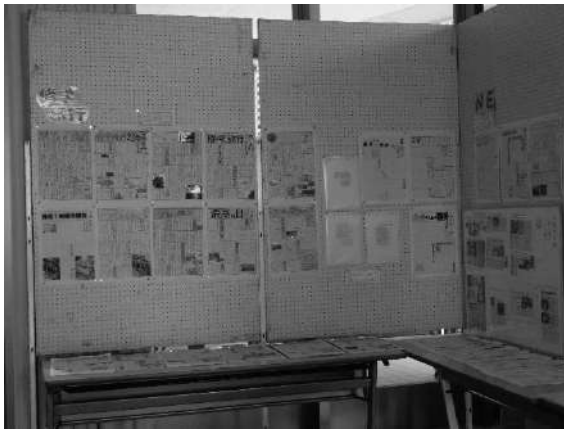


図7 研修の様子

⑥ 中文祭

【NIE 取り組みの掲示】

本校がこれまでに取り組んできた作品を展示した。



【図8 沖縄県中学校文化祭で紹介した展示作品】

⑦ 美術 金城絵美子 教諭

【りゅうPON! 題字コンテスト】

「りゅうPON! 題字コンテスト」に応募し、本校から多くの生徒が賞に選ばれる。

<p>久山 輝人さん(糸満中2年)</p> <p>子どもたちの目にとまり、興味を持ってくれるような字と絵にしました。りゅうちゃんを感電させたように骨を描いて面白みを出しました。自立つように文字を赤で塗り、背景の色も工夫しました。</p>	
---	--

<p>うみんちゅ りゅうちゃんです</p>	<p>石橋 美球さん (糸満中2年)</p>
<p>見ただけで沖縄の魅力が分かるように「り」を木に、「ゆう」は釣り針と魚に見立て、「PON」でりゅうちゃんが釣りざおを引っ張っているように見立てました。</p>	

<p>シェンロンです</p>	<p>鈴木 淳之介さん (糸満中2年)</p>
<p>「りゅうPON!」のキャラクターが龍になった感じで描いてみました(りゅうPON!のりゅうから取って)。龍に合わせて文字もそれっぽくしました。</p>	



(3) 『はがき新聞』の活用

①授業で調べたことや伝えたいことを『はがき新聞』にまとめ発表した。発表後は、学年フロアーに掲示し情報を発信した。



(4) 社会科新聞作成

授業や夏休みを活用して社会科新聞に取り組んだ。生徒は新聞作成に必要な条件や見出しの決め方を学び、個人で決めたテーマをもとに限られた字数の中でどう伝えるかを工夫して作成していた。作品は、「中学校社会科新聞コンクール」に出展している。その結果、沖縄賞1名、金賞19名、銀賞14名、銅賞24名と多数の生徒が入賞した。

(5) 新聞投稿に挑戦

学習の感想や学期はじめの抱負など、新聞投稿に挑戦した。投稿のねらいは、自分の考えや気持ちを表現することである。生徒は限られた字数で自分の伝えたいことを相手にわかりやすく書くための工夫をしながら「書く力・表現する力」を高めた。今年度は、休校中に生徒自身が自ら投稿している記事もあり、新聞投稿が生徒の身近なものになってきている。

中学校に入学して

糸濱市立糸濱中1年 上原 霞軒

私は中学校に入学し、みになりました。とても心算して、部活動の中で私が興味を持ったのはダンス部です。なぜなら先輩さんあると聞いていたからです。今日行われ、先輩さんや部活のVTRを見、先輩方とても楽しそうに部活をしていて、分かります。思いますが、先輩方から紹介されたので、中の部活について先輩方学校生活がとても楽し

さらに伸ばしていきたいです。苦手な教科を克服でき、少しづつ頑張りたいです。成長できたらいいです。さらに、別の学校から来た人たちとも仲良くするために、自分から積極的に関わりかけたいと思います。

令和4年4月22日(金) 琉球新報

中学に入学 勉強しつかりと

玉城天音(音)中1

で、教科を再確認して興味を持って学習に取り組みたいです。部活動は5月まで自分が一生涯にやり通せるものを見つけて、先輩方と共に部活動を盛り上げて、さまざまな面で自分自身の向上に努めたいと思います。(糸濱市・糸濱中)

中学校からは算数が数学に呼び名が変わったり、新しい教科がきたりするの

令和4年4月23日(土) 沖縄タイムス

中学校に入学して

糸濱市立糸濱中1年 伊礼 壮哉

中学校の入学式を終えて、少し不安にもなりましたが、学校の授業は教科ごとには先生がかわるだけでなく、移動教室と手帳がわいてきました。室も多くなります。授業に臨む時は不安の中で新学期を物忘れもしつかりと覚え、提出物などもおろそかにすることが多くなりました。自分の好きなことと頑張りたいです。先輩方から紹介されたので、中の部活について先輩方学校生活がとても楽し

新しい教科書が16冊ももったので、中学校のいろいろな活動を頑張りたいです。

令和4年5月1日(日) 沖縄タイムス

成果と課題

【成果】

- 各学年フロアー、図書室に新聞の閲覧コーナーを設置したことで、生徒が日常的に新聞に触れることができた。
- NIEアドバイザーによる「授業づくり研修」を実施することができ、ワークショップを行いながら、新聞を活用した授業を実際に体験することができた。

【課題】

- 特設授業が多いので、各教科等の年間指導計画に位置付けることで、見直しをもって授業に取り入れることが必要である。
- 次年度もNIEに関する校内研修を計画し、職員全体で授業づくりについて更に深めていく必要がある。

2022年度 読谷中学校 NIE実践報告書

読谷村立読谷中学校

校長 與那覇直樹

主幹教諭 松田美奈子

1. はじめに

今年度から沖縄県NIE実践指定校の指定を受け、NIE実践校指定1年目となった。NIEを授業改善や授業力向上の手立てのひとつとして、相互に連動させながら各教科や領域などの教育活動に取り入れていくことを共通実践・共通理解で確認した。1年目なので、「NIE入門」を意識しながら、NIEの理論と実践、啓蒙を進めていくこととした。

2. NIE推進テーマ

「主体的・対話的で深い学びを育み、自己肯定感を育むNIEの実践」
～学びに向かう集団づくりや生徒視点の授業づくりを通して～

3. 学力向上推進テーマ

「キャリア教育の視点を踏まえた新たな時代の授業実践」
～ICT機器を活用した授業改善を通して

4. 校内研修テーマ

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり」
～ICT機器（タブレット）を活用した授業～

5. 新聞の設置

- ・NIE用新聞は各新聞社ごとに図書館内にある専用棚に入れ、授業時に生徒が検索や閲覧ができるように仕分けした。
- ・本校独自で購読している県内紙（琉球新報・沖縄タイムス）は最初は職員室で閲覧できるようにしている。その後、図書館に移動させ、NIE用新聞と区別して誰でも閲覧やコピー、貸し出しができるように教職員同士で共通確認をこまめに行いながら、新聞が身近な存在となるよう設置場所や新聞を開きたくなるような仕組みや周辺環境を整備してきた。

(2) 校内研修

- ①オリエンテーション「NIE入門～NIEで身に着く力・教育的効果・記事の教材化～」
(4月5日 講師：松田美奈子主幹教諭 NIEアドバイザー)
- ②NIEミニ研修会「NIE講座 ～新聞のしくみと特徴～」
(10月7日 講師：松田美奈子主幹教諭 NIEアドバイザー)

(3) 実践教科・領域と内容

- ①社会：山形県の第4のサクランボを考えよう、都道府県調べ、2022年度10大ニュース、難民問題、
：沖縄本土復帰50年
：行事や授業などの振り返りとして、「振り返り作文」を取組み、県内2紙に新聞投稿し、2年生や3年生を中心に多くの生徒の作品が新聞に掲載された。
- ②美術：作品鑑賞
- ③道徳：読谷村のガマについて
：沖縄戦について考えよう（全学年・全学級）
：新聞投稿記事コラムを活用して、思いやりの心について実践した。（TT授業）
：沖縄タイムス新聞記事投稿「茶飲み話」掲載記事を活用しての道徳授業
（中堅研の道徳授業の示範授業を実施した）
- ④総合的な学習の時間：「平和学習」（全学年）
- ⑤学活：「第12回しんぶん感想文コンクール取組み」（2学年中心に実践）

(4) その他

- ①「学推だより」
 - ・職員向けに発行
 - ・内容は学力向上や授業改善に関する記事を掲載し、記事の要約や記事から読み取れること、記事のキーワード等を入れ、授業づくりのヒントになるよう心がけて作成した。
 - ・学推関連の記事を抜粋し、記事の「キーワード」から職員への発問を掲載し、発行者側からの一方通行にならないよう、職員の意識高揚をねらった。発問に関して、職員からの記述があったものは、校長や教頭に目を通してもらった。

6. 生徒の変容・成果・課題

(1) 生徒の変容①最初の頃は新聞のしくみや特徴が分からず、興味がある面（スポーツ）や写真、広告面ばかりを見る生徒が多かったが、見出しの特徴・リード文の役割など新聞の特性や特徴を教師が説明した後は、他の面も読む生徒が徐々に増えた。

②落ち着きのない生徒が徐々に落ち着いてきた。

③自分で考える前に友人や教師にすぐ質問し早急に答えを知りたがる生徒が、まず自分で考えてから、その後、友人に質問するようになった。

④ペア学習やグループ学習を苦手にしてしていた生徒が小さい声ではあるが、グループでの話し合いや意見交換に参加することができるようになった。

⑤生徒からの質問が増え、意欲・関心が高まり、質問のレベルが上がった。

(例)当初は「全部分からない」という質問から「〇〇は分かるけど、□□のこの部分が分からない」という具体的な質問になった。

⑥各グループでの学び合い、教え合い、聴き合いなどが見られるようになった。

⑦各コンクール、各コンテストに入賞した生徒や新聞に作文が掲載された生徒たちに対して、多くの生徒や保護者、地域の方々から称賛され、自己肯定感が向上した。また来年も挑戦したいという生徒や自分もやってみたいという生徒が増え、仲間意識が深まった。

(2) 成果

①集中力が高まり、表現力が向上し、自信を持つ生徒が増えた。

※NIEを実践することで、学力向上だけでなく、物静かな生徒が自己有用感が高まり、後に、生徒会役員選挙に立候補した生徒がいた。

②時間管理能力が向上した。(タイムマネジメント)

②思考力・判断力・表現力が高まった。

③各コンクール・コンテストへの応募についても、入賞者さらに上位入賞者が出て、生徒から生徒への称賛のようすが多数見られた。入賞しなかった生徒が入賞した生徒にグータッチをしたり、自分のことのように喜んでいる姿が見られた。学級によっては、盛大な拍手をするクラスもあった。

特に「第13回いっしょに読もう！新聞コンクール」で学校奨励賞を受賞し、生徒が非常に驚き、飛び跳ねている生徒や拳を挙げている生徒もいた。

さらに、「第12回しんぶん感想文コンクール」琉球新報賞・優秀賞・奨励賞・入選の生徒本人や保護者、親族(祖父母、姉妹)から取組応募への感謝の言葉が多数あった。

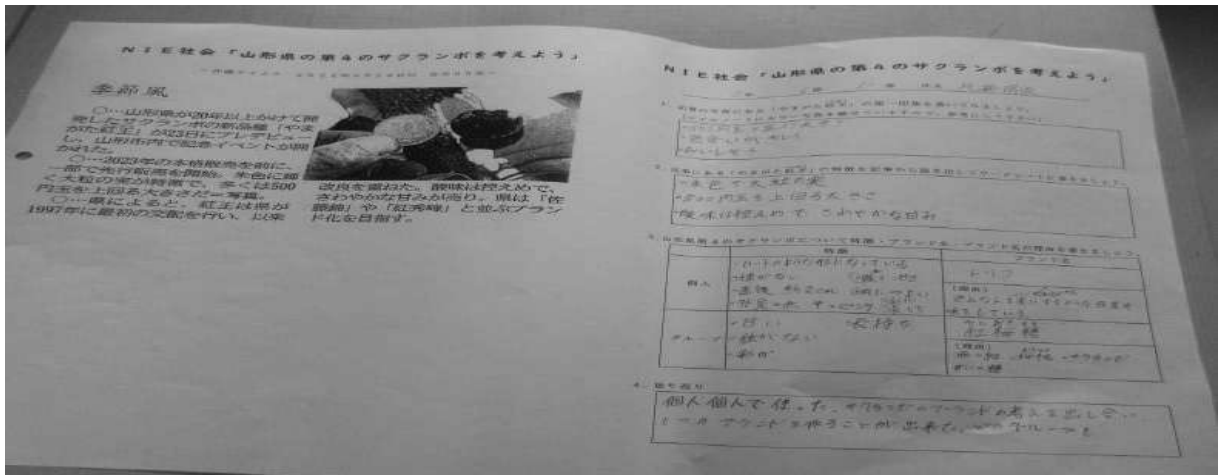
⑥理由や根拠を書くことを苦手にしてしている生徒が減った。

⑦コミュニケーション力、分析力、問題発見・問題解決力が身についた。

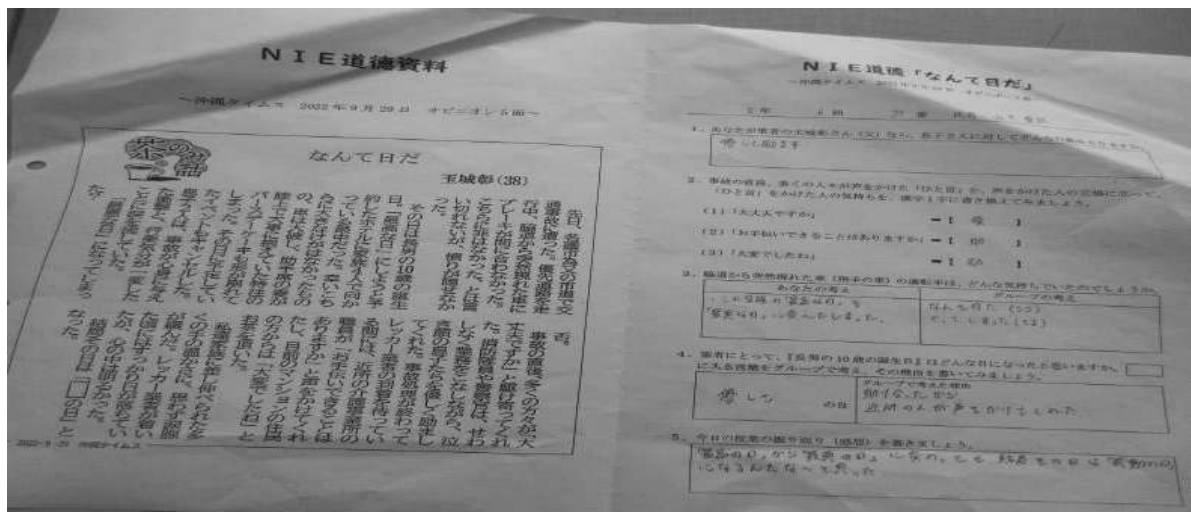
⑧文章を要約して書く、「要約力」や発信力が向上した。

- (3) 課題
- ①一部の教科・領域の実践で、偏りがあった。
 - ②NIEに関して、職員の温度差があり、新聞を活用することに「難しい」「面倒だ」と考えている職員もいる。
 - ③どのような新聞記事を教材化するかということに頭を悩ませている職員が多いので、協働での教材づくりの輪を広げる必要がある。

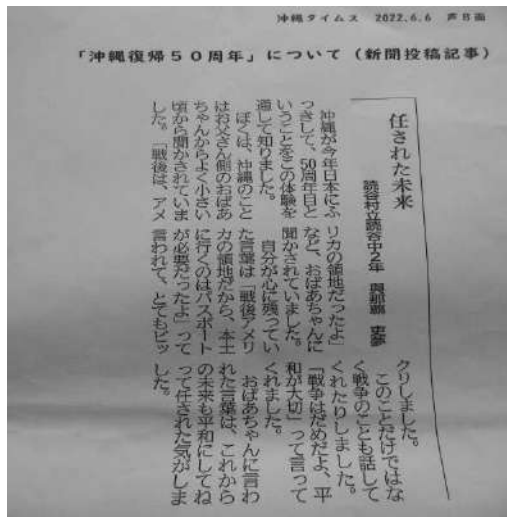
7. 写真資料



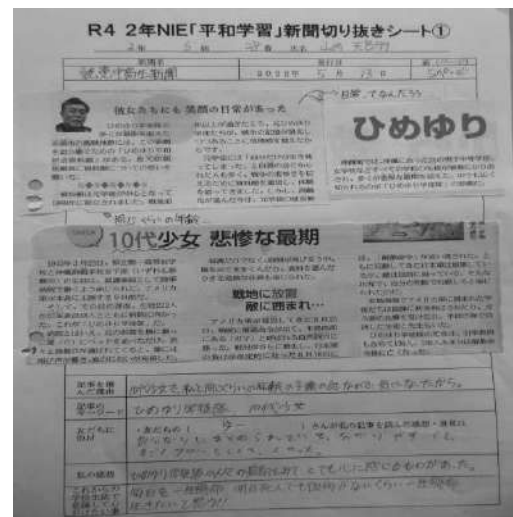
NIE社会「山形県の第4のサクラランボを考えよう」(2年)



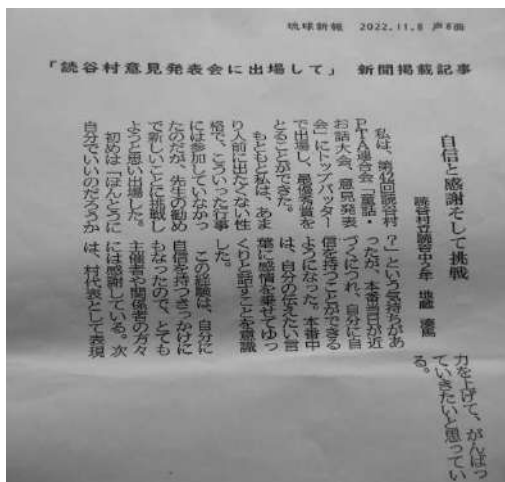
NIE道徳「なんて日だ」(2年:思いやりの心)



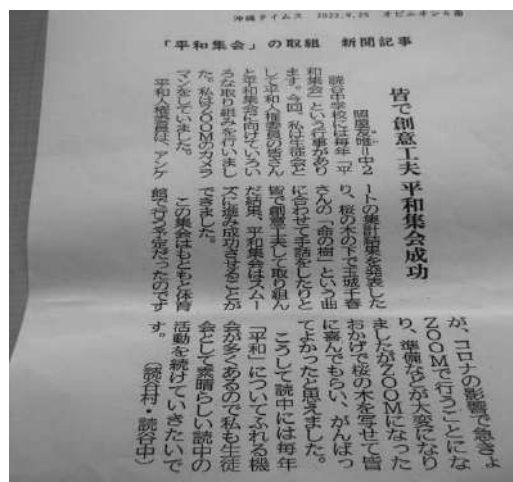
沖縄復帰50周年（新聞掲載）



NIE平和学習



意見発表大会地区大会出場（新聞掲載）



平和集会の振り返り



県中文祭 新聞速報係（おもて面）



県中文祭 新聞速報係（うら面）

2022年度 沖縄県NIE推進協議会 実践指定校 実践報告

NIE REPORT AT HENRTONA HIGH SCHOOL

報告者：教諭 宮城通就

はじめに

本校は世界自然遺産「やんばる」の大自然のなかに位置し、その環境を最大限に活かしながら生徒の感性を刺激することで、彼らに「何事からも学ぶ姿勢」のタネを植え付ける教育活動を目指している。平成13年に県内唯一の専科「環境科」（令和3年より「自然環境科」と改称）が設置され、やんばるの自然を教材とした授業や総合的な探究の時間（SDGsの視点を取り入れた探究学習や平和学習）に取り組んでいる。また部活動ではサイエンス部のユニークな取り組みなどが新聞紙上でもたびたび伝えられている。自分の学校が新聞で紹介されていることに対して在校生・卒業生達からは「うれしい」という声も聞こえることから、新聞記事になるということは自己肯定感の醸成にも大いに役立っているとも言える（特に大先輩達からは「母校が新聞に載る事はとても嬉しいし、後輩を応援したい」と大好評）。

2021年より始めた沖縄県NIE推進協議会指定実践研究校、テーマ「NIEでちゅ〜がなびら〜感じてい 考げーてい 語やびら（伝えユン）〜」も今年度で最終年度となる。この間、学習の三要素＝「自己との対話・テキストとの対話・他者との対話」を身につけさせることを目標の柱としNIEを手段として活動してきた。初年度は①よみとき新聞②日本史授業での活用事例③はがき新聞で卒業メッセージ④NIEでへんなかんじ〜（創作漢字を創ろう）の4事例を通して、NIE的学習手法の効果・有効性を報告した（詳細は『2021年 沖縄県NIE実践報告書』p69～78をご覧ください）。今回は前年度の成果や課題をふまえて、①よみとき新聞②復帰50年目の沖縄③NIEでへんなかんじ〜（創作漢字を創ろう）④2分間スピーチの4事例を報告する。

学校紹介

沖縄県立
辺土名高等学校
創立78年目



校章

制定：昭和21年1月5日

- 形 1, 文字の高は白色
波は黄金色
台は青（濃い青）
- 2, 万里の波濤を蹴って進む高校の姿

精神：万里の波濤を蹴たてて進む姿は人材が各地各界に進出することを表すものである。

- 1, 世界に飛雄、進取、剛毅、果敢の精神
- 2, 常に文化の波の魁となって進む（社会のよい指導者の輩出を表す）
- 3, 豊かな黄金の波うつ、みよりの地に立つ学校（永遠の繁栄を表す）

設置学科：自然環境科
普通科
各学年1クラス

在校生数：89人

卒業生総数

10,588人
(2023.3月現在)

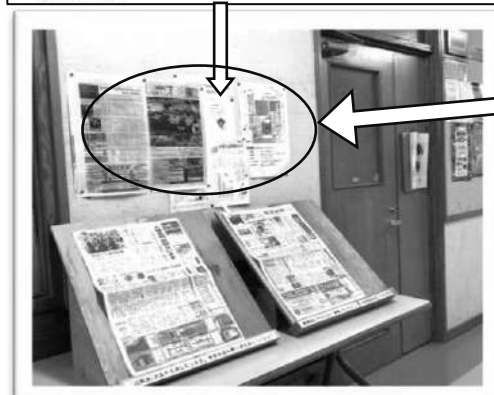
(1) 5W1H

- Who (だれが)
- When (いつ)
- Where (どこで)
- What (何を)
- Why (なぜ)
- How (どのように)

※これらは文章の6要素とも言います。ニュースによっては、六つそろわないこともあります。

(2) 逆三角形

重要な事や真っ先に読者に伝えたいことから書きます。だから、最初の段落(リード)を終わらば、記事のポイントが分かるよ



おでかけりゅう PON ワークシート

伝える工夫 交際関係は分かりやすく伝える工夫が大切です

- (1) 記事 記事の構成が「誰、文が何、何の場面で何」で、リードの構成が「誰、文が何、何の場面で何」
- (2) 見出し 見出しはリード、ニュースを一目で伝える 見出しの構成が「誰、文が何、何の場面で何」
- (3) 写真 多くの情報を一目で伝える
- (4) レイアウト 重要な情報が「誰、文が何、何の場面で何」で、リードの構成が「誰、文が何、何の場面で何」
- (5) ほかに 見出しやリードの構成が「誰、文が何、何の場面で何」

NIE コーナー：職員室前に設置。「新聞を知ろう！」を掲示し、新聞の構成（伝える工夫）

や新聞記者が大切にしている約束事（5W1Hや逆三角形＝記事のポイント）も分かるようにした。

実践事例1 「よみとき新聞」の活用

RISO(理想科学工業株式会社)さんのご厚意による無料配信サービス(月2回:第1・3週)のワークシート(5W1H型)を活用している(4年目)。本年度は主に2学年・3学年の普通科(計16名)で実施した。この実践の狙いは①要約力の育成②論理力の育成の2点である。そしてこのワークシートを使う一番の理由は「日常生活から生じた疑問を学習へつなげたい」という思いからだ。同時に、教科書の内容と現実社会との関係性にも気づいて欲しいという期待もある。

(準備) 登録アドレスに月2回配信されるシートをダウンロード
(実践) (RISO社HP上より入り 登録します)

- ①授業の中で「10分程」時間配分し、取り組ませる
- ①四つの記事の中から、自分が取り上げる記事を選ばせる。
- ②その記事について、5W1Hでキーワードを抜き出す。
- ③100字以内の自由記述(意見・感想)

実践の流れ

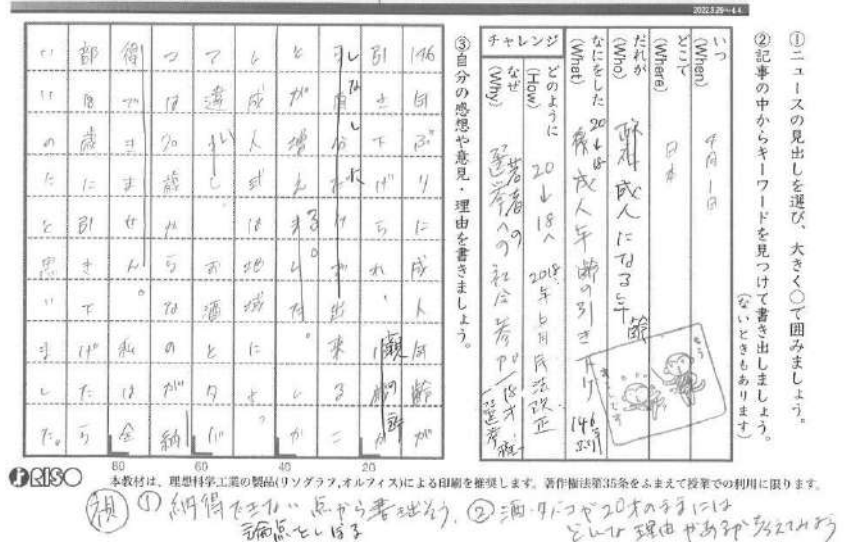
- 留意点: (1) 記事の内容をくり返し説明させない。
(2) 字数制限のため、省略できる言葉や可能な限り換言できる短い語句を考えさせる。
(3) 事実。具体例をふまえた「伝えたい事」「訴えた事」を述べさせる。

(事後指導)

- ④プチ添削: アドバイスや切り口を「視点」として添削



よみとき新聞ワークシート



「視点」 : ①納得できない点から書き出そう(論点を絞ってみる) ②酒・タバコが20歳のままとすることは、(アドバイス) 何か理由があるのでは?・・・どんな理由があるか考えてみよう!そして、18歳に下げた理由も。

《成果》: 生徒感想より(一部)

- ・文章のキーワード(5W1H)を見つけると、記事の内容が簡単に整理できた。
- ・ネットと違って、興味が無い記事も目にするようになった。これが先生の言う「多面的」という意味だと、なんとなく分かったような気がする。

《課題》: 前年度からの目標であった「思考の奥行き(幅を持たせる)・思考の深掘り」まで導けなかった。ワークシートの《チャレンジ》を活用し5W1Hから「6W3H」まで考える段階へ発展させたい。記事から得た情報と自身の生活体験と既習を根拠として「Whom How much How many」も考えさせ、文章を組み立てる力(論理力)を育成したい。

○よみとき新聞からみた生徒達（学習者）の興味関心分野

調査方法：よみとき新聞は社会、国際、経済、スポーツなどの10分野から4つの記事が掲載される。

毎回生徒がどの分野の記事を選択したか（どの記事が興味・関心をひいたのか）の統計をとり、レーダーグラフ化した。

・3年生普通科8名：4月～12月
14回×4＝全56記事

	分野	記事の見出し（上位3つ）	得票
1位	社会 (28票)	首里城 いよいよ復興工事 熊本県アサリ2ヶ月ぶり出荷 全国の落とし物 探せる	5 5 4
2位	環境 (20票)	使い捨てプラの削減 うながす 5年以内に「1.5度」こえるかも 国内の食品ロスは522万トン	5 4 3
3位	学び (14票)	小中学生「1人1台」整う 不登校の中学生最多24万人 大人の学力、どれくらい？	5 3 3

※太文字は2年生と同じ選択記事



3年生：選択分野のレーダーグラフ

社会分野の1位記事（5票）

環境分野の1位記事（5票）

学び分野の1位記事（5票）

・ 2年生普通科7名：4月～1月
18回×4＝全72記事

	分野	記事の見出し	得票
1位	社会 (33票)	首里城 いよいよ復興工事	5
		熊本県アサリ2ヶ月ぶり出荷	5
		10月から食品値上げラッシュ	5
		「成人式」多くは20歳対象で	5
2位	環境 (18票)	国内の食品ロスは522万トン	5
		マツダ、温室ガス「実質ゼロ」へ 絶滅危惧種の出品を禁止へ	4 2
3位	新型 コロナ (16票)	海外からの個人旅行が解禁	6
		中国入国者の隔離は終了へ	5
		解熱剤を買いしめないで	3

※下線太文字は3年生と同じ選択



2年生：選択分野のレーダーグラフ

社会分野の1位記事（5票）：首里城とアサリの記事は省略

環境分野の1位記事（5票）

新型コロナ分野の1位記事（6票）

○よみとき新聞からみた生徒達の興味関心分野（考察）

「日常生活から生じた疑問を学習へつなげたい」という目的でよみとき新聞を活用していると前述したが、今回初めて生徒達の興味関心分野を分析した結果、次の事が見えてきた。それは「生徒達は、より身近な出来事（ニュース）や自分事として置き換えられる記事（ニュース）に多くの関心を集める」という事である。当然だが、実生活と結びつけられる内容の記事（ニュース）を選択する傾向だ。両学年に共通している「国際」や「政治」を選択する生徒が「ほぼいなかった」という事実から考えても、日常生活との関わりは学習への動機付けとし十分に有効であり、このよみとき新聞は十分にその目的を達成できる手段になりえると考える。だが逆説的に考えると、如何に政治や外国の出来事へ関心を持たせるかが課題とも言えるが・・・。

両学年での異なる点を考えると、3学年には「学び」の分野が14票に対して2学年は9票であった。新型コロナに関しては、3学年では6票、2学年では16票であった。スポーツ分野では、3学年は5票、2学年は13票となった。スポーツ分野に関してはクラス在籍の男女差が一番の背景であると推測できるが、3学年と2学年とを比較すると3学年の方が「より社会的な記事」を選択している傾向があることがわかった。

以上の事から、授業の中で生徒達へ提示する記事内容は、身近な記事（自分事にしやすい内容）から社会的な記事（客観的に問題・課題の内容）へと導いていく手法が効果的であると報告する。

実践事例2 本土復帰50年関連のNIE

1：「5.15・6.23 企画展」(図書館主催) NIE 実践

6.23 慰霊の日に向けた図書館主催の企画展が毎年開催される。本校の人権・平和教育委員会へも協力依頼があり、図書委員へのアドバイザーとして今年も協力させていただいた。

その1：復帰関連記事の紹介

図書委員がそれぞれ「沖縄本土復帰50周年に関連する記事やコラム」をワークシートで紹介した（写真①）。記事を通して図書委員の問いかけに対し、来場者は感想や意見を付せん紙に書くことで、「復帰という出来事」・「沖縄県の現状」についての感想や意見を共有することを目的としたNIE活動である。



写真①

その2：全国紙の比較

今年は復帰50年という節目である。4月29日～5月15日までの手に入る限りの全国紙（朝日、毎日、読売、産経）を集めた（報告者の涙ぐましい努力です。県立図書館通いの日々でした）。その新聞記事をもとに、図書委員が「基地賛成」「基地反対」の記事を分け、切り抜き新聞形式で報道の仕方を伝えた（写真②）。

沖縄に関する全国の視点や報道の現状、地元紙との温度差、社説の違いなどを考えることで、情報リテラシーの育成を目的とした。また、メッセージ（新聞）は、受け取る側＝「読む人」を想定して編集されている事にも気づかせたかった。「中立って何だろう」という問いもある。



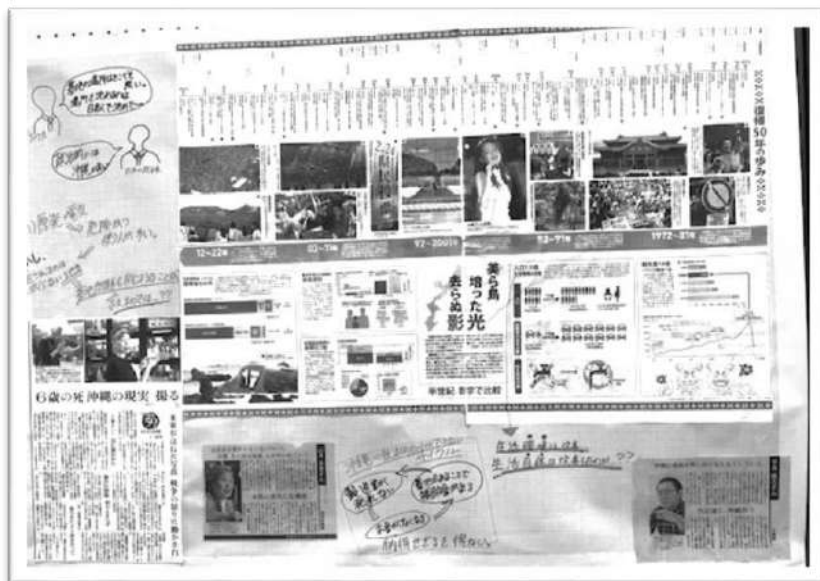
写真②

全国紙の沖縄報道比較：基地問題

その3：非テキストの活用

毎日新聞の特集記事「復帰 50 年の歩み」をベースに、関連する他社の記事も貼り付け、切り抜き新聞を作成した。(写真③)

「美ら島 培った光 去らぬ陰 半世紀数字で比較」の特集記事については「分かりやすい」との感想が多かった。写真や図(グラフ)・イラストなどの非テキストを用いての問いかけは、テキストに対して苦手意識を持っている生徒(学習者)の興味関心を十分に喚起させた。新聞における「特集記事の活用」や非テキストの有効性の事例として報告する。



写真③

ある図書委員の感想は「(復帰することで県民の)生活環境は改善したが、生活自体は改善したのか?という問いを抱き、沖縄県の現状について様々な課題や沖縄県の日本国内での立ち位置や扱われ方など他府県と比べて違う感じがする。どうしてだろう?」と述べていた。是非、この「問い」を入り口として持ち続け、疑問を探究しつづけて欲しい。

その4：全国紙への投稿・狙い：自己肯定感の醸成、言葉の力に気づく

2022年3月に朝日新聞より「沖縄県の高校生を寄せてほしい」との依頼があり、4月からの授業からは、復帰50年に向けた題材や日常生活の疑問などを意識させ新聞への投稿(紙面での意見発表)を前提に生徒と取り組んだ。何度も何度も添削・推敲を重ね、生徒の作品7本を投稿し3本が採用(掲載)された(生徒の皆さん、お疲れ様でした)。全国紙に掲載された事は、彼らにとって大きな自信になったと言える。

2022年(令和4年)5月2日(月) 13版 オピニオン 6

声 Voice オピニオン&フォーラム

やんばるの命を守りつなげたい

高校生 (沖縄県 16)

私の学校は、やんばるの大自然の中にある、創立77年の県立高校です。普通科と、環境科という珍しい学科があり、全校生徒100人にも満たない学校です。

生徒が少ない分、先生方はひとりひとりの生徒に向き合ってくれます。「沖縄の古い高校は、だいたい捕虜収容所跡地か、その近くに設立された」と先生から教えてもらいました。77年前の悲しい歴史を思い起こしました。二度と繰り返してはいたくない歴史です。

教室からは山の緑と海の青さ、空

地位協定が情けなく恥ずかしい

高校生 (沖縄県 16)

僕は沖縄県に住む高校生です。この島の新聞には「性的暴行事件を含む米軍や軍属による犯罪」の内容の記事が1面に出ることが少なくありません。県外の新聞紙面ではこのような事件を報道していきませんか。4月20日付地元紙によると「1972年から2020年で米軍人・軍属とその家族の検挙件数は6068件」とのことです。もちろんその数字は氷山の一角です。なぜ、こんなにも米軍人らの関係する犯罪が、この島で頻発するのでしょうか。

一番納得できないのは「日米地位協定」です。なぜ米軍やその関係者が日本で犯した罪を、日本の法律で裁けないのですか。誰がこんな協定を結んだのですか。私は今まで自分の国がこのような条件を認めていたことを知りませんでした。情けなく、恥ずかしいです。だからこそ日本国民全体の問題として、この協定で一番被害を受けている沖縄の現状を知って欲しいです。

日本人だろうが米国人だろうが、罪を犯せば平等にその国の法律で裁かれるべきです。有事に守ってもらおうという約束があるかも知れませんが、その前に政府は「日常の安全」を保証するべきです。

「大宜味村にあるのに、辺土名高校・・・なぜ?」と問いかけた。そして「やんばるの自然」に対する思いへつなげた。

「数字やエビデンスを入れた方が説得力あるよ」とアドバイス。意見に根拠を持たせ、現在の課題へとつなげる

2022/05/11 「声」掲載

2022/05/14 「声」掲載

この島は一体何に復帰したのか

高校教員 宮城 通就

（沖縄県 54）
 アメリカ世に生まれ、4歳で大和世に変わった。大学時代に島を離れた。旅先で沖縄出身と言ったら「日本語がお上手ですね」と笑顔で言われた。それまで「母国語は日本語」と信じて疑ったことはなかった。山之口巖の詩「会話」を思い出した。島には「象の檻」があった。日の丸が焼かれた。その頃から「内地人」という言葉の意味を考え始め、僕自身が「外地人」であることを知った。基地への土地提供を拒否した知事が裁判で負けた。「自治権は神話」

この占領者の言葉が蘇った。少女が米兵に襲われた。それでも「協定」は維持されている。ヘリが落ちた。またしても「協定」の壁が姿を現した。「危険だ、返還だ」と騒いだ。が、本土の日本人の本音はNIE MB Y (Not in my backyard) 家の裏庭はお断り。だと証明された。本紙の最近の県民世論調査では、沖縄と本土には様々な格差があるとの見方が89%だった。平和憲法下への復帰に手ムドンドン（胸の高鳴り）した日から明日で50年。一体、この島は何に復帰したのだろうか。チムワサワサ（胸騒ぎを隠せない）。

なぜ小さな島に集中するのか

高校生

（沖縄県 16）
 私の通う高校は世界自然遺産の中にあります。学校の前にはコバルトブルーの海が広がり、後ろから「やんばるの森」が包み込んでくれます。自然がいっぱいの沖縄ですが、気になるのは、いまだに海に広がる軽石です。海面を漂い、その下で多くの魚たちが死んでしまいました。もうあまりニュースに取り上げられなくなりましたが、まだ被害はなくなっていないことを知ってほしいです。軽石以上に深刻なのは、戦後77年間、本土復帰後50年間、ずっと続いている「米軍基地問題」です。なぜ

こんな小さな島に集中しているのでしょうか。いや集中させられているのかもかもしれません。私たちの学校でもオスプレイの音で授業が妨害されることがあります。基地近くに住民の被害はそれ以上に深刻です。沖縄の人の中にも、基地で働き、生活している人たちがいます。しかし、生活に経済的問題が障害になっているならば、基地関係収入がなくなっても生活できるように考えてはどうでしょうか。県の経済に占める基地関係の割合は約5%。沖縄に基地は必要ありません。私たちは基地返還地の再開発で成功した例もたくさん知っています。

本島中部の中学校出身。基地の被害（騒音など）を経験。経済と基地の面からの視点をアドバイスした。

自己の経験をもとに「沖縄」と「日本・アメリカ」の関係性を述べた。文字数の関係もあるが、推敲されて削除や修正された言葉があることも生徒達に想像させたい。

投稿を通して生徒達と考えること（考察）

「新聞に自分の名前や意見が掲載された・・・嬉しいさあ～」。この感覚（嬉しさ）は、SNS上で発信することと、何か違うのだろうか？新聞とSNSの相違点を少し考えてみてみた。

共通点は、「自分の事が記事になる。自分の意見が掲載されることで、自分自身が認められた」という自己肯定感が生まれることであろう。言い換えるなら、SNS上の「いいね」を求める承認欲求が満たされることだろう。

違いは、「他者の眼」というフィルターを通ったものなのかどうかだと思う。この点がSNS上の発信と一番違う点だと思える。もちろん、この国は憲法で「表現の自由」が保障されている。しかし、昨今のSNS上の誹謗中傷（人間を死へ追いやる言葉・書き込み）などからは、「表現の自由をはきちがえているのでは、という感想を抱かざるえない（現代日本社会の歪みを反映しているのか？）

「他者への思いやりを忘れた自由は成立するのか」「共感を得られない自由はどこまで許されるのか」、そもそも「人に迷惑かけなければ、いい」の「迷惑」とは何だろう？その「迷惑」を決めるのは「自分」なのか、それとも「他者」なのか？「世間（社会）」なのか？・・・こんなことを、投稿を通して生徒達と話しています（お互いに問いかけながら、情報リテラシーや言葉のすこさや怖さを勉強しています）。

《しーふん：おまけ》 掲載辞退した生徒の投稿文、いい内容でした。全文をご紹介できないのが残念ですが、要約すると、「生まれた時から基地がある。祖母からは沖縄は外国だったと聞いた。沖縄本島の「約15%の土地は、金網で囲まれ県民は入ることが許されず、そこには日本国憲法以上の権利を有する人達が住む外国」がある。私にとって基地は当たり前。「賛成」・「反対」、私にはまだ結論ができません」の内容。不条理や葛藤を実に上手く表現していました。

茶のみ話

拝啓 知事様

宮城通就(54)

あいさつーな 建議書への提案 忘しいーとたん。基地返還 プログラムぬくとう やいびーん。親光立原もてーしちやしびーん。なまかー「福祉立原」ぬさして、いちゃびらな。日本うてい絶対減らないもの。高齢者と眼鏡やんど。アメリカから土地どういもどし、あつたーぬ住宅、老人ホームかいりフォームやさ。あつたー家、ハリアフリーやんどう、リフォーム代もあつさいびんどー。

耳の大きなオズミのキャラクター遊園地なんか、呼ばんでしむんどー。人生を生き抜いた人たちの贈り物。芝生の中、映画のような風景の中での最後のうとういむち などーいびん。して、アメリカに提供している3LDK級のマンションや

しがよーさい、親も代なら優先入居やさ。オジー・オパーが孫の面倒見る。オトー・オカーは安心して仕事ないシステムやさ。ゴヤーやマンゴスデム大和がはまねないびらん。大和や、基地ねーらんむん。日本中の高齢者、美ら島んかい築めていいかな。日本中の高齢者の皆さまに年金を落とすともらわう。総理大臣の言葉を借りたら「インベストイン沖縄」やさ。とー、上巻話あらに？ 福祉立原、くれー命大切にすん艦砲撃えぬくさーぬ子孫ぬ魂（使命）やさ。デニーさん、ちえーやみしえーが？ 大和の皆さま、この案どうですか？ よければアメリカ基地の引き取りから始めてなさい。 敬具

（宜野湾市、公務員）

2022.6.5 沖縄タイムス

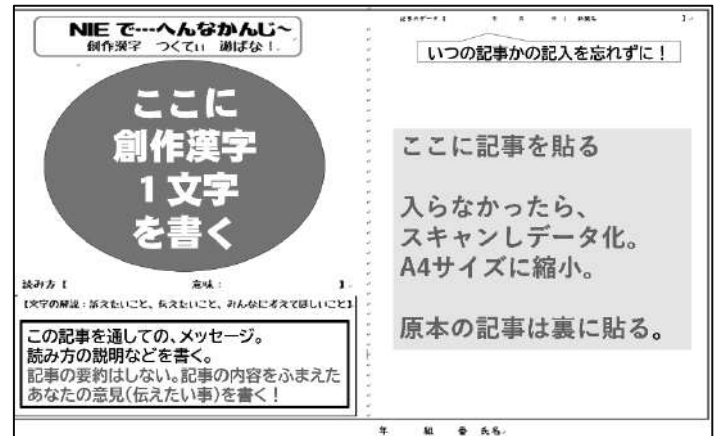
調子に乗って地元紙にも投稿：2022/06/05

沖縄県立辺土名高等学校 NIE 実践報告書
 実践事例3 NIE でへんなかんじ～
 （創作漢字を創ろう！）

ワークシート（報告者作成）：A3版



2022年11月20日 ワラビー（沖縄タイムス社）



「新聞からは、社会の課題がみえる」「新聞は、社会や時代を読み解くカギである」をスローガンとして昨年度試験的に実施した「NIE でへんなかんじ～」を、本音度は本格的に実践した。

ゲーム感覚を取り入れた内容のNIEであり、生徒達も楽しく取り組んでいて、その学習雰囲気からは「何かを創造するおもしろさや楽しさ」に気づけているとの印象を抱けた。オススメのNIE実践です。

授業狙い 課題発見能力、発想力、想像力の育成
 表現力、伝える力、聞く力の育成

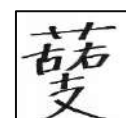
- 《準備》(クラス人数分の新聞：日付は問わない)
 《手順》①新聞記事を選ぶ(見出し読みを教える)
 ②記事の内容をふまえ、その内容を漢字1文字を創作する。(自分のセンスで漢字を創作せず、新しい漢字1文字を創る)
 ③この漢字を通してのメッセージを書く
 ④共有の時間(1人2分以内のスピーチ)

例1 読み方：ジェンダー



「男」+「女」+「人(にんべん)」
 メッセージ：
 男だから女だからというのは、無くして欲しい。男も女も、同じ人間だ。

例2 読み方：ヤングケアラー



「若」+「苦」+支
 メッセージ：
 「自分を犠牲にして家族を支える」を美談としてはいけない。貧困は社会構造の問題。自己責任ではない。

留意点：人格攻撃や誹謗中傷するような漢字はNGとする。批評、提言、批判等の違いにも触れる。

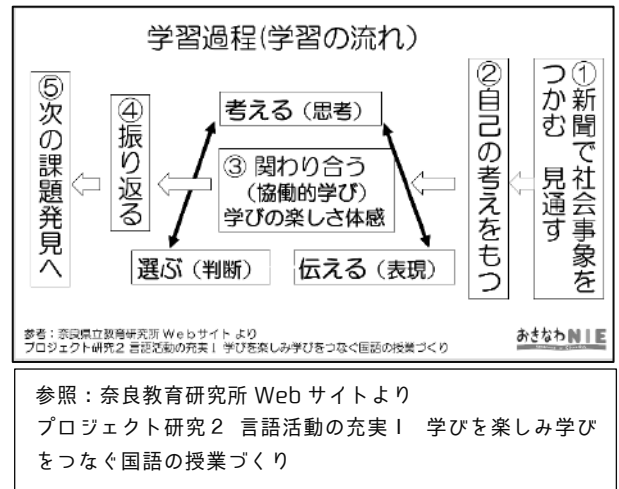
	<p>読み：サンゴしょう メッセージ 地球温暖化によりサンゴの白化が進んでいて、・・・(中略)これ以上白化が進まないように、真剣に考えて欲しいと思います。</p>
	<p>読み：リスク軽減 メッセージ 妊婦にはいろんなリスクがある(中略)お金の問題で医療的ケアを受けられない方々への支援は大切である。まずは母親への支援。</p>
	<p>読み： えんじょうしょうほう メッセージ ひろゆき氏の辺野古を巡る言動・やゆした問題についての記事から「偏見」が浮かぶ。炎上商法を表現した。</p>

上の3点は本年度のNIE授業における生徒作品例

・「NIE でへんなかんじ～ 創作漢字を創ろう！」(考察)

「現実社会でリアルに起きている課題、直面している課題、気づかぬうちに巻き込まれている課題を日常生活と結びつけることで当事者意識(自分事)とさせること」(渡邊巧広島大学大学院准教授:『社会科教育』(明治図書)No 775 p14)の言葉を、このNIE授業の柱としている。結論として、このNIE実践からは期待以上の成果(学習効果)を得たと考える。まず学習の雰囲気である。生徒(学習者)が、すごく楽しそうに授業に取り組み仲間といろんなことを話し合うこと(考えを共有すること)ができていた。また、テキストを読むことが苦手な生徒(学習者)も「自由な発想でいい。自分なりの漢字をつくる」というしぼりのない状況の下からスタートしたことで、自分のイメージに近い漢字を自ら積極的に探し出す姿が「新発見」であった。漢字は「表意文字」である。表音文字と違い漢字には「意味」がある。そして、彼らは漢字には成り立ちにも興味がわいてきたようだ。そのような点をふまえてメッセージ(伝えたい事)を考えてくれた。既成の漢字(伝えたいことに関連する漢字)を一度偏(へん)や旁(つくり)に分解し、記事を通して考えた自己のメッセージに近い姿に(創作漢字へと)再構築する知的活動である。

つまり、選ぶ(判断)・伝える(表現)・考える(思考)という「学ぶ楽しさを体感できるNIE実践」の例であることを報告する(右図)。持論だが、AI時代に生きる彼らへ「これからの時代は、自分の思いや意見(考え)の見せ方・伝え方が武器になる」と言い続けている。大発見や大発明なんか必要ない。これまであるもの・あったものの組み直し(再構築)だと。「思い込みを捨て 思いつきを拾え」との言葉を投げかけ、常識を疑い自分なりの問い(発想)を追求しつづけることが、あらゆる物事から学べる姿勢=生きる力(術)になると投げかけている。この思いを十分に発揮できるこのNIEを今後も継続実践していきたい。



実践事例4 2分間スピーチ(受験指導(面接指導)も兼ねたNIE実践)

NIE 2分間スピーチ

①記事を選ぶ・・・見出し読み
→記事を決める(3~5分)

②2分間スピーチ(2分)

(1)選んだ理由
(2)記事の要約(5W1H)
(3)この記事を通して、考えたこと、伝えたいこと

③評価(感想:コメント)・・・(1分)

NIEを使った進路指導(受験対策)である。具体的には、総合選抜型入試における面接対策用に実践した。もちろん、就職における面接試験にも十二分に対応できる。主に3学年を受け持ち、校務分掌では進路を受け持ったという事もあり前任校で実践していた「NIEで2分間スピーチ」を本校でも実践(25回程度)した。その様子と成果・課題を報告する。

2分間スピーチの様子



2分間のスピーチ

評価(円グラフで見える化)

《狙い》: NIEを使ったプレゼン技術の向上
聞く(聴く)力の育成

《指導上の留意点: 主なもの》

- ・見出し読みの指導: 見出しは究極の要約文。記事選びに時間をとられないよう見出し読みさせる。ザッと新聞紙面全体に目を通させ、引っかかった記事を選ばせる。または、自己の進路に関する記事を選ばせる(慣れきたらこれが選ぶ基準)。
- ・よみとき新聞(5W1H)を声に出しているだけと説明し、人前話すことへの抵抗感を和らげる。
- ・2分間の説明(1分では短すぎ、3分では長い)



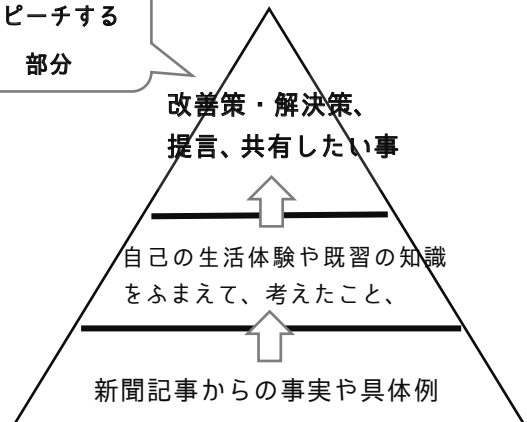
クラスメイト全員の前での2分間スピーチ

《2分間スピーチへ取り組むさせる環境作り：仕込み》



その1
教育・学校関連
受験関連の記事利用
(適時配布)

スピーチする
部分



2分間スピーチにおける思考の流れ
(イメージ：報告者作成)
よみとき新聞で育成した力が土台となる

(2022年9月14日 読売新聞)

- ・「自分の言葉」磨く受験対策：志望理由の表現力、集団討論や小論文の論理性などを分かりやすく説明している記事を通して、2分間スピーチの有効性を考えさせた。「大学側は実績や結果よりも、そこに至る過程を重視している。あなたは高校生活を一つのストーリーとして自分の言葉で語れるのか？」を投げかけた。(もちろんこの訓練=2分間スピーチは、就職活動にも有効であることにも触れている)



その2：新聞と受験との関係性の説明

Gakken 読売新聞「大学受験は新聞から！」(2022年7月発行)

大学入試には新聞記事が数多く引用されていること。また、新聞を読むことは、一般入試の対策になるだけでなく総合選抜型や学校推薦型といった入試形式においても有効な対策であるということを紹介(冊子内に記載されたデータを利用し、数字の説得力を実感させた)。

記事のテーマ別出題傾向からは、自分の進む分野ではどのようなテーマが頻出しているのかを理解させ、2分間スピーチで選ぶ時の「記事選択基準」にするようアドバイスを行った。

おわりに

以上が 2021・2022 年度沖縄県 NIE 推進協議会指定実践研究校テーマ「NIE でちゅ～がなびら ～感じてい 考げーてい 語やびら (伝えユン)～」の 2 年間実践報告である。この実践研究の目標の柱は、学習の三要素 = 「自己との対話・テキストとの対話・他者との対話」を身につけさせることであると「はじめに」の部分で述べたが、2 年間の実践事例を通して「学習手法としての NIE がいかに有効性であるか、学習の拡がり・思考の深掘りにおいて、いかに可能性を秘めているか」ということを、自信を持って報告できたと結論づけたい。一番の収穫は、2 分間スピーチを通して「人の話にしっかりと耳を傾けることのできる子を育てるべし」という関浩和氏(兵庫教育大学大学院教授)の言葉を実践できたことである。この成果を励みに NIE を手段として、これからも生徒達(学習者)の「聞く力」を「聴く力」へと育てていきたい。

本校における 2 年間の NIE 活動についてその経過を説明するならば、NIE という戦術(手段)を用いて「学習の三要素を身につけさせ」、そして「思考停止の人間を作らない」ことを戦略(最終目的)とするという教育・学習活動であった。換言するなら「考えることをあきらめない子」「考えることから逃げない子」の育成である。生徒達(学習者)に自分自身の人生を生きていく力として「何事からも学ぶ姿勢」を身につけさせたいのである。ポストコロナ社会、収束がみえないウクライナでの戦争、東アジアにおける米中大国の緊張状態・覇権争い、それを受けての戦後日本安全保障政策の大転換、待たなしの少子化対策・子育て政策、そして安保増税や世界情勢に起因する物価高などの経済的不安要素が追い打ちをかける現在の社会情勢のなかで、「いかに生き抜くか」が重要なことだと考えているからである。

ところで、今後も NIE 活動を実践していく上で気になるニュースが 2 つほどあり、頭を離れない。1 つめは、【「ニュース砂漠」広がる】の記事(写真⑤)であり、2 つ目はネットニュースで配信された【「1 年で 200 万部減「新聞離れ」は止まらず「一般紙」は 15 年後に消える勢い】(表 1)である。1 つ目の記事において危惧される事は「政府や企業の腐敗」である。ジャーナリズムの重要な役割である「権力の監視機能」が無くなった社会はどのようになるのか、未来社会からの留学生である生徒達(学習者)と考えなければいけない喫緊の課題を問いかけた記事だと思える。

2 つ目は、紙媒体の新聞が消滅するという予測である。「インターネットとデジタルデバイスの普及によって、ニュースを知る手段としての新聞の必要性が大きく減っており」「制作や配送コストなども高く、廃れるのは避けられない」「新聞を支えている高齢者世代が衰え、新聞を購読できない状況になっていくと考えられる」「新聞社が生き残るためには DX(デジタル・トランスフォーメーション)が必要」等の内容の記事である。

GIGA スクール構想、2024 年度から国が本格導入を目指すデジタル教科書、学習用端末と紙媒体との入れ替わりが始まる。部分的な導入から始まるが、デジタルとアナログのそれぞれの利点を上手く活用できる NIE 研究が急がれている。学習者の読解力などは、紙媒体が優位という結果は周知の事実だが(理解力についての記事: 2022 年 5 月 10 日読売 15 面、読解力についての記事: 2022 年 9 月 4 日沖縄タイムス 19 面: 写真⑥)、NIE 授業においてもデジタル手法の導入は避けて通れない流れだ。

時代の流れを受け入れつつ、生きた教科書である新聞(紙媒体)を通して活字体験をさせていきたい。学習者のガチ(切実な思い)を引き出し、主体的・対話的な学習を展開することで、彼らに「生きる力」・「学ぶ姿勢」のタネを植え付けたい。それは「どうしようもない時に、どうにかしよう」と行動できる人間になって欲しいからである。そのためにも授業者自身は、「授業コ・デザイン力」や「読解力を鍛える授業デザイン力」、「思考を深める発問力」を探究し続けていく事が大切であると実感した 2 年間であった。(7)



写真⑤ 2022 年 9 月 3 日 琉球新報(9 面)

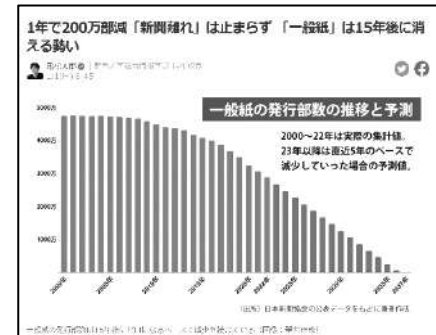


表 1 Yahoo!news 2023 年 1 月 1 日配信 亀谷松太郎 関西大学総合情報学部特任教授



写真⑥ 2022 年 9 月 4 日 タイムス(19 面)

2022年度 NIE 実践報告書

ヒューマンキャンパス高等学校

校長:前田 孝実

教諭:森田 百合奈

1.はじめに

本校では、2019年度からNIE実践指定校に認定され、通信制高校初の実践校となる。本年度は認定校として4年目にあたる。当校は広域制通信制高校のため、本校スクーリングにて全国の生徒と関わる機会が多い。その中で新聞を通して、沖縄県の興味関心に繋げるとともに、新聞を身近に感じ、それぞれの生まれ育った地方や日本の新聞にも関心が持てるよう実践してきた。現代社会ではインターネットが普及し、スマートフォンやパソコンを使用して自分の興味関心のある分野のみ情報収集する生徒が大多数を占めているが、このNIEを通して新聞から日常では出会わない話題や情報を集め、広い視野を養っていけるよう取り組んでいる。

2.本校の取り組み

①授業実践(生物基礎・政治経済・総合的な探究の時間)

・広域制通信制高校のため、本校スクーリング(沖縄県)にて全国の学生へ同様の授業内容を複数回実施。

(1)理科(生物基礎) 授業者:比嘉 大樹

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5分	・自己紹介 ・導入発問をする。	・授業のねらいを説明する。	
15分	・やんばる地域の動植物の生態について説明する。 (ノグチゲラ・ケナガネズミ・アダン・ヘゴ・クワズイモ等)	・紹介する動植物の詳細をパワーポイント、動画、実物を活用して説明する。 ・やんばる地域の生物多様性が評価され、(〇〇)に登録されたことを知っているか問いかける。	
25分	・沖縄、奄美を含む4つの地域が世界自然遺産に登録された内容を説明する。 ・生物多様性がなぜ高いのか ・世界自然遺産に登録されたが、今後の課題について生徒とともに考える。	・新聞記事を見せる。 ・ワークノートを人数配布準備	
5分	・まとめ	・ワークシートを記入、回収。 ・授業で気づいたこと、わかったこと等を、数名に発表させる。	

●授業風景



(2) 社会(政治経済) 授業者:仲吉 真理

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
導入 20分	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 ・主権者教育として選挙について話題を出す。 冊子配布、及び新聞記事とともに世論操作やメディアリテラシーについて説明し、自身の意見をきちんと持って投票することを伝える。 ・生徒に向けて学習に向かう心構えを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事(防衛省が世論工作研究、AIを使用し、SNSで誘導)について見解を説明し、生徒へ感想を聞く。 ・ワークシートを配布する 	
展開 25分	<ul style="list-style-type: none"> ・景気変動と物価変動について(インフレーション・デフレーションを説明する。) ・資産運用について 自身の資産計画を立てて、意識づけを行う。 自身の生活に景気変動と物価変動が関わることを実感させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の理解度を確認しながら進める。 	
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・記入内容を確認しながら回収。 ・授業で気づいたこと、わかったこと等を、数名に発表させる。 	

●授業風景



(3) 総合的な探究の時間 授業者:森田 百合奈

1. 単元設定の理由

- ・正しい情報を得るためには新聞は大切な情報源であることを知り、新聞を身近に感じてもらう。
- ・進路指導として新聞から情報を読み取る力や時事問題への興味関心を深める。

2. 本時の目標

- ア. 高校生の新聞購読者数の現状を知る。
- イ. 新聞の種類や自身の住んでいる地域との違いを知る。
- ウ. 興味関心のある記事についてワークシートへまとめる。

3. 教材 新聞・パワーポイント・ワークシート

4. 本時の展開

時間	生徒の学習活動	指導上の留意点	評価方法
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業に入りやすい雰囲気づくりに努める。 	

15分	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞を読むとどのようなメリットがあるかを説明する。(新書以冊分の情報が得られる、受験勉強に有効) ・日本の新聞の種類を説明する。 ・新聞の値段について 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の自分の新聞とのかかわりを考えさせる。 ・進路と合わせて新聞の活用の重要性を考えさせる。 	
25分	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞を実際に読んでみよう。 ①「琉球新報」「沖縄タイムス」を読みながら、自分の住む地域との違いを知る。 ②沖縄についての気になる記事を選び、ワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域面、お悔やみ情報など沖縄と他の地方との違いについて紹介し、生徒の興味をひく。 ・沖縄に関する記事に絞ってワークシートをまとめさせる。 ・記事を決められない生徒に対して、声かけを行う。 	
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ(感想を記入させる。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを記入、回収。 	

※撮影なし

3. まとめ

実践4年目を迎えましたが、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、新聞を活用したグループワークを実践することが難しい現状であった。その中でも全国の学習センターの学生へ情報収集の一つとして、また生活の一部としてぜひ新聞を活用してほしいという願いを込めて、新聞の素晴らしさを授業で伝えた。

また県外の学生より自身の地域の新聞と沖縄の新聞の違いや文化の違いに触れ、地方の新聞や日本の新聞にも興味を持ち、さらに興味関心を持ってもらえた授業となった。

学生はもちろん指導する教職員についても新聞の魅力に気付くことができ、次の世代へと新聞の魅力を伝えていくきっかけとなった。

令和4年度 NIE 実践報告書

県立桜野特別支援学校
比 嘉 美 保
(NIE アドバイザー)

I はじめに

本校は肢体不自由と病弱を障害種とした特別支援学校である。当該学年に準じた教育を受ける児童生徒から、重度心身症の子どもまで、幅広い実態の児童生徒が在籍している。また、障害の軽重に関わらず、医療的ケアを要する子どもたちが多く学んでいる点も特徴の一つである。そのため、我々は常に児童生徒の体調の変化を敏感に察知できるよう細心の注意を払いながら授業を行っている。

本校に赴任してからの5年間、私は主に中度から最重度知的障害を有する中学部生、高等部生の国語の指導を担当してきた。この間、特別支援教育界で大きく変化した流れがある。それは教科学習を見直す動きが活発化したことだ。本校においても児童生徒の障害の実態に関わらず、教科の学びを保障すべく指導しているところである。

肢体不自由及び病弱教育の対象となる本校の子どもたちは生活圏が限定的になりがちで、年齢相応の生活経験が不足しがちになる。生活経験は言わば学習の素地であり、知識と知識を結び付けるジョイントの役割を果たす。加えて知的障害を併せ有する児童生徒も多く、記憶力や抽象的概念の形成、知識の般化等の課題も生じやすい。これらの課題をもつ本校の児童生徒に対してNIEを実践する意義は何か、どのような価値があるのかを、準ずる教育対象生や軽度知的障害の生徒たちの実践事例も交えて報告していきたい。

II 実践

事例Ⅰ 新聞活用

(1) 対象

中学部、高等部Ⅱ課程（知的代替の教育）

(2) 教科

国語（書くこと、読むこと）

(3) 単元名

平和学習「うれしい たのしい いのち」 『大漁』（金子みすゞ）

(4) 目標（つけたい力）

詩と慰霊の日の写真に触れ、喜びと悲しみの気持ちを理解する。

(5) 新聞を活用した指導内容とねらい

慰霊の日の写真（下図赤枠）と感情カードのマッチングを通して、大切な存在を失った普遍的な悲しみを感じ取る。

(6) 学習の様子

- ① 登場人物や礎に手を合わせる老女の写真を見て、泣きまねをしたり手を合わせたりする仕草をしていた。
- ② 感情カードに対応した作品中の登場人物や写真の老女を指さしし、同じであることを伝えることができていた。



事例2 新聞作成

(1) 対象

中学部・高等部Ⅱ課程・Ⅲ課程（知的代替の教育）

(2) 教科

国語（書くこと）

(3) 单元名

「学習発表会新聞を作ろう」

(4) 目標（つきたい力）

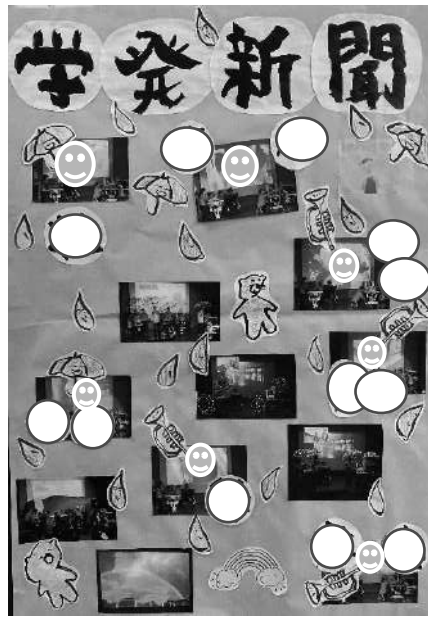
写真等を使って経験したことを思い出し、自分の気持ちを表現することができる。

(5) 学習の流れ

- ① 自分が出演した写真の中から好きな写真を選択する。
- ② 選んだ写真の感想を教師に伝える。
- ③ 教師の手添えを受けながら、文字を書く。
- ④ 教師と一緒に紙面に写真と書いた文字を貼り付けてレイアウトする。

(6) 学習の様子

- ① 「新聞って何？」と尋ねると、そばにある本物の新聞を指さしたり言葉で答えたりすることができていた。
- ② 「新聞を作るよ。写真を選んだ後、感想を書こうね」と伝えると、活動内容を理解し、笑顔で返事をしていた。
- ③ レイアウトの際、自分の写真の位置を指さして指定していた。
- ④ 廊下に掲示する際はとても嬉しそうにしていた。また、他の教師に新聞を見るよう促す様子が見られた。
- ⑤ 祖父母や旧担任に送る年賀状に、縮小印刷した新聞を貼り付けて送った。



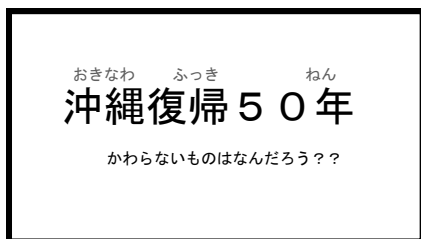
事例3 新聞活用

- (1) 対象：中学部、高等部Ⅱ課程（知的代替の教育）
- (2) 教科：社会
- (3) 単元名：『5.15 沖縄復帰50年 ～変わらないものはなんだろう～』
- (4) 目標（つけたい力）：本土復帰前後の沖縄の社会を比較し、今も沖縄に残っている課題を知るとともに、身近な生活に影響している事柄に気付く。
- (5) 新聞を活用した指導内容とねらい

沖縄の戦後から現在までの出来事を時系列に、且つ、視覚的に理解できるようマンガを活用した。視覚認知に課題のある生徒に紙面のマンガ全部を提示すると見えづらさにつながるため、PPで1コマ～3コマずつ提示した（下図）。

(6) 学習の様子

対象生の指導にあたっては、より身近で体験的な学習活動の中から知識や技能の習得が図られるよう配慮している。今回のマンガは生徒たちに受け入れやすい教材となった。歴史の理解や課題の気付きの到達までには繰り返しの授業が必要ではあるが、一コマ一コマの事実について意見をもったり驚いたりする様子が見られたことは、沖縄の歴史を学ぶ入口として意義深かったと思う。



事例4 新聞活用

- (1) 対象：中学部、高等部Ⅰ課程（準ずる教育）、Ⅱ課程（知的代替の教育）
- (2) 教科：道徳 「C 集団や社会との関わり 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」
- (3) 単元名：『沖縄の文化』
- (4) 目標（つけたい力）：本土との比較を通して衣食住や芸能等、日常生活の中にある沖縄の文化に気づき、関心を高める。
- (5) 新聞を活用した指導内容とねらい
沖縄の文化を象徴する写真の活用を通して、視覚的に身近な伝統文化を整理する（下図）。
- (6) 学習の様子

沖縄の文化と他地方の文化を象徴する写真をランダムに提示し、テーマを予想しながら2つのグループに分ける学習活動を設定した。分別の基準に気付くまで様々な試行錯誤があったが、本土で生まれ育った生徒の発言で、沖縄独自の文化に気付く生徒の姿が印象的な授業となった。



Ⅲ まとめ

1 成果

- (1) 生活経験が不足しがちな生徒の学習指導において、写真記事の活用により、生徒が主体的に考え発言する様子が見られるようになった。
- (2) 新聞の活用を通して、生徒が日常生活と社会生活とのつながりを実感する姿が見られた。

2 今後の課題

- (1) 時事を反映した記事はスピード感をもって教材化し、興味や関心をより高められるようにする。
- (2) 手指麻痺のある生徒や視覚認知に課題のある生徒が多いため、記事の提示には工夫が必要。
- (3) 授業での実践を校内の職員に公開し、NIEの活用方法や効果について理解してもらえるようにする。

【沖縄県N I E推進協議会組織（2022年度）】

- <会長> 仲村守和（元沖縄県教育長）
<副会長> 宮城栄作（沖縄タイムス社編集局長）
島洋子（琉球新報社編集局長）
<顧問> 山内彰（元沖縄県教育長）
武富和彦（沖縄タイムス社代表取締役社長）
普久原均（琉球新報社代表取締役社長）

<N I Eアドバイザー>

- 甲斐崇（西原町教育委員会指導主事）
佐久間洋（恩納村立恩納小学校教頭）
國吉美穂（興南中学・高校校教諭）
松田美奈子（沖縄市立コザ中学校主幹教諭）
宮城英誉（名護市立大宮小学校教諭）
比嘉美保（沖縄県立桜野特別支援学校教諭）
宮城通就（沖縄県立辺土名高等学校教諭）
新垣孝子（糸満市立糸満中学校教諭）

<事務局長>高崎園子（沖縄タイムス社編集局N I E事業推進室事務局長）

※事務局は沖縄タイムス社と琉球新報社が2年交代で担当

- <会員社>沖縄タイムス社▷琉球新報社▷宮古毎日新聞社（那覇支社）▷八重山毎日新聞（那覇支局）▷朝日新聞社（那覇総局）▷毎日新聞社（那覇支局）▷読売新聞社（那覇支局）▷日本経済新聞社（那覇支局）▷共同通信社（那覇支局）▷時事通信社（那覇支局）

【沖縄県N I E運動の経過】

<1996年（平成8年）>

「沖縄県N I E連絡会」結成

7月25日 第1回N I E全国大会（東京都）。新聞社員2名、県教育庁指導主事2名が参加

<1999年（平成11年）>

日本新聞教育文化財団によるN I E実践指定校に那覇市立松島小、同古蔵中、県立首里東高。※翌年以降の実践指定校は別紙一覧表に掲載

<2000年（平成12年）>

2月26日 県N I E連絡会を母体に「沖縄県N I E推進協議会」設立総会。全国33番目。初代会長に津留健二元教育長。事務局を沖縄タイムス社に設置

7月27日 N I E全国大会（神奈川県）参加

<2001年（平成13年）>

3月16日 県N I E推進協議会総会。津留会長再任

7月26日 NIE全国大会（兵庫県）参加
<2002年（平成14年）>
4月5日 県NIE推進協議会総会。津留会長再任
8月1日 NIE全国大会（北海道）参加
<2003年（平成15年）>
3月27日 県NIE推進協議会総会。会長に渡久地政吉元那覇市教育長。事務局を琉球新報社へ
7月31日 NIE全国大会（島根県）参加
<2004年（平成16年）>
7月 日本新聞教育文化財団が「NIEアドバイザー」制度を発足。県内から兼松力教諭が認定される
7月29日 NIE全国大会（新潟県）参加
<2005年（平成17年）>
3月20日 「日本NIE学会」が発足
4月27日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
7月28日 NIE全国大会（鹿児島県）参加
11月7日 初めての「NIE週間」実施
<2006年（平成18年）>
5月25日 県NIE推進協議会総会。渡久地会長再任
7月27日 NIE全国大会（茨城県）参加
<2007年（平成19年）>
県NIE推進協議会総会。会長に山内彰元県教育長。事務局を琉球新報社へ
7月26日 NIE全国大会（岡山県）参加
11月10日 「沖縄県NIE実践フォーラム」を初開催（琉球新報社で）
<2008年（平成20年）>
7月31日 NIE全国大会（高知県）参加
11月8日 第2回県NIE実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）
<2009年（平成21年）>
4月17日 NIE実践中間報告会（琉球新報社で）
5月9日 NIEワークショップ（琉球新報社で）
5月18日 県NIE推進協議会総会。山内会長再任。事務局を沖縄タイムス社へ
7月30日 NIE全国大会（長野県）参加
10月31日 第3回県NIE実践フォーラム開催（琉球新報ホールで）
<2010年（平成22年）>
3月5日 NIE実践最終報告会（沖縄タイムス社で）
3月8日 山内会長、岸本沖縄タイムス社長、高嶺琉球新報社長らが県教育長を訪問し、

大城浩統括官にN I E への一層の理解と連携を要請

4月 財団指定の実践校「奨励枠」に県内から初めて北中城村立北中城小学校、宜野湾小学校（ともに09年度指定）を推薦し、認定される

5月14日 N I E ワークショップ（沖縄タイムス社で）

6月1日 県独自指定校制度が発足。協議会が4校を指定し、沖縄タイムス・琉球新報2紙を提供開始。10年度はうるま市立比嘉小学校、豊見城市立豊見城中学校（以上09年財団指定校）、うるま市立石川中学校、与那原町立与那原中学校（以上新規）

6月5日 九州地区事務局長会議・アドバイザー会議（熊本市）に与那嶺功事務局長、兼松力アドバイザー出席

6月29日 県N I E 推進協議会総会。山内会長再任

7月29日 N I E 全国大会（熊本県）参加

11月6日 第4回県N I E 実践フォーラム開催（沖縄タイムス社で）。教育関係者、保護者ら200人が参加した。越来小が国語の公開授業。記念講演は作家の大城貞俊さん（琉球大学准教授）。兼松力教諭（N I E アドバイザー）、古波津聡越来小教諭、山城銀子小祿南小校長、奥村敦子沖縄タイムス社学芸部デスク、佐藤ひろこ琉球新報社教育担当キャップをパネリストに、佐久間洋宜野湾小教諭をコーディネーターにシンポジウム「新学習指導要領とN I E」を行った

<2011年（平成23年）>

2月9日 日本新聞教育文化財団の枝元一三コーディネーターを招いた特別講演会「新学習指導要領とN I E」（主催＝読谷中、喜名小、共催＝県N I E 推進協議会）を読谷中学校体育館で開催。村内の教職員ら約120人が参加した

2月10日 金武正八郎県教育長に要請活動。山内会長、中根学沖縄タイムス社編集局長、坂名城泰山琉球新報社編集局長、兼松アドバイザーらがN I E 活動への理解と協力を要請した

4月 2010年6月にパイロット事業としてスタートした沖縄タイムス社と琉球新報社による県指定校制度の継続を確認。5校を上限に指定予定

6月17日 県N I E 推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

7月24日 N I E 全国大会（青森県）。教師・事務局13人、取材記者4人が参加

8月2日 N I E アドバイザー就任要請。山内会長らが4校訪問

9月14日 日本新聞協会N I E 専門部会で仲程俊浩氏、佐久間洋氏、甲斐崇氏のN I E アドバイザー認定が了承される

10月17日 日本新聞協会主催「第2回いっしょに読もう！新聞コンクール」の地域審査（琉球新報社で）

11月12日 第5回県N I E 実践フォーラム（那覇市立小祿南小学校で）。全26学級で公開授業。保護者600人を含む750人が参加

12月10日 県中学校総合文化祭。中学生が速報発行、両新聞社が支援。N I E 展示ブ

ースも設置。11日まで

<2012年(平成24年)>

2月15日 大城浩県教育長を訪問(山内会長、アドバイザー、両新聞社編集局長)。夏休みの短期講座の開催、全国大会への職員派遣を確認

3月5日 NIE実践最終報告会(琉球新報社で)

4月21日 県NIE研究会発足。教員主体の研究組織を目指す。当面、新聞社主催の講座に合わせて会合を開く

6月22日 県NIE推進協議会総会。地元2社の会費の増額を承認(6万円から10万円に)。他の加盟社の会費増額は次年度総会までに議論することにした

7月30日 NIE全国大会(福井県)参加。県教育庁から職員3人が参加

7月・8月 県立総合教育センターで初の教員向け研修。7月27日に短期研修講座・小学校社会科講座の一部として佐久間アドバイザーが講師。8月3日は中学校社会・高校地歴公民講座の一部として兼松アドバイザーが講師

11月3日 第6回県NIE実践フォーラム(うるま市立中原小学校で)。県教育委員会、うるま市教育委員会の後援を得た。特別支援を含む全学年全学級で公開授業を行い、保護者や教育関係者、新聞関係者計800人が来場した。教師向け、保護者向けのワークショップ(分科会)も開催し、兼松・佐久間・甲斐アドバイザーが講師

<2013年(平成25年)>

1月20日 教師向けメーリングリスト開設

2月20日 大城浩県教育長を山内会長らが訪問。全国大会への職員派遣、行政主催の研修へのNIE採用に謝意を述べた

3月6日 実践報実践報告会(琉球新報社で)。協会指定、県指定10校のうち9校が報告した

4月 県立総合教育センターの出前講座にNIEが開設。甲斐崇研究主事(NIEアドバイザー)が担当して校内研修や児童生徒の授業に対応開始

5月11日 教師向け研修会「第1回おきなわNIEセミナー」開催。昨年度まで新聞社主催だった講座を推進協主催に。原則として偶数月に開催する

5月24日 県NIE推進協議会総会。会費、会則の変更を了承。会費は地元2社10万円から15万円に、全国紙4社3万円から4万円に、通信社2社1万円から3万円に、宮古・八重山2社3万円据え置き。役員では副会長を1名から2名とし、地元紙2社の編集局長を充て、任期を1年から2年とした。再任を妨げないことは従来通り。事務局が沖縄タイムス社へ

7月25日 NIE全国大会(静岡県)参加。県教育庁が前年に続いて職員を派遣し、県内の教育関係者、新聞社関係者らが参加

7月30日 金武町教育委員会が主催する教員研修に4人のNIEアドバイザーを派遣

8月13日 県中頭教育事務所が主催する10年経験者研修の選択研修でNIEが取り

入れられ、20人が受講。推進協に講師派遣依頼があり、兼松、佐久間両アドバイザーが校種に分かれて講師を務めた

1月30日 第7回実践フォーラム（県立総合教育センターで）。沖縄市立コザ小学校の4年生、5年生が公開授業。パネルディスカッションは実践校の教員、県教育行政、教育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解育センターからパネリスト・コーディネーターを招いて議論を深め、新聞社による新聞解説・ワークショップもあった。約150人が参加。※古波津聡沖縄市立コザ小学校教諭が5人目のNIEアドバイザーに承認

<2014年（平成26年）>

2月6日 山内彰会長、玻名城泰山琉球新報社取締役編集局長、武富和彦沖縄タイムス山内彰会長ら7人が県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月4日 実践報告会（沖縄タイムス社）12校が発表。ほか2校が紙面発表。県指定校の拡大にともない、過去最大の報告校数になった

5月24日 九州アドバイザー・事務局長会議を沖縄で開催（沖縄タイムス社）。沖縄からは推進協発足の経緯やフォーラム開催などの活動報告、教育センターにNIE出前講座が盛り込まれたことなどを報告

6月28日 6月のおきなわNIEセミナーから、セミナー開催前の午前中に実践教員に呼び掛けて「研究部会」を開催。それぞれの実践を持ち寄り、情報交換

7月31日 NIE全国大会（徳島県）参加。8月1日まで

11月1日 第8回実践フォーラム（県立総合教育センターで）興南中学校の国語の公開授業、授業研究会を行った。約50人が参加

<2015年（平成27年）>

2月13日 山内彰会長、副会長の武富和彦沖縄タイムス社取締役編集局長、潮平芳和山内彰会長、兼松アドバイザー、佐久間アドバイザーが県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問

3月2日 実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護実践報告会（沖縄タイムス社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の名護市立真喜屋小、興南中学・高校、那覇市立小祿南小から報告を受け、3グループに分かれて報告の内容や日頃の実践について意見交換

5月19日 県NIE推進協議会総会。事務局が琉球新報社へ

6月25日 山内彰会長、甲斐崇NIEアドバイザーらが北中城村教育委員会に森田孟則教育長らを訪問。地域連携型のNIEの推進について意見交換

6月27日 NIE研究部会を開催。佐久間洋NIEアドバイザー、松田美奈子美東中教諭が記事を使った道徳の授業について実践報告。15年度から研究部会の開催を定例化し、教員らの実践内容の共有、意見交換の場とすることを確認した

7月30日 第20回NIE全国大会（秋田県）に、山内彰会長ら教育関係者7人と新聞

社関係者9人の計16人が参加。「『問い』を育てるNIE思考を深め、発信する子どもたち」をテーマにしたパネル討論や公開授業、実践発表などを通して論理的思考力など「21世紀型学力」とNIEの取り組みを学んだ

9月9日 日本新聞協会NIEアドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈アドバイザーに、新たに石川美穂興南高教諭、松田美奈子美東中教諭が認定

11月12日 日本新聞協会実践指定校の那覇市立城北小学校が11月のおきなわNIE月間に合わせ、4年（総合学習）、5年（道徳）、6年（国語）の公開授業を同校で行った

11月26日 第6回「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）で、小学生部門の最優秀賞に北中城小6年の瀬底蘭さんが選ばれた。同コンクールの最優秀賞は県内初。奨励賞3人、優秀学校賞に大里南小が選ばれた

<2016年（平成28年）>

2月16日 山内彰会長、潮平芳和琉球新報編集局長、武富和彦沖縄タイムス編集局長の両副会長らは県教育庁に諸見里明県教育長を表敬訪問。教育行政とのさらなる連携を確認した。いっしょに読もう！新聞コンクール最優秀賞の瀬底蘭さんの受賞も報告した

3月1日 2015年度の実践報告会を琉球新報社で開催。日本新聞協会NIE実践校のうち本年度で実践期間が終了する城北小、大里南小、興南中・高校がこれまでの取り組みや成果を報告した

5月28日 県NIE推進協議会総会

6月18日 NIE研究部会を「NIEカフェ」として、ケーキやコーヒーの出る飲食店で開催した。原則毎月第3土曜日の午後2時から開催し、教員が参加しやすい環境にした

8月4日 第21回NIE全国大会（大分県）に、山内彰会長ら教育関係者9人と新聞社関係者が参加。パネル討論や公開授業を通し、大分や各地の事例や手法などに理解を深めた

11月4日 県NIE実践フォーラム2016（沖縄市立室川小学校で）。おきなわNIE月間（県教育委員会後援）の中心行事として開催。2、3、6学年（計3クラス）の公開授業や全体会を行った。約120人が参加

12月10日 第22回県中学校総合文化祭で中学生が速報を発行し、両新聞社が支援した。NIE展示コーナーも設置し、実践校や新聞社の活動を紹介。11日まで

<2017年（平成29年）>

3月1日 実践報告会（琉球新報社）日本新聞協会指定のうち、指定最終年の室川小、県立森川特別支援学校が報告発表を行った

4月20日 山内彰会長、副会長の普久原均琉球新報社編集局長、石川達也沖縄タイムス社編集局長、佐久間アドバイザー、石川アドバイザーらが県教育庁に平敷昭人県教育長を表敬訪問

5月26日 県NIE推進協議会総会。共同通信社の会費増額を承認（3万円から4万円に）。事務局が沖縄タイムス社へ

5月27日 本年度最初のおきなわNIEセミナー。新聞協会主催の「いっしょに読もう

新聞コンクールを授業に組み込む」(佐久間アドバイザー)。その後、6月はこども新聞沖縄戦特別版の活用方法(松田アドバイザー)、11月は「はがき新聞作り」(プール学院大学の今宮信吾准教授)、2月に「NIE年間計画の立て方」(石川アドバイザー)を行った

8月3、4日 NIE全国大会名古屋大会に山内彰会長、蔵根美智子前室川小校長、松田美奈子アドバイザー、金城治・県立総合教育センター研究主事、宮城英誉・緑風学園教諭、比嘉美保・森川特支教諭、内山直美・糸満中教諭、地元新聞社員が参加した

12月9、10日 「第23回県中学校総合文化祭」(沖縄市民会館など)で、沖縄タイムス、琉球新報の移動編集車両(ワラビーGO!、りゅうちゃん号)を活用し、大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した<2018年(平成30年)>

1月17日 名護市教育委員会の後援を得て、実践指定校の同市立小中一貫教育校緑風学園でNIE実践フォーラムを開催。朝のNIEフリートーク再現、5年生の社会、1年生と8年生(中学2年)合同の国語の3本の授業を公開。小中一貫校らしい異学年の学びの蓄積を他校教員、保護者らに見せた。学校の取り組みを振り返る全体会も行った

3月8日 2017年度の実践報告会を那覇市の沖縄タイムス社で開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の高原小、美東中、興南高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

5月10日 緑風学園の宮城英誉教諭がNIEアドバイザーに認定。北部地区での教師ネットワークづくりへ

5月26日 6年目の「おきなわNIEセミナー」スタート。この日は「話す力・書く力を育てる指導法」をテーマに佐久間洋、宮城英誉両アドバイザーが講師。その後、6月「切り抜き新聞」(甲斐崇アドバイザーがメイン講師)、12月「はがき新聞」(講師は桃山学院学院教育大学の今宮信吾准教授)を行った

5月31日 県NIE推進協議会総会。会長に仲村守和元県教育長を選出。山内彰会長は顧問に就任。6月4日に新旧会長が平敷昭人県教育長を訪問した

7月26、27日 NIE全国大会岩手大会に宮城英誉アドバイザー、比嘉美保桜野特別支援学校教諭、宮城通就宜野座高校教諭、蔵根美智子放送大学沖縄学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した

8月4日 実践資料集(仮称)制作のため、編集委員会を結成し、8、9、10、翌年1月に会議。編集作業を進めた

10月9日 県教育庁の県立学校教育課、義務教育課から各1人の指導主事を推進協の幹事に任命

11月8日 比嘉美保桜野特別支援学校教諭がNIEアドバイザーに承認された

11月12日 糸満市立糸満中学校でNIE実践フォーラム開催。数学、英語、国語、理科で公開授業を行った

12月8、9日 「第24回県中学校総合文化祭」(うるま市民芸術劇場など)で、沖縄

タイムス、琉球新報の移動編集車両で大会の速報作りを行った。速報作りには糸満中、美東中の生徒が記者として参加し、新聞社が指導した

< 2019年（平成31年） >

1月7、11日 仲村守和会長が沖縄タイムス社、琉球新報社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。7日には平敷昭人県教育長を訪ね、学校図書館への新聞配備状況の調査を要請した

3月15日 2018年度の実践報告会を那覇市にて開催した。日本新聞協会指定のうち、指定最終年の糸満中、宜野座高校が報告発表を行った。その後、他の指定校の代表者が3グループに分かれ、報告への質疑、実践交流を行った

4月6日 NIEカフェ開催。4月20日、7月、9月、翌年2月、3月とアドバイザーの先生たちと実践と実践資料集（仮称）の編集会議を開催

5月7日 県立辺土名高校の宮城通就教諭が日本新聞協会のNIEアドバイザーに承認された。

5月25日 7年目の「おきなわNIEセミナー」がスタート。「簡単にできるNIE入門編」（宮城英誉教諭が講師）を行った。その後6月29日に「簡単にできるNIE～特別支援教育向けと他校種への応用」（比嘉美保教諭が講師）、10月19日に「時事カルタ」（宮城通就教諭）のセミナーを実施した。11月2日は、桃山学院教育大の今宮信吾准教授による「はがき新聞づくり」をセミナーの一環として開いた

5月29日 沖縄県NIE推進協議会総会開催

5月31日 仲村守和会長ら3役が沖縄県教育庁を訪れ、県立学校教育課の石垣真仁指導主事と義務教育課の山内かおり指導主事の2人を沖縄県NIE推進協議会の幹事に任命

8月1、2日 NIE全国大会栃木大会に、仲村守和会長、宮城英誉アドバイザー、佐久間洋アドバイザー、宮城通就アドバイザーと実践指定校の古堅南小学校から教諭11人、藏根美智子放送大学学習センター客員准教授、地元新聞社員が参加した。

11月12日 読谷村立古堅南小学校でNIE実践フォーラムを開催。2年、3年、5年の公開授業のほか、秋田大学大学院特別教授の阿部昇氏の講演会も実施

12月7日 「第10回いっしょに読もう！新聞コンクール」の初の地域表彰式を那覇市の琉球新報社で開催。

12月7、8日 第25回沖縄県中学校総合文化祭（浦添市のアイム・ユニバースてだこホールなど）で、琉球新報、沖縄タイムスの両社がそれぞれ移動編集車両で大会の速報作り作りに協力した

< 2020年（令和2年） >

1月7、8日 仲村守和会長が琉球新報、沖縄タイムスの両社の社長を訪ね、学校への購読料軽減措置を要請。また平敷昭人教育長を訪ね学校図書館への新聞配備を要望した

6月2日 仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長を表敬訪問。県立学校教育課の石垣真仁指導主事、義務教育課学力向上推進室の平良一指導主事を幹

事に任命した。

6月16日 県NIE推進協議会総会開催。仲村守和会長の再任、山内彰顧問の再任が承認された。

6月 「すぐに活用できるNIE授業実践資料」が完成。県内の全小中高校、特別支援学校のほか、教育委員会など関係機関に配布した。

11月22日 NIE全国大会東京大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、初のオンライン開催となった。

12月19日 「いっしょに読もう！新聞コンクール」地域表彰式を琉球新報本社で開催。全国奨励賞5人、地域表彰6人のうち、8人が出席した。

<2021年（令和3年）>

1月20日 実践校の一つである糸満中学校で「沖縄県NIE授業研究会」開催。校内研修として4教科の公開授業が行われ、アドバイザーが参加し助言を行った。

3月9日 NIE実践報告会を琉球新報本社で開催。日本新聞協会指定の2年目の実践校4校がオンラインで発表した。

4月 沖縄県NIE推進協議会のサイト開設。

4月17日 NIEカフェをオンライン開催。アドバイザーが2021年度の実践計画を報告。

5月22日 第28回おきなわNIEセミナーを沖縄タイムス社で開催。初めて対面・オンラインのハイブリッド形式で行った。15人が受講して、児童生徒の表現力を伸ばす新聞活用法を学んだ。アドバイザーの宮城英誉教諭（名護市立大宮小学校）が講師を務めた。

6月26日 第29回おきなわNIEセミナーを対面・オンラインのハイブリッド形式で、琉球新報社で開催。17人が参加し、新聞を使ったSDGs学習の教授法を学んだ。アドバイザーの宮城通就教諭（県立辺土名高校）、國吉美穂教諭（興南中学・高校）が講師を務めた。

6月30日 県NIE推進協議会総会開催。2021年度活動方針案を承認した。

8月16日 NIE全国大会札幌大会。新型コロナウイルス感染拡大のため、昨年につき、オンライン開催となり、式や分科会の様子がライブ・オンデマンド配信された。

8月17日 県立総合教育センターの夏期短期研修NIE講座がオンライン開催。アドバイザー7人とタイムス、新報の記者が講師を務め、県内の教諭17人が参加。

10月23日 第30回おきなわNIEセミナーをオンラインで開催。11人が参加し、「はがき新聞」の実践方法を学んだ。

10月25日 仲村守和会長、与那嶺一枝副会長、松元剛副会長が金城弘昌県教育長に学校図書館への新聞配備など、NIE活動への協力に関する5項目を要請。義務教育課の植前秀一郎指導主事、県立学校教育課の石垣真仁指導主事に協議会幹事就任を依頼。

11月17日 糸満市立糸満中学校で県NIE実践フォーラムを開催。新型コロナウイルスの影響で昨年は中止となり、2年ぶり。感染予防のため人数制限し、教員ら約30人が

参加。英語、数学、社会、家庭の4教科で公開授業が行われた。

12月3日 福岡市で開催された日本新聞協会主催「九州ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議」にアドバイザーの宮城通就教諭、國吉美穂教諭、県NIE推進協の高崎園子事務局長が出席。

<2022年(令和4年)>

2月26日 第31回おきなわNIEセミナーがオンライン開催。県内大学生、県外高校生を含む20人が参加。アドバイザー7人が新聞を活用した実践例を紹介。

2月27日 「第12回いっしょに読もう!新聞コンクール」地域表彰式を沖縄タイムス社で開催。全国奨励賞と県推進協議会会長賞・奨励賞に選ばれた児童生徒9人を表彰した。

3月3日 2021年度NIE実践報告会をオンラインで開催。日本新聞協会指定NIE実践校の西原町立坂田小、糸満市立糸満中、沖縄県立本部高校が実践例を報告。

4月23日 NIEカフェをオンラインで開催。新聞協会指定NIE実践校の代表やアドバイザー約20人が参加して、2022年度の実践計画を報告した。

6月14日 県NIE推進協議会総会を沖縄タイムス社で開催。新型コロナウイルス感染症の収束を見据えたセミナーの対面開催など、2022年度の活動方針を承認した。

6月18日 第32回おきなわNIEセミナーを興南高校で対面開催した。NIEアドバイザーの國吉美穂教諭が沖縄の日本復帰50年をテーマに公開授業を行った。セミナーでの公開授業は初。教諭約20人が参加した。

8月4~5日 第27回NIE全国大会宮崎大会が「いまを開き 未来を拓く NIE(教育に新聞を)」をスローガンに宮崎市で開催。全国から1100人が参加した。対面開催は3年ぶり。沖縄県内からNIEアドバイザーや実践校の教諭、新聞関係者ら約20人が参加した。

8月17日 県立総合教育センターの夏期短期研修NIE講座が3年ぶりに対面開催。NIEアドバイザー4人が実践例を紹介、県内2紙の記者が新聞制作について講話した。教諭9人が参加した。

9月6日 新垣孝子教諭(糸満中)が日本新聞協会のNIEアドバイザーに認定された。数学科のアドバイザーは県内初。県内のアドバイザーは計8人になった。

10月29日 第33回おきなわNIEセミナーを「はがき新聞」をテーマに沖縄タイムス社で開催。はがき新聞に詳しい大阪大谷大学の今宮信吾教授が講師を務めた。理想教育財団(東京)が教材を提供した。教諭約20人が参加した。

11月22日 県NIE実践フォーラムを西原町立坂田小学校で開催した。西原町教育委員会共催。3年、5年、特別支援学級の総合学習で、新聞を活用した五つの公開授業が行われた。町内外から教諭や教育関係者ら190人が参加した。

<2023年(令和5年)>

1月15日 「第13回いっしょに読もう!新聞コンクール」の沖縄地域表彰式を沖縄タイムス社で開催。全国優秀賞・奨励賞、県NIE推進協議会会長賞・奨励賞に選ばれた児

童生徒 8 人を表彰した。

2月18日 第34回おきなわNIEセミナーをオンラインで開催。短時間でできる新聞を活用した授業の実践を新垣孝子NIEアドバイザーが紹介した。県内の教諭14人が参加した。

3月14日 2022年度NIE実践報告会をオンラインで開催。新聞協会指定実践校の坂田小、久米島小、西原中、県立本部高の4校が取り組みを報告した。

4月22日 NIEカフェをオンラインで開催し、NIEアドバイザーや新聞協会・県NIE推進協議会指定の実践校が2023年度の活動計画を発表した。

5月13日 長崎市で開かれた日本新聞協会主催「九州ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議」にNIEアドバイザーの宮城英誉教諭、新垣孝子教諭、高崎園子事務局長が参加。県の活動を報告したほかグループ討議に参加した。5年ぶりに開催された懇親会にも出席し、九州各県の新聞関係者、アドバイザーと情報交換した。

5月20日 第35回おきなわNIEセミナーを琉球新報社で開催。小中高、特別支援学校のNIEアドバイザー4人が校種別に実践の基礎やコツを紹介した。教諭11人が参加した。

沖縄県内の実践指定校一覧

<2022年度>

【日本新聞協会指定】名護市立久辺小学校▽名護市立大宮小学校▽浦添市立牧港小学校▽久米島町立久米島小学校▽西原町立坂田小学校▽西原町立西原中学校▽沖縄県立本部高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】糸満市立糸満中学校▽読谷村立読谷中学校▽沖縄県立辺土名高等学校▽ヒューマンキャンパス高等学校▽沖縄県立桜野特別支援学校

<2021年度>

【日本新聞協会指定】久米島町立久米島小学校▽西原町立坂田小学校▽石垣市立富野小中学校▽糸満市立糸満中学校▽西原町立西原中学校▽沖縄県立本部高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽西原町立西原南小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立具志川高等学校▽沖縄県立辺土名高等学校▽ヒューマンキャンパス高等学校▽沖縄県立桜野特別支援学校

<2020年度>

【日本新聞協会指定】▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝小中学校▽糸満市立糸満中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】名護市立久辺小学校▽恩納村立恩納小学校▽与那国町立与那国小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立コザ中学校▽興南中学校▽沖縄県立宜野座高校

<2019年度>

【日本新聞協会指定】読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽石垣市立大浜小学校▽浦添市立牧港小学校▽石垣市立崎枝中学校▽県立具志川高校▽ヒューマンキャンパス高等学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立高原小学校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽沖縄市立コザ中学校▽沖縄県立宜野座高校

<2018年度>

【日本新聞協会指定】うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校▽読谷村立古堅南小学校▽名護市立久辺小学校▽浦添市立仲西小学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立美東中学校▽興南中学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄市立室川小学校▽沖縄市立高原小学校

<2017年度>

【日本新聞協会指定】沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校▽興南高校▽うるま市立川崎小学校▽糸満市立糸満中学校▽県立宜野座高校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽

渡嘉敷村立渡嘉敷中学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校

<2016年度>

【日本新聞協会指定】沖縄市立室川小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽興南高校▽県立森川特別支援学校▽沖縄市立高原小学校▽名護市立小中一貫教育校緑風学園▽沖縄市立美東中学校【沖縄県NIE推進協議会指定】沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立石垣小学校▽名護市立久辺小学校▽宮古島市立西辺小学校▽久米島町立久米島小学校▽八重瀬町立具志頭中学校▽渡嘉敷村立渡嘉敷中学校

<2015年度>

【日本新聞協会指定奨励校】興南中学校・高校【日本新聞協会指定通常校】南城市立大里南小学校▽那覇市立城北小学校▽沖縄市立北美小学校▽宮古島市立福嶺小学校▽沖縄市立室川小学校▽県立森川特別支援学校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立石垣小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽那覇市立小禄南小学校

<2014年度>

【日本新聞協会指定奨励校】那覇市立小禄南小学校【日本新聞協会指定通常校】名護市立真喜屋小学校▽興南中学校・高校▽南城市立大里南小学校▽北谷町立浜川小学校▽那覇市立城北小学校▽石垣市立伊野田小学校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽沖縄市立比屋根小学校▽沖縄市立コザ小学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立泊高校▽沖縄アミークスインターナショナル▽宜野座村立松田小学校▽宮古島市立平良中学校

<2013年度>

【日本新聞協会指定奨励校】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常校】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル▽名護市立真喜屋小学校▽恩納村立喜瀬武原小中学校▽興南中学校▽県立陽明高校【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽那覇市立城北中学校若夏分校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校▽石垣市立宮良小学校▽県立沖縄工業高校

<2012年度>

【日本新聞協会指定奨励校】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校【日本新聞協会指定通常校】うるま市立中原小学校▽沖縄市立コザ小学校▽沖縄アミークスインターナショナル【沖縄県NIE推進協議会指定】南城市立大里中学校▽豊見城市立豊見城中学校▽北谷町立浜川小学校▽伊平屋村立伊平屋小学校▽石垣市立伊野田小学校

<2011年度>

【日本新聞協会指定奨励校】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞協会指定通常校】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越来小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校

【沖縄県N I E推進協議会指定】与那原町立与那原中学校▽豊見城市立豊見城中学校
<2010年度>

【日本新聞教育文化財団指定奨励校】宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校【日本新聞教育文化財団指定】那覇市立小禄南小学校▽沖縄市立越來小学校▽うるま市立勝連小学校▽宜野座村立漢那小学校▽読谷村立喜名小学校▽読谷村立読谷中学校▽県立真和志高校【沖縄県N I E推進協議会指定】うるま市立比嘉小学校▽与那原町立与那原中学校▽うるま市立石川中学校▽豊見城市立豊見城中学校 ※年度末で日本新聞教育文化財団が日本新聞協会と合併

<2009年度>

※これ以前はすべて日本新聞教育文化財団指定▽那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2008年度>

那覇市立さつき小学校▽那覇市立古蔵中学校▽うるま市立比嘉小学校▽うるま市立高江洲中学校▽宜野湾市立宜野湾小学校▽北中城村立北中城小学校▽豊見城市立豊見城中学校

<2007年度>

那覇市立銘苺小学校▽名護市立大宮小学校▽糸満市立三和中学校（注1）▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校（注1）座間味村立慶留間小中学校から実践者異動による実践校の変更

<2006年度>

那覇市立銘苺小学校▽名護市立大宮小学校▽座間味村立慶留間小中学校▽那覇市立石嶺中学校▽うるま市立石川中学校▽沖縄三育中学校▽県立向陽高校（注2）▽県立南風原高校（注2）（注2）実践者の休職などによる指定中止

<2005年度>

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立浦添商業高校

<2004年度>

浦添市立当山小学校▽座間味村立座間味小中学校▽那覇市立小禄中学校▽那覇市立上山中学校▽県立那覇高校▽県立浦添商業高校

<2003年度>

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立那覇高校▽県立辺土名高校

<2002年度>

那覇市立城北小学校▽沖縄市立室川小学校▽琉球大学教育学部附属中学校▽沖縄尚学高校附属中学校▽県立中部商業高校▽県立辺土名高校

<2001年度>

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立中部商業高校▽県立浦添高校

<2000年度>

豊見城村立とよみ小学校▽沖縄カトリック小学校▽平良市立西辺中学校▽東風平町立東風平中学校▽県立首里東高校▽県立浦添高校

<1999年度>

那覇市立古蔵中学校▽那覇市立松島小学校▽県立首里東高校

クイズ作り要旨読み解く



10月14日(土曜日) 西原町立坂田小で「クイズ作り要旨読み解く」

クイズ作り要旨読み解く

3年級生

「クイズ作り要旨読み解く」は、児童がクイズを作る過程で、文章の構造や語彙の理解を深め、読解力や表現力を高めることを目的としています。児童は、身近な題材からクイズを作成し、互いに挑戦し合います。

5組 兼次順子 教諭

「クイズ作り要旨読み解く」は、児童がクイズを作る過程で、文章の構造や語彙の理解を深め、読解力や表現力を高めることを目的としています。児童は、身近な題材からクイズを作成し、互いに挑戦し合います。

対話的に深い学び実現

対話的に深い学び実現

「対話的に深い学び実現」は、児童が対話を通じて、深い学びを実現することを目的としています。児童は、互いに意見を述べ合い、考えを深め、学びを共有します。

必死な情報 正確に選ぶ

「必死な情報 正確に選ぶ」は、児童が必死な情報の中から、正確な情報を選取ることを目的としています。児童は、情報の信頼性を判断し、必要な情報を抽出します。

先生の記事資料が直感

「先生の記事資料が直感」は、児童が先生の記事資料から、直感的に情報を抽出することを目的としています。児童は、資料の構成や内容を把握し、必要な情報を抽出します。

自己紹介

自己紹介

「自己紹介」は、児童が自己紹介を行うことで、自己認識を高め、コミュニケーション能力を向上させることを目的としています。児童は、自分の特徴や興味を伝え、他者と交流します。

子目録外に

「子目録外に」は、児童が子目録以外の情報を収集し、整理することを目的としています。児童は、様々な情報源から情報を収集し、整理し、活用します。

行先が明かされた

「行先が明かされた」は、児童が行先が明かされた情報を収集し、整理することを目的としています。児童は、目的地に関する情報を収集し、整理し、活用します。

新聞活用 深まる思考

新聞活用 深まる思考



11月10日(金曜日) 西原町立坂田小で「新聞活用 深まる思考」

新聞活用 深まる思考

新聞活用 深まる思考

「新聞活用 深まる思考」は、児童が新聞を活用し、深い思考を深めることを目的としています。児童は、新聞の記事を読み、内容を理解し、意見を述べ合います。

西原町立坂田小で美陸のオーラム

西原町立坂田小で美陸のオーラム

「西原町立坂田小で美陸のオーラム」は、児童が美陸のオーラムを活用し、学習を深めることを目的としています。児童は、オーラムの機能を活用し、学習の効率を向上させます。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

持続可能な社会実現探る

持続可能な社会実現探る



11月10日(金曜日) 西原町立坂田小で「持続可能な社会実現探る」

持続可能な社会実現探る

持続可能な社会実現探る

「持続可能な社会実現探る」は、児童が持続可能な社会の実現を探ることを目的としています。児童は、持続可能な社会の概念を理解し、実現のための取り組みを考えます。

学びや課題見つける

学びや課題見つける

「学びや課題見つける」は、児童が学びや課題を見つけて、解決策を模索することを目的としています。児童は、課題を設定し、解決策を模索し、実践します。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

1組 玉城建幸 教諭

「1組 玉城建幸 教諭」は、児童が玉城建幸教諭の指導を受け、学習を深めることを目的としています。児童は、玉城建幸教諭の指導を受け、学習の楽しさを体験します。

3組 幸宮人輔 教諭

「3組 幸宮人輔 教諭」は、児童が幸宮人輔教諭の指導を受け、学習を深めることを目的としています。児童は、幸宮人輔教諭の指導を受け、学習の楽しさを体験します。

5年級生

「5年級生」は、児童が5年級生として、学習を深めることを目的としています。児童は、5年級生としての責任を担い、学習の楽しさを体験します。

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

NIEアドバイザー 助言

NIEアドバイザー 助言

「NIEアドバイザー 助言」は、児童がNIEアドバイザーの助言を受け、学習を深めることを目的としています。児童は、NIEアドバイザーの助言を受け、学習の楽しさを体験します。

自己紹介

自己紹介

「自己紹介」は、児童が自己紹介を行うことで、自己認識を高め、コミュニケーション能力を向上させることを目的としています。児童は、自分の特徴や興味を伝え、他者と交流します。

記事を読み解く

記事を読み解く

「記事を読み解く」は、児童が記事を読み解くことで、読解力を向上させることを目的としています。児童は、記事の内容を理解し、意見を述べ合います。

NIEアドバイザー 助言

NIEアドバイザー 助言

「NIEアドバイザー 助言」は、児童がNIEアドバイザーの助言を受け、学習を深めることを目的としています。児童は、NIEアドバイザーの助言を受け、学習の楽しさを体験します。

対話的に深い学び実現

対話的に深い学び実現

「対話的に深い学び実現」は、児童が対話を通じて、深い学びを実現することを目的としています。児童は、互いに意見を述べ合い、考えを深め、学びを共有します。

必死な情報 正確に選ぶ

「必死な情報 正確に選ぶ」は、児童が必死な情報の中から、正確な情報を選取ることを目的としています。児童は、情報の信頼性を判断し、必要な情報を抽出します。

先生の記事資料が直感

「先生の記事資料が直感」は、児童が先生の記事資料から、直感的に情報を抽出することを目的としています。児童は、資料の構成や内容を把握し、必要な情報を抽出します。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

特別支援教育

特別支援教育

「特別支援教育」は、児童が特別支援教育を受けることで、学習の機会を確保し、能力を向上させることを目的としています。児童は、特別支援教育を通じて、学習の楽しさを体験します。

特別支援教育

特別支援教育

2022年度県NIE実践フォーラム

特別支援学級・総合 城間吉主敬樹



問いと答え それぞれ生み出す

この記事からどんな学びが生まれるのでしょうか？

「問いと答え それぞれ生み出す」というテーマは、教育現場で常に直面している課題の一つです。先生が一方的に知識を伝えるのではなく、生徒自身が問いを生み出し、それを解決する過程を通じて、深い学びが生まれることを目指しています。

実践の場では、先生が「問い」を生み出す役割を担い、生徒はそれを解決するために様々な方法を模索します。この過程で、生徒は自ら学び、考え、成長していくことができます。

自ら学ぶ力 新聞で育む

あきなわ NIE実践フォーラム

5年総合 幸書大輔・玉城雄幸敬樹



食品ロス、温暖化考える

食料ロスは、温暖化の原因の一つです。食品を無駄にしないようにすることが、地球環境を守るために重要です。

新聞を通じて、食品ロスや温暖化に関する情報を学び、自分たちの生活に活かすことができます。

「食品ロス」や「温暖化」に関する記事を読み、その原因や対策について学びました。また、自分たちができることを考えることができました。



5年 玉城雄幸敬樹

生徒が考える新聞読解案を

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「見出し」「本文」「写真」「イラスト」などの要素を学び、新聞を効果的に読む方法を学びました。

5年 玉城雄幸敬樹

西原町立坂田小学校

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



クイズ作りで要点理解

クイズ作りを通じて、学習の要点を理解し、記憶を定着させることができます。

先生と一緒にクイズを作り、友達と競い合ったり、先生に問いただしたりすることで、学習の楽しさを感じました。

「クイズ作り」を通じて、学習の要点を理解し、記憶を定着させることができました。



3年 津波剛子

NIEアドバイザー指導助言

NIEアドバイザーの指導助言は、先生にとって非常に貴重なものです。

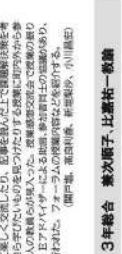
先生が実践している授業について、アドバイスをもらい、授業の質を向上させることができました。

「NIEアドバイザー」の指導助言を参考に、授業の改善を行いました。

3年 津波剛子

授業改善で相簿方向上

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



授業改善で相簿方向上

授業の改善を通じて、生徒の学習成果が向上し、相簿の方向性も変わりました。

先生が授業を改善し、生徒の学習意欲を高めることができました。

「授業改善」を通じて、生徒の学習成果が向上し、相簿の方向性も変わりました。



3年 津波剛子

部活力高め交流楽しむ

部活を通じて、生徒の力を高め、交流を楽しむことができます。

先生と一緒に部活を行い、生徒の力を伸ばすことができました。

「部活」を通じて、生徒の力を高め、交流を楽しむことができました。

3年 津波剛子

授業改善で相簿方向上

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



授業改善で相簿方向上

授業の改善を通じて、生徒の学習成果が向上し、相簿の方向性も変わりました。

先生が授業を改善し、生徒の学習意欲を高めることができました。

「授業改善」を通じて、生徒の学習成果が向上し、相簿の方向性も変わりました。

3年 津波剛子

記者が自分ごとに関連

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



記者が自分ごとに関連

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「新聞が自分ごとに関連」を通じて、新聞の重要性を理解し、積極的に読むようになりました。

3年 津波剛子

記者が自分ごとに関連

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



記者が自分ごとに関連

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「記者が自分ごとに関連」を通じて、新聞の重要性を理解し、積極的に読むようになりました。

3年 津波剛子

記者が自分ごとに関連

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



記者が自分ごとに関連

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「記者が自分ごとに関連」を通じて、新聞の重要性を理解し、積極的に読むようになりました。

3年 津波剛子

記者が自分ごとに関連

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



記者が自分ごとに関連

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「記者が自分ごとに関連」を通じて、新聞の重要性を理解し、積極的に読むようになりました。

3年 津波剛子

記者が自分ごとに関連

3年総合 津波剛子・比嘉祐一敬樹



記者が自分ごとに関連

新聞が日常の生活に役立つ情報を提供してくれます。しかし、新聞の読み方を知らない生徒も多くいます。

生徒が考えた新聞読解案は、新聞の構造や内容を理解するためのヒントになります。

「記者が自分ごとに関連」を通じて、新聞の重要性を理解し、積極的に読むようになりました。

3年 津波剛子

「いまを開き 未来を拓くNIE」

公開授業・実践発表



公開授業の様子。生徒たちは積極的に参加している。

未来の担い手 共に育む

「いまを開き 未来を拓くNIE」は、地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みです。NIE（News in Education）は、教育現場で活用される新聞教材です。この取り組みを通じて、生徒たちは社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。



50年にサステナブル社会 実現へ日本も技術貢献を

吉野彰さん記念講演。50年にサステナブル社会を実現するために、日本も技術貢献をすることが重要です。講演では、持続可能な開発目標（SDGs）と日本の技術力について詳しく説明されました。



吉野彰さん。電池技術の発展に大きく貢献されています。

社会の出来事に関心 記者から多くの学び 求められる「提案力」

高村さん、中山さん、新地さん。記者からの学びは、NIEの提案力に繋がります。現場での取材経験や、社会問題への深い理解が、教材作成に活かされています。



記者と教育関係者の交流の様子。

宮城野中自治会小

地域の課題を解決し、未来を拓くための取り組み。NIEを活用し、生徒たちは社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。

社会の課題解決を模索

生徒たちは、NIEを通じて社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、環境問題や社会福祉に関する取り組みが紹介されています。

投稿で地域とつながり

生徒たちは、NIEを通じて地域とつながり、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、地域活性化や社会福祉に関する取り組みが紹介されています。

NIEの今後

NIEの今後の展開について、関係者は積極的な姿勢を示しています。地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みとして、NIEの活用が期待されています。

国産品を学ぶ中

国産品の魅力を学び、地域産業を支援するための取り組み。NIEを通じて、生徒たちは国産品の価値について学び、地域産業の発展に貢献しています。

AIと芸術 影響考察

AIと芸術の関係について考察し、創造性を高めるための取り組み。NIEを通じて、生徒たちはAIと芸術の融合について学び、創造性を高めるための取り組みが紹介されています。

目撃記事

目撃記事を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、社会問題に関する目撃記事が紹介されています。

頑張らず楽しく実践

実践を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、実践活動に関する取り組みが紹介されています。

NIEの今後

NIEの今後の展開について、関係者は積極的な姿勢を示しています。地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みとして、NIEの活用が期待されています。

生徒ならどは学校紹介

学校紹介を通じて、地域社会とつながり、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、学校紹介に関する取り組みが紹介されています。

情報見定める力 培う

情報を見定める力を培うための取り組み。NIEを通じて、生徒たちは情報を見定める力を培い、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。

目撃記事

目撃記事を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、社会問題に関する目撃記事が紹介されています。

頑張らず楽しく実践

実践を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、実践活動に関する取り組みが紹介されています。

NIEの今後

NIEの今後の展開について、関係者は積極的な姿勢を示しています。地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みとして、NIEの活用が期待されています。

和歌大新聞部出張中

和歌大新聞部が出張し、地域社会とつながり、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、和歌大新聞部出張に関する取り組みが紹介されています。

情報見定める力 培う

情報を見定める力を培うための取り組み。NIEを通じて、生徒たちは情報を見定める力を培い、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。

目撃記事

目撃記事を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、社会問題に関する目撃記事が紹介されています。

頑張らず楽しく実践

実践を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、実践活動に関する取り組みが紹介されています。

NIEの今後

NIEの今後の展開について、関係者は積極的な姿勢を示しています。地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みとして、NIEの活用が期待されています。

宮崎西高校出張中

宮崎西高校が出張し、地域社会とつながり、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、宮崎西高校出張に関する取り組みが紹介されています。

情報見定める力 培う

情報を見定める力を培うための取り組み。NIEを通じて、生徒たちは情報を見定める力を培い、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。

目撃記事

目撃記事を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、社会問題に関する目撃記事が紹介されています。

頑張らず楽しく実践

実践を通じて、社会問題について学び、問題意識を高め、解決策を模索しています。具体的な事例として、実践活動に関する取り組みが紹介されています。

NIEの今後

NIEの今後の展開について、関係者は積極的な姿勢を示しています。地域社会の課題を解決し、未来を拓くための取り組みとして、NIEの活用が期待されています。

地元宮崎の魅力を探究

宮崎大付属小の荒川ひかり教諭は「わたしと宮崎 宮崎の魅力再発見」をテーマに、6年生27人と新聞を活用した探求的な総合学習の授業を行った。

児童は、修学旅行で訪れた鹿児島県の魅力をもとめ、事前の新聞作りの経験に基づき、地元・宮崎の魅力は何かを考えた。県内、国内、海外の修学旅行生の様子を紹介する6本の記事を読んで、宮崎の魅力につながるキーワードを探し、「観光が自然とつながっていて、グリーンツーリズムなどが行われていた」などとグループで発表した。

授業を見学した教員からは「時間内に児童がかなりの本数の新聞記事を読みこなし、テン

宮崎大付属小6年 公開授業

ポ良くやりとりしていた」「教師が記事の内容を事前に知らない方が子どもたちの気付きや驚きにつながったのでは」などの感想が寄せられた。

同小の6年生は授業のほか週に1回、「NIEノート」に関心を持った記事を要約して見出しを付けたり、調べたことをまとめる活動に取り組んでいる。

荒川教諭はNIEの成果について「仲間と協力して、記事中のキーワードの共通点や相違点を見つけ、自分たちの言葉でまとめることが少いはずだった」と語った。

児童の岩下結実さんは「NIEで要約する力、インターネットや新聞から情報を得る力が付



子どもたちが新聞記事から宮崎の魅力を探った宮崎大付属小の公開授業＝5日、宮崎市・宮崎公立大

第27回NIE全国大会宮崎大会

県立宮崎大宮崎3年生 公開授業

より良い未来のために何かができるか。宮崎市・宮崎大高の五反田聡教諭の授業では3年生約30人が10年後の未来に向け、持参したスクラップ記事を参考に現状や課題を洗い出し、社会にどう貢献できるかを考えるワークショップを行った＝写真(川崎雅也撮影)。

郷土かるたを紹介した記事を取り上げて「住み続けられる宮崎」をテーマに議論したグループでは、本県に人口流出の課題があることを確認。自身が取り組むべき内容として「地産地消を心がける」「学校で郷土愛を



語る時間を設ける」などの意見を出し合った。個人でできることには限りがあるとしても、選挙の重要性を訴える意見も。長井折華さん(17)は「新聞を読んで社会に関心を持ち続けたい」と話した。(宮崎日日新聞社提供)

記事紹介上手さを競う

宮崎第一中学校の緒田浩輔教諭は、新聞とSDGs(持続可能な開発目標)を結び付けて社会の理解を深める複数の実践例を発表した。情報があふれる現代で確かな情報を選ぶ判断力を養おうと、学年や全校単位でNIEに取り組んでいる。

この学校はSDGs関連の新聞記事のスクラップノート作りに加え、記事への意見を英文文にすることで英語の授業にも生かしている。会場では読んでほしい記事をかき取り効果的に紹介する「シンプリオバトル」も実施。生徒3人が登壇し、お薦め記事を示しながら意見を述べた＝写真。

2年生は記事で知った身の回



りの社会問題を解決するため、実際に計画して行動する授業もある。コンビニに電話してマイバッグを持参する割合を調査した上で、持参を勧めるポスターを店頭に掲示したという。緒田教諭は「自転車で店を回って大変だったが、達成感もあったようだ。記事で現状を知り、自分事と捉え、社会に働きかける経験ができた」と強調した。

宮崎第一中 実践発表

宮崎公立大・宮崎日日新聞社 共同発表

記者から時事問題学ぶ

宮崎公立大と宮崎日日新聞社の共同発表では、同社の記者たちが講師を務める教養科目「時事問題ガイド」の実践からNIEの可能性を探った＝写真。

同ガイドは、学生が幅広く地域の課題を学び、将来のキャリア設計につなげることを目的に全15回を講義。地元の水産業の取材をライブワークにする須須貴芳報道部次長は「新聞社には政治や経済、事件・事故などを取材するいろいろな記者がおり、さまざまな思いがあって記事を書いている。新聞で身近にあることに興味を持ち、学問の種を見つけ、発展させてほしい」と述べた。

同大が受講生に実施した調査では「さまざまな分野の知識に



触れ、興味・関心が広がった」などの報告があった。同大2年の橋本実咲さんは「受講前は新聞を読む機会がなかった。インターネットでは自分の得たい情報だけだったが、新聞ではさまざまな知識を得ることができ、考えを深めることができる。コロナ下の不安定な時代だからこそ知識を得て、自分の意見を持つことが大事なんだと講義を通して学んだ」と発表した。

新聞の購読率低下を救え

自販機設置やアプリ開発 提案続々



新聞の購読率低下を救う。宮崎県立宮崎西高校と、同付属中学校の生徒は、主に若い世代に新聞がより読まれるようになる方法について「理解しやすく、聞き取りやすい」を心がけた「パブリック・ティート」方式で討論した。

公共交通機関への新聞の自動販売機の設置や、人気作家的連載小説の新聞限定掲載など、新しいアイデアが次々に飛び出した。

同付属中NIEに取り組み木幡佳子教諭が指導した高校1・2年生2つの計3チームが議論を交わした。それぞれ政策を

実践発表

宮崎西高と付属中 討論

パブリック・ティートの準備、発表チーム(奥)と別のチーム(手前)の参加者で質問と回答が繰り返される11日、宮崎公立大

ノーベル化学賞の吉野彰さん



吉野彰さんは、充電して何度使えるリチウムイオン電池を開発し、IT社会や持続可能な社会づくりに貢献したとして、2019年にノーベル化学賞を受賞した。記念講演では、生い立ちや電池開発までの過程を紹介し、若い世代へメッセージを送った。

未来へできること探して

可能社会づくりに貢献したとして、2019年にノーベル化学賞を受賞した。記念講演では、生い立ちや電池開発までの過程を紹介し、若い世代へメッセージを送った。

吉野さんは、マイケル・フアラデーのロバート・フレイミングの発見をきっかけとして、科学(化学)の道に進んだと語った。

ノーベル化学賞の賞状を手にして話す吉野彰さん(右)、宮崎市長文化ホール

経験語り若者へエール

「ゴールがあるという信念さえあれば乗り越えられる」と述べた。

若い世代へのメッセージとして、大隈万博が開かれる2025年、SDGsの目標達成期限である30年、脱炭素社会実現の目標年である50年の3つのマイルストーン(節目)を念頭に、「世界が変わっていく時に自分がなっているべきかを想像し、将来のために今からできることをやってみよう」と呼びかけた。

未来の科学者へ「脱炭素社会実現の具体的な方法をまだ誰も見つけていない。皆さんにはチャンスがある」とエールを送った。

2022年度沖縄県NIE実践報告書

2023年6月発行

発行 沖縄県NIE推進協議会（会長・仲村守和）

事務局 〒900-8678

沖縄県那覇市久茂地2-2-2

沖縄タイムス社NIE事業推進室内

電話：098-860-3553

FAX：098-860-3484

メール：times-nie@okinawatimes.co.jp